

八 盃 久 保 (2) 遺 跡  
八 盃 久 保 (3) 遺 跡  
幸 神 遺 跡

- 一般農道幸神線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 -

1997年3月

青森県教育委員会



八 盃 久 保 (2) 遺 跡  
八 盃 久 保 (3) 遺 跡  
幸 神 遺 跡

- 一般農道幸神線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 -

1997年3月

青森県教育委員会



## 序

青森県教育委員会では、農道（幸神線）建設事業に先立ち、平成7・8年度に倉石村八盃久保（2）遺跡・八盃久保（3）遺跡・幸神遺跡の発掘調査を実施しました。

八盃久保（2）遺跡・（3）遺跡は縄文時代後期の集落、幸神遺跡は縄文時代・平安時代の遺物包蔵地であることが、判明いたしました。

このたび、これらの遺跡の発掘調査報告書がまとまり、これを刊行することとなりましたが、この調査成果が、今後、地域の歴史を知る手がかりとなり、文化財の保護・活用などに役立つところがあれば幸いに存じます。

ここに、発掘調査に参加された調査指導員をはじめ、埋蔵文化財の発掘調査にご理解を頂いている青森県農林部、種々ご指導いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

青森県教育委員会

教育長　松森永祐

## 例　言

- 1 本報告書は、平成7・8年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した一般農道幸神線建設事業に係る八戸久保（2）遺跡・八戸久保（3）遺跡・幸神遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の2万5000分の1の地形図の「五戸」「金ヶ沢」「切田」「剣吉」である。
- 3 石器の石質鑑定は、松山力氏（八戸市文化財審議委員）に依頼した。
- 4 挿図の縮尺は各図ごとにスケールを付してある。写真的縮尺は不統一である。
- 5 遺構・遺物の文・図中の表現は、原則として次の様式・基準によった。
  - (1) 図中の方位は真北である。
  - (2) 土層の注記には「新版標準土色帳」（小山・竹原：1995）を用いた。
  - (3) 遺物には観察表・計測値を付し、出土地点、法量、及び諸特徴を一覧できるようにした。なお、計測値の（）は、現存値である。
  - (4) 図中で使用したスクリーントーンの表示は次の通りである。

遺構  焼土

遺物  スリ  タタキ・クボミ

- 6 繩文原体に関する用語は『日本先史土器の縄文』（山内清男 1969）に準拠した。観察表中で略して用いたものは次のとおりである。  
0段多条→0多
- 7 石器の石質は、観察表中で略して表記したものもある。用例は次のとおりである。  
玉隨質の珪質頁岩→玉珪
- 8 発掘調査にかかる出土遺物・写真・図面等は青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 9 本書の編集は、調査担当者のうち中村が行った。
- 10 発掘調査・本報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏からご協力ご指導を得た。  
秋田県埋蔵文化財センター、岩手県埋蔵文化財センター、小笠原善範、児玉大成、滝沢村教育委員会、八戸市教育委員会、八戸市博物館

## 目次

序		第1節 遺跡の層序	… 113
例言		第2節 検出遺構と	
目次		出土遺物	… 114
[八戸久保(2)遺跡]		第3節 遺構外出土遺物	… 116
第1章 調査要項・調査		第4節 まとめ	… 116
経過・調査方法		写真図版	… 121
第1節 調査要項	… 1	報告書抄録	
第2節 調査経過・			
調査方法	… 2		
第2章 遺跡の地理・		図版目次	
地形・層序		八戸久保(2)遺跡	
第1節 遺跡の地理・		図 1 遺跡位置図	
地形	… 6	図 2 グリッド・遺構配置図	
第2節 遺跡の層序	… 8	図 3 基本層序	
第3章 検出遺構と		図 4 第1号住居跡実測図	
出土遺物		図 5 第1号住居跡出土遺物実測図(1)	
第1節 繩文時代の遺構	… 9	図 6 第1号住居跡出土遺物実測図(2)	
第2節 時期不明の遺構	… 52	図 7 第1号住居跡出土遺物実測図(3)	
第4章 遺構外出土遺物		図 8 第1号住居跡出土遺物実測図(4)	
第1節 繩文時代の遺物	… 58	図 9 第1号住居跡出土遺物実測図(5)	
第5章 調査の成果と考察		図 10 第1号土坑実測図	
第1節 検出遺構に		図 11 第2号土坑実測図	
ついて	… 72	図 12 第3号土坑実測図及び	
第2節 出土遺物に		出土遺物実測図	
ついて	… 74	図 13 第4号土坑実測図	
引用・参考文献	… 76	図 14 第4号土坑出土遺物実測図	
写真図版	… 77	図 15 第5号土坑実測図及び	
[八戸久保(3)遺跡・幸神遺跡]		出土遺物実測図	
第1章 調査要項・調査		図 16 第6号土坑実測図及び	
経過・調査方法		出土遺物実測図	
第1節 調査要項	… 99	図 17 第7号土坑実測図及び	
第2章 遺跡の地理・地形	… 100	出土遺物実測図	
第3章 八戸久保(3)遺跡		図 18 第8号土坑実測図及び	
第1節 遺跡の層序	… 105	出土遺物実測図	
第2節 検出遺構と		図 19 第9号土坑実測図及び	
出土遺物	… 106	出土遺物実測図	
第3節 遺構外出土遺物	… 108	図 20 第10号土坑実測図	
第4節 火山灰の		図 21 第11号土坑実測図	
科学的分析	… 111	図 22 第12号土坑実測図	
第5節 まとめ	… 112	図 23 第12号土坑出土遺物実測図(1)	
引用・参考文献	… 112	図 24 第12号土坑出土遺物実測図(2)	
第4章 幸神遺跡		図 25 第12号土坑出土遺物実測図(3)	
		図 26 第12号土坑出土遺物実測図(4)	
		図 27 第13号土坑実測図及び	
		出土遺物実測図	

- 図 28 第14号土坑実測図  
 図 29 第16号土坑実測図  
 図 30 第16号土坑出土遺物実測図  
 図 31 第17号土坑実測図  
 図 32 第18号土坑実測図  
 図 33 第19号土坑実測図及び  
 出土遺物実測図  
 図 34 第19号土坑出土遺物実測図  
 図 35 第20号土坑実測図  
 図 36 第21号土坑実測図  
 図 37 第22号土坑実測図及び  
 出土遺物実測図  
 図 38 第23号土坑実測図及び  
 出土遺物実測図  
 図 39 第1号埋設土器実測図  
 図 40 捨て焼土実測図  
 図 41 捨て場出土遺物実測図(1) 土器  
 図 42 捨て場出土遺物実測図(2) 土器  
 図 43 捨て場出土遺物実測図(3) 土器  
 図 44 捨て場出土遺物実測図(4) 土器  
 図 45 捨て場出土遺物実測図(5) 土器  
 図 46 捨て場出土遺物実測図(6) 土器  
 図 47 捨て場出土遺物実測図(7) 土器  
 図 48 捨て場出土遺物実測図(8) 土器  
 図 49 捨て場出土遺物実測図(9) 土器  
 図 50 捨て場出土遺物実測図(10) 土器  
 図 51 捨て場出土遺物実測図(11) 土器  
 図 52 捨て場出土遺物実測図(12) 土器  
 図 53 捨て場出土遺物実測図(13)  
 土器・土製品  
 図 54 捨て場出土遺物実測図(14) 石器  
 図 55 第1号溝状ピット実測図  
 図 56 ピット群実測図(1)  
 図 57 ピット群実測図(2)  
 図 58 道路状遺構実測図  
 図 59 第15号土坑実測図  
 図 60 焼土実測図  
 図 61 遺構外出土遺物実測図(1) 土器  
 図 62 遺構外出土遺物実測図(2) 土器  
 図 63 遺構外出土遺物実測図(3) 土器  
 図 64 遺構外出土遺物実測図(4) 土器  
 図 65 遺構外出土遺物実測図(5) 土器  
 図 66 遺構外出土遺物実測図(6)  
 土器・土製品  
 図 67 遺構外出土遺物実測図(7) 石器  
 図 68 遺構外出土遺物実測図(8) 石器  
 図 69 遺構外出土遺物実測図(9) 石器  
 図 70 遺構外出土遺物実測図(10) 石器  
 図 71 遺構外出土遺物実測図(11)  
 石器・石製品  
 図 72 文様モチーフ分類図
- [八盃久保(3)遺跡・幸神遺跡]
- 図 1 八盃久保(3)遺跡  
 グリッド・遺溝配置図(1)  
 図 2 八盃久保(3)遺跡  
 グリッド・遺溝配置図(2)  
 図 3 幸神遺跡グリッド・  
 遺溝配置図(1)  
 図 4 幸神遺跡グリッド・  
 遺溝配置図(2)
- 八盃久保(3)遺跡
- 図 5 基本層序(1)  
 図 6 基本層序(2)  
 図 7 第1号土坑実測図  
 図 8 地滑り跡土層断面  
 図 9 遺構外出土遺物実測図(1) 土器  
 図 10 遺構外出土遺物実測図(2) 土器  
 図 11 遺構外出土遺物実測図(3) 石器  
 図 12 遺構外出土遺物実測図(4)  
 石器・石製品
- 幸神遺跡
- 図 13 基本層序  
 図 14 第1号土坑実測図及び  
 出土遺物実測図  
 図 15 第1・2号溝実測図及び  
 出土遺物実測図  
 図 16 遺構外出土遺物実測図(1) 土器  
 図 17 遺構外出土遺物実測図(2)  
 土器・石器  
 図 18 遺構外出土遺物実測図(3) 石器

## 〔八戸久保(2)遺跡〕

### 第1章 調査要項、調査経過、調査方法

#### 第1節 調査要項

##### 1 調査目的

一般農道幸神線建設事業に先立ち、当該地区に所在する八戸久保(2)遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

##### 2 発掘調査期間 平成7年4月26日～同年6月30日まで

##### 3 遺跡名および所在地 八戸久保(2)遺跡（青森県遺跡番号 66030） 三戸郡倉石村大字中市字八戸久保5、外

##### 4 調査面積 1900m<sup>2</sup>

##### 5 調査委託者 青森県農林部農地建設課

##### 6 調査受託者 青森県教育委員会

##### 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

##### 8 調査協力機関 倉石村教育委員会、三八教育事務所

##### 9 調査参加者 調査指導員 村越 澄 青森大学教授

調査協力員 畠山 春雄 倉石村教育委員会教育長

調査員 鹤澤 幸長 八戸市文化財審議委員 (考古学)

七崎 修 元県立八戸北高等学校教諭 (地質学)

橋本 正信 県立田子高等学校教頭 (考古学)

小林 和彦 八戸市郷土文学館主査兼学芸員 (動物考古学)

##### 調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

##### 調査第二課長 鈴木 克彦

##### ・総括主幹

主　　査　　伊藤 昭雄

主　　事　　中村 哲也

調査補助員 高橋 昌也

山田 尚美

田中 美鈴

内藤 一将

## 第2節 調査経過・調査方法

### 調査経過

一般農道幸神線建設事業に伴い、県教育庁文化課は、平成4年度に詳細分布調査を実施し、路線内に八戸久保(2)、八戸久保(3)、幸神の3遺跡が所在することを確認した（青森県教委 1993c）。これをうけて、平成7年度に八戸久保(2)遺跡の発掘調査を実施することとなった。

調査区は現に生活道路・畑として使用されており、事務所設置場所・排土置き場の確保が困難であった。このため、調査事務所は調査区から南西方向に約300m離れた工事路線内に設置した。また、排土置き場は、倉石村産業課・地権者の協力を得て、隣接する畠地を借地した。

4月26日より調査を開始した。前述のように、調査区中央に調査区と平行した生活道路が存在し、車両の通行を確保する必要があった。そのため調査は、終了部分に道路を振り替えながら行うこととし、まず、11ライン～40ライン付近までは生活道路の南側、40～48ラインぐらいまでは生活道路の北側から粗掘を開始した。10ライン以東は、調査区の両側に宅地が近接し、車両の通行を確保しながら調査を進めることができたため、調査を行わなかった。

25ライン以東は順調に粗掘が進んだものの、それ以西は生活道路改修のための盛土、畠地整備のための盛土が認められ、造構面までの掘進に時間を要した。

6月6日、道路の付け替えを開始し、道路付け替え終了部分から粗掘を開始した。同7日道路付け替えを終了した。

28ラインから33ライン付近は、弱い谷地形に当たり、生活道路補修のための盛土が厚く、掘進に時間を要した。

6月19日、第2号住居跡（整理段階で第1号住居跡と改称）の精査を開始した。車両の通行に必要な幅員を確保できなかったため、事前に地元教育委員会と協議して通行止めとして精査することとし、地元住民への通知を依頼した。

6月26日には一部を残して精査を終了し、人力により、埋め戻しを開始した。

6月28日には重機及び人力による埋め戻しを行い、6月30日に埋め戻しを終了し、調査を終えた。

### 調査方法

調査区域内に存在する工事用測量杭のうち、No.6とNo.12のセンター杭を結んでグリッドの基準線とし、No.6のセンター杭を通り、この基準線に直交するラインにより4m×4mのグリッドを設定した。No.6とNo.12を含む各幅杭は平面直角座標第X系の座標値、センター杭までの距離が与えられており、これによりセンター杭の座標値を算出すれば、No.6 (X=56200.9372, Y=35816.8724) No.12 (X=56131.2571, Y=35721.6973) である。

グリッドの呼称は、センター杭を結んだ基準線に平行する線をアルファベットA、B、C…で、これに直交する線を算用数字1、2、3…で表し、この交点をA-12、G-30のように表記した。この結果、No.6センター杭は、F-15と表記されることとなった。グリッド名は、南側のグリッドライン交点をもって命名した。

水準点は、工事用のB.M. 1 (標高 85.540m) を基準として調査区内に数ヶ所移設した。

粗掘は人力により行い、土層が変化するごとに遺構確認を行った。土層観察用のトレンチは遺構確認を行った段階でより下位の土層を確認するため適宜設定した。

遺構外出土遺物は、グリッド単位で層序毎に取り上げた。

遺構は、原則として住居は四分法、土坑は二分法で精査を行ったが、必要に応じてセクションベルトをもうけた。実測は簡易通り方測量で行った。縮尺は原則として20分の1とした。遺構の呼称は種別ごとに検出順、あるいは調査着手順に命名した。命名後、攪乱であることが判明した場合、あるいは別種遺構であることが判明し、命名し直した場合などは、元の番号は現場では欠番として扱った。

土層の名称は、基本層序については表土から下位に向けて順にローマ数字を、遺構については上位から下位に向けて順に算用数字を付した。土色は新版標準土色帳（小川忠正・竹原秀夫 1995）を用いて表記した。

写真撮影は35mm版カメラを用い、カラーリバーサルフィルム・モノクロームフィルムの二種類のフィルムを使用した。適宜カラーネガフィルムを併せて用いた場合もある。

#### 整理の方法

出土遺物は、調査担当者のうち、伊藤の指示により注記・復元を行った。注記は現場での注記をそのまま採用した。住居跡出土遺物は現場で出土位置を記録して取り上げたが、この段階で土器番号を注記しなかったため、出土位置が不明となったものもある。その後、中村の指示により実測図を作成した。

遺構番号は、欠番を埋めるよう種別ごとに1番から命名し直したため、注記の遺構番号と本書の遺構番号とが一致しない場合がある。そのため、第3章に対照表を付した。

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・幸神遺跡



図1 遺跡位置図 ( $S = 1/25,000$ )

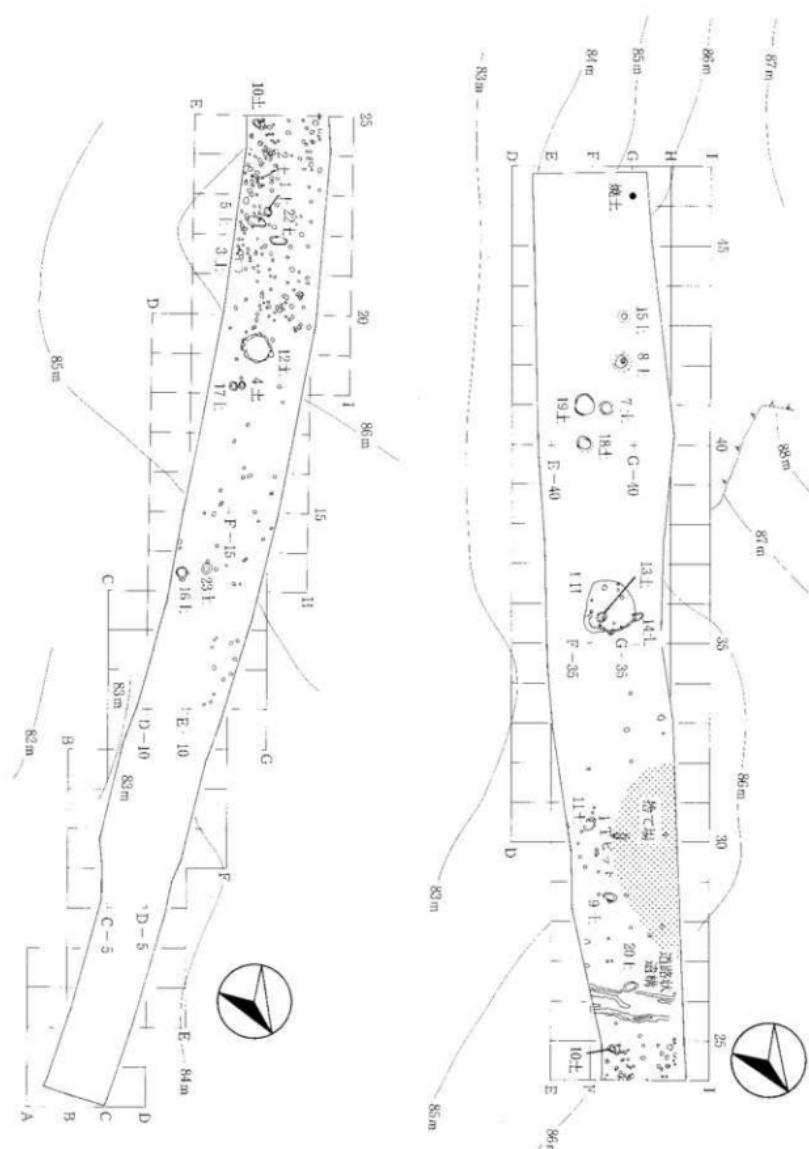


図2 グリッド・遺構配置図 (S = 1/500)

## 第2章 遺跡の地理・地形・層序

### 第1節 遺跡の地理・地形

本遺跡の所在する倉石村は、青森県南東部の内陸に位置する。海岸線からの距離は、直線距離で約20kmである。本地域は、十和田湖付近に源を発し、太平洋へと注ぐ河川群が平行して流れ、これに沿って段丘地形が発達する。本地域の段丘群は、高位から低位へと、天狗岱段丘、高館段丘、根城段丘、田面木段丘、名久井段丘などに区分されている（大池・中川 1979）。名久井段丘は、厚さ数m～10mの浮石質砂礫層を構成層とし、上位に完新世火山灰をのせる。田面木段丘は、構成層は厚さ数mの礫層で、その上位に高館火山灰上部、八戸火山灰、完新世火山灰の各層がそれぞれ下位層を不整合に覆って重なる。根城段丘は、八戸市根城付近を模式地とする。本地域内では、五戸川下流南岸にのみ見られる。構成層は数m～10数mの厚さの礫層で、上位に整合・漸移的に高館火山灰の中・上部、およびさらに上位の火山灰をのせる。高館段丘は、八戸市高館付近の高さ約40mの平坦面を模式地とし、河谷沿いに上流方へ高まり、三戸町城山付近では120mに達する。高館火山灰・八戸火山灰、および完新世火山灰に覆われる。

倉石村周辺は、標高200～250m前後の丘陵地と、五戸川沿いの段丘地形に区分できる。本遺跡は東流する五戸川北岸の段丘上に立地する。五戸町中心部の西南西、約4.5kmに位置する。（大池・中川 1979）によれば、本遺跡の立地する段丘は名久井段丘に相当するとされている。しかし、発掘調査では後述するように、1地点で八戸火山灰・高館火山灰を確認した。従って、段丘区分では、田面木段丘ないしはそれより高位の段丘に相当すると考えられ、少なくとも、段丘面すべてが名久井段丘とはいえないことが判明した。

基盤は、鮮新統斗川層である。この上に腐植土層・十和田a火山灰・十和田b浮石・中揮浮石（通称アズナ）・南部浮石（通称ゴロタ）、八戸火山灰、高館火山灰を乗せている。このうち、南部浮石、十和田b浮石、十和田a浮石は成層状態はない。

この段丘は遺跡付近で標高85m前後で、北から南へと緩やかな傾斜が認められる。微地形的に見れば、五戸川に直交するかたちで微弱な尾根地形と谷地形が交互に繰り返され、緩やかな起伏が認められる。遺跡は緩やかな尾根地形上に占地している。さらに微視的にみれば、調査区中央には微弱な谷があり、これを挟む2つの尾根からなる。

なお、本項を執筆するに当たり、七崎修調査員からご指導・ご教示を頂いた。

### 第2節 遺跡の層序

遺跡内の基本土層は、I～Xの10層に区分された。部分的に盛土が認められ、これを合わせれば合計11層になる。

I層 黒褐色土(10YR2/2) 層厚20～30cmの耕作土。しまりがない。

II層 黒色土(10YR1.7/1～N1.5/0) 砂質シルト。十和田b火山灰、φ1mm前後の中揮浮石を含む。谷部では、十和田b火山灰のみを含むIIa層と、中揮浮石のみを含むIIb層に分層できる。尾根部ではこれを明瞭に識別することは困難である。

III層 黒色土(10YR2/1) 砂質シルト。II層と同質の土層。上層より若干黒味が弱い。上下の層と明瞭に区分することはできず、漸移的である。土色による分層が調査区内全域にわたって等質の時間差を有しているとはいいがたい。

IV層 明黄褐色浮石(10YR6/6) 中揮浮石層。層厚は厚い所で約60cmを計る。調査区内のはば全域にわたって分布する。ただし、40ライン付近から西側では削平をうけて、分布しないところもある。

V層 黒褐色土(10YR2/2) 粘土質シルト。しまりあり。φ1cm前後の黄褐色浮石を均質に含む。

VI a層 暗褐色土(10YR3/4) 粘土質シルト。φ5mm前後の黄褐色浮石を中量均質に含む。上層とは漸移的である。

VI b層 暗褐色土(10YR4/4) 粘土質シルト。上位はしまりあるが、下位に行くにつれ柔らかくなる。φ3cm以下の灰白色浮石を含む。

VII a層 黄褐色火山灰土(10YR5/6) φ2cm以下の黄褐色浮石中量含む。堅くしまっている。

VII b層 明黄褐色火山灰土(10YR5/8) 堅くしまっている。

VII c層 黄褐色浮石(10YR6/6) φ1cm前後のものが多い。最大5cm。φ5mm前後の褐灰色火山礫を多量含む。

VII d層 明黄褐色火山灰土(10YR6/6) 粘土質。VII a層との境界付近3cmはφ5mmの褐灰色火山礫少量含む。

VII e層 灰褐色火山灰土(10YR8/2) φ3cm以下の灰白色火山灰土。φ5mmの褐灰色火山礫少量含む。

IX層 にぶい黄褐色土(7.5YR3/3) 粘性あり。

X層 明黄褐色火山灰土(10YR6/6) 粘土質。

盛土 29ライン以西に認められた。谷部では、斜面上方から流れ込んだか、人為的に畑地に盛られたものと判断される。34ライン以西では、旧地形が削平され、畑地を造成したものと考えられ、これに伴う盛土が認められた。

VII層以下は、土坑の壁を利用して確認した。調査区全域に分布するかどうかは不明である。VII層は八戸火山灰に、X層は高館火山灰に相当する。

基本層序のうち遺物を含むのはI～III層までで、主な遺物は縄文時代後期のものである。上述のようにII・III層の土色は漸移的に変化し、土色の相違が調査区全体にわたって等質な時間差を保証するものではない。分層することが不適当であったと考えている。

遺物の出土状況から判断して、生活面はII・III層中、就中II b層・III層中であったと考えられる。

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・辛神遺跡

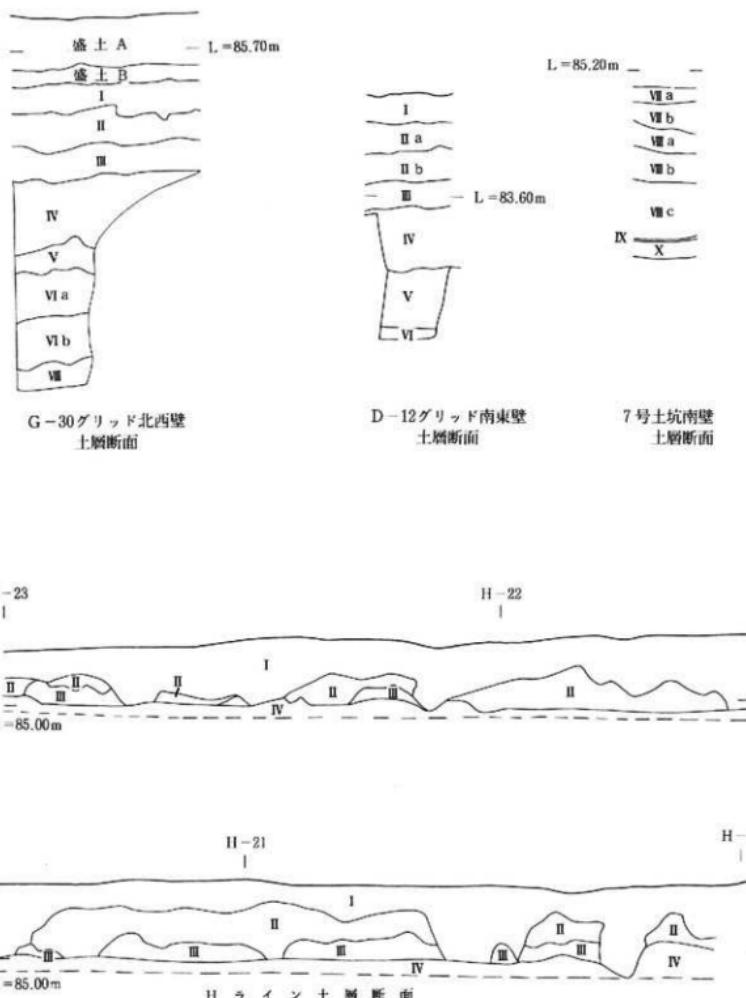


図3 基本層序 ( $S = 1/40$ )



## 第3章 検出遺構と出土遺物

縄文時代の遺構は、住居跡1軒、土坑22基、捨て場1カ所、捨て焼土1基、Pit多数が検出された。時期不明の遺構は、溝状ピット1基、焼土1基、道路状遺構1基が検出された。

本書での遺構名は、第1章第2節でも述べたように、現場段階での欠番を埋めるよう、遺構番号を変更した。詳細は以下の対照表に示す。

現場段階での名称	本報告書での名称	注記
1号住居跡	燒土	
2号住居跡	1号住居跡	2H
3号住居跡	1・2号土坑	3H or 25土
1号土坑	1号土坑	1±
2号土坑	2号土坑	2±
3号土坑	3号土坑	3±
4号土坑		4±
5号土坑	5号土坑	5±
6号土坑	6号土坑	6±
7号土坑	7号土坑	7±
8号土坑	8号土坑	8±
9号土坑	9号土坑	9±
10号土坑	10号土坑	10±
11号土坑	11号土坑	11±
12号土坑		12±
13号土坑		13±
14号土坑		14±
15号土坑	15号土坑	15±
16号土坑	16号土坑	16±
17号土坑	17号土坑	17±
18号土坑	18号土坑	18±
19号土坑	19号土坑	19±
20号土坑	20号土坑	20±
21号土坑	21号土坑	21±
22号土坑	22号土坑	22±
23号土坑	23号土坑	23±
24号土坑	4号土坑	24±
25号土坑	12号土坑	25±
26号土坑	13号土坑	26±
27号土坑	14号土坑	27±
捨て場	捨て場	
焼土跡	焼土	
道路状遺構	道路状遺構	
1号Tピット		
2号Tピット	1号溝状ピット	2 T

### 第1節 縄文時代の遺構

#### 第1号住居跡

[位置] F-36・37、G-36・37に位置する。

[確認] 付近は削平を受けていたためIV層・V層中で確認した。

[重複] 13号土坑・14号土坑と重複し、14号土坑より新しく、13号土坑より古い。

[平面形] 円形を基調とするが、一部が突出し、洋梨型を呈する。

[規模] 長軸5m78cm、単軸5m28cmを計る。後述する溝状施設を除いた床面積は約19.3m<sup>2</sup>である。

[堆積土] 5層に細分された。いずれもアワズナが混入する黒色・黒褐色土で、自然堆積の可能性が高い。

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・半神遺跡

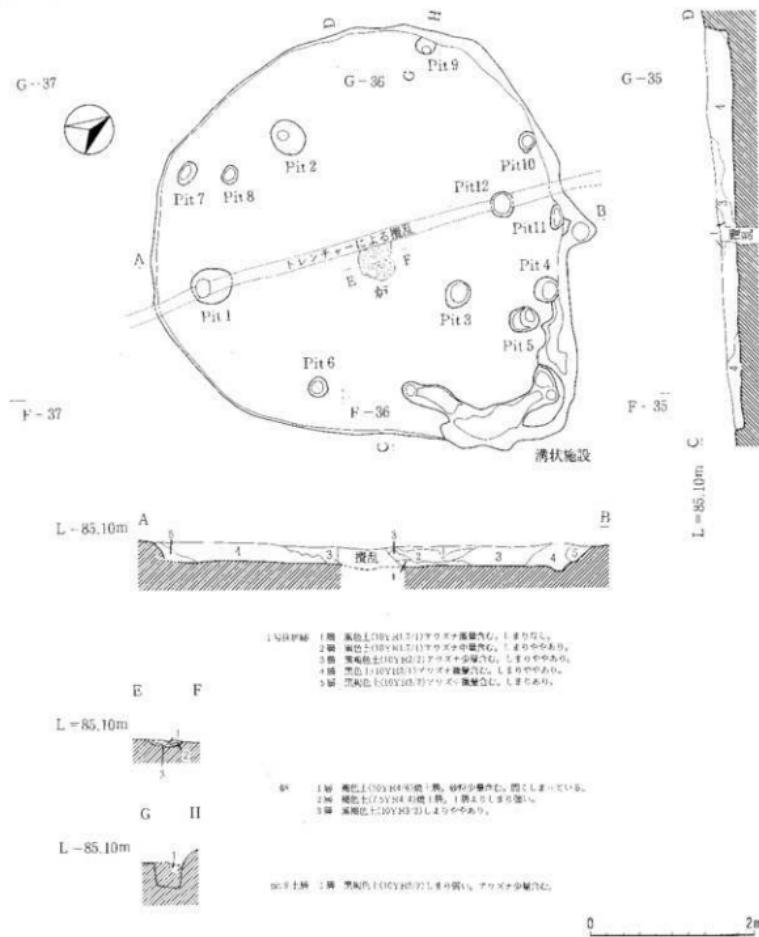


図4 第1号住居跡実測図

pits調査表

pits番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
深さ(cm)	67	72	77	28	28	26	38	18	10	16	10	20

[壁] 斜面上方に当たる北側では、ほぼまっすぐに立ち上がる。壁高は約30cmである。西側はやや斜めに立ち上がる。南側は、斜面下方に当たるため依存状況が悪く、壁高は10cm以下である。北側は、削平を受けていたため、本来の壁高は現存値より高かったものと考えられる。

[床面] V a層を床面とし、比較的軟弱であった。

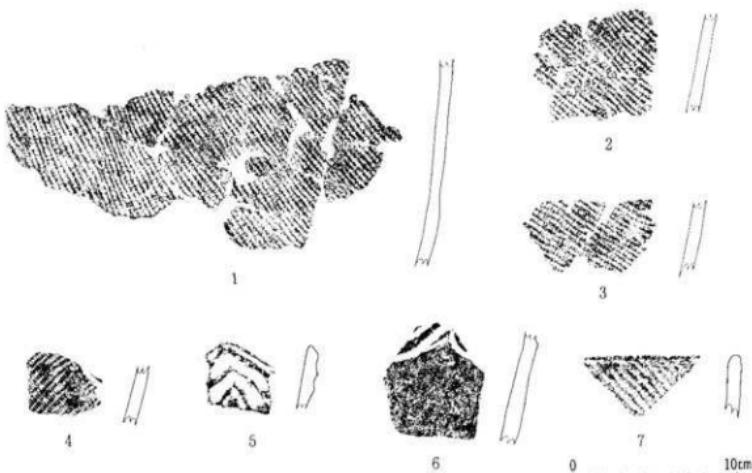
〔柱穴〕 床面から、12個の柱穴が検出された。配置・規模からみてpit1～3が主柱穴と考えられる。住居中心方向に向かってわずかに傾いていた。pit3は、14号土坑に切られているため、残存する深さを示したが、床面からの深さは約80cm程度になると考えられる。pit4～pit11は壁柱穴の可能性が高い。いずれも鉛直方向に掘り込まれていた。

〔炉跡〕 床面の中央にはほぼ円形の地床炉を検出した。掘り込みは認められず、床面が赤変していた。

〔その他の施設〕 東側に溝状の掘り込みが認められた。掘り込みは壁に接し、このため平面形の一部が張り出している。底面は不整で、柱穴は認められなかった。深さは、掘り込みの両端ほど浅く、床面から15cm程度で、中央部付近が最も深く、床面から20～25cm程度である。

〔出土遺物〕 床面・覆土からII群土器、石器9点が出土した。5は断面三角形の縁帶を施す。8は紐掛け突起が付される鉢形土器で、沈線施文後ミガキを施す。9は断面三角形の縁帶を施す波状口縁である。10～16は、沈線により曲線的な文様を施すものである。11は無文地に沈線文様を施す。12～16は地文繩文の沈線文手法による。42・43は無文地で、器表面が研磨されている。器壁は薄く、3～4mmである。胎土に金雲母が含まれている。繩文のみを施す土器は、0段多条原体を縦位回転したものが多い。68は、土器片利用の円盤状土製品、59はミニチュア土器である。

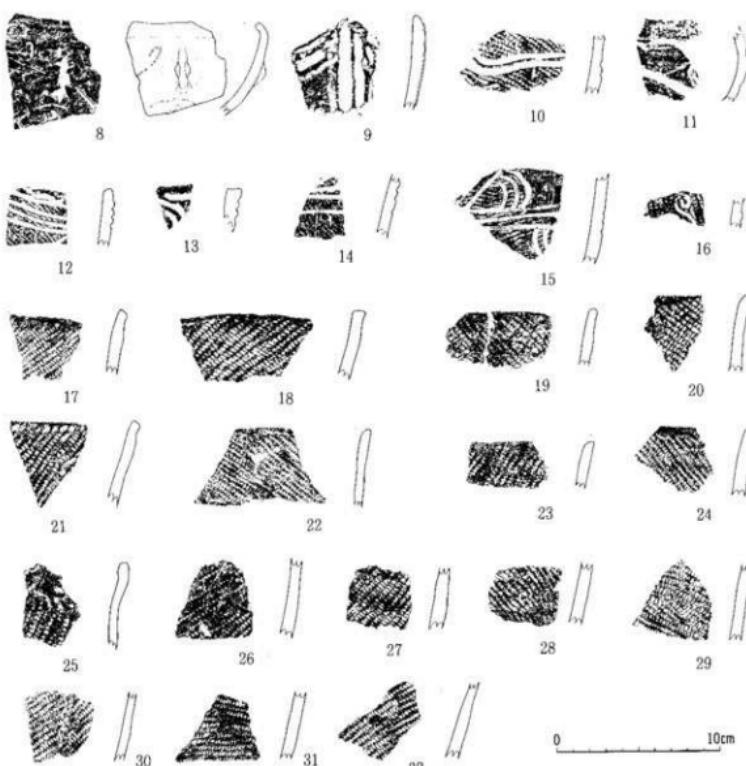
〔時期〕 床面より出土したII群土器（後期初頭の土器）と同時か、より古い。



剖面番号	出土位置	種類	内面施文又は下	内面測定	分類	基準	ノ
5-1	1号	床面×4	①多孔隙層	トテ IV-1			
5-2	1号	床面×4	②多孔隙層	トテ IV-1			
5-3	1号	床面×4	③多孔隙層	トテ IV-1			
5-4	1号	床面×4	④多孔隙層	トテ IV-1			
5-5	1号	床面×4	⑤多孔隙層	トテ IV-1			
5-6	1号	床面×4	⑥多孔隙層	トテ IV-1			
5-7	1号	床面×4	⑦多孔隙層	トテ IV-1			
		p12	縫合	ナガ D-2			
		遺物	縫合	ナガ D-3			
		遺物	縫合	ナガ D-3			

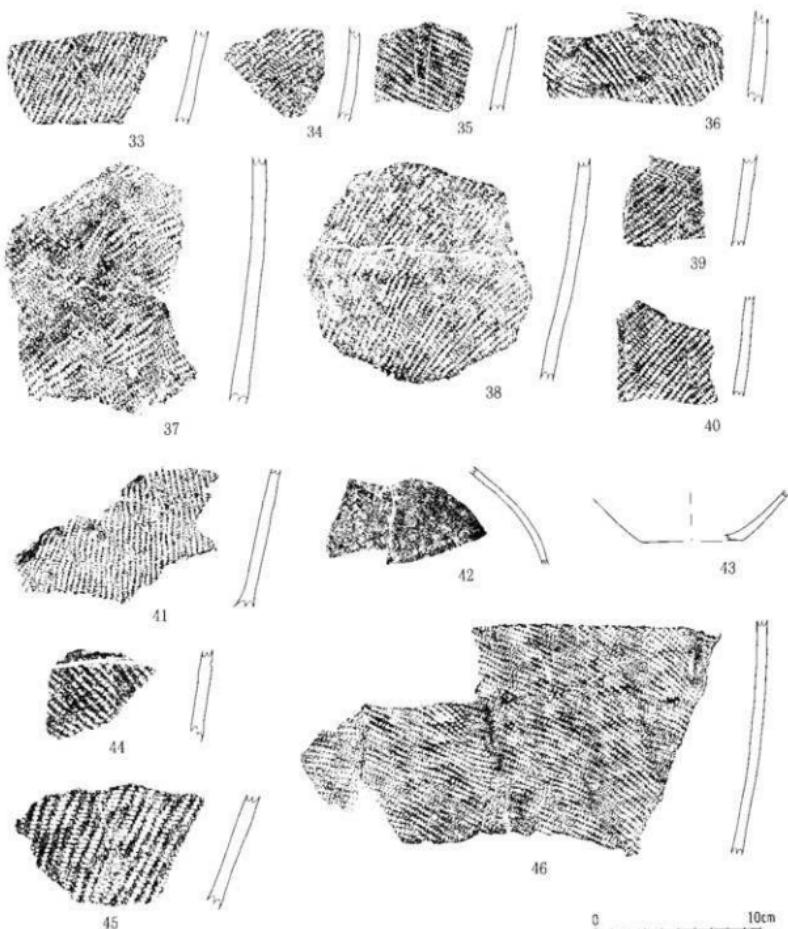
図5 第1号住居跡出土遺物実測図(1)

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・赤神遺跡



図版番号	出土位置	層	外山陶文様等	内部構造	分類	備考
6-1	1号	3	無	LH底	ナゲ	
6-2	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-3	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-4	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-5	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-6	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-7	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-8	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-9	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-10	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-11	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-12	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-13	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-14	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-15	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-16	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-17	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-18	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-19	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-20	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-21	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-22	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-23	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-24	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-25	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-26	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-27	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-28	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-29	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-30	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-31	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	
6-32	1号	3	無	ナゲ	ナゲ	

図6 第1号住居跡出土物実測図(2)



図版番号	柱位置	層位	外在施文文様方	内部跡形	分類	通 考
T-33	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-34	1H	4	0L織目	ナゲ	N-1	
T-35	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-36	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-37	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-38	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-39	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-40	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-41	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-42	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-43	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-44	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-45	1H	4	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-46	1H	3	0多山L織目	ナゲ	N-1	
T-47	1H	3	ナゲ	ナゲ	S-1	断面上に金葉模様
T-48	1H	3	ナゲ	ナゲ	S-2	
T-49	1H	3	L織目→沈縫	ナゲ	S-1-a	
T-50	1H	3	0多山L織目	ナゲ	N-1	

図7 第1号住居跡出土遺物実測図(3)

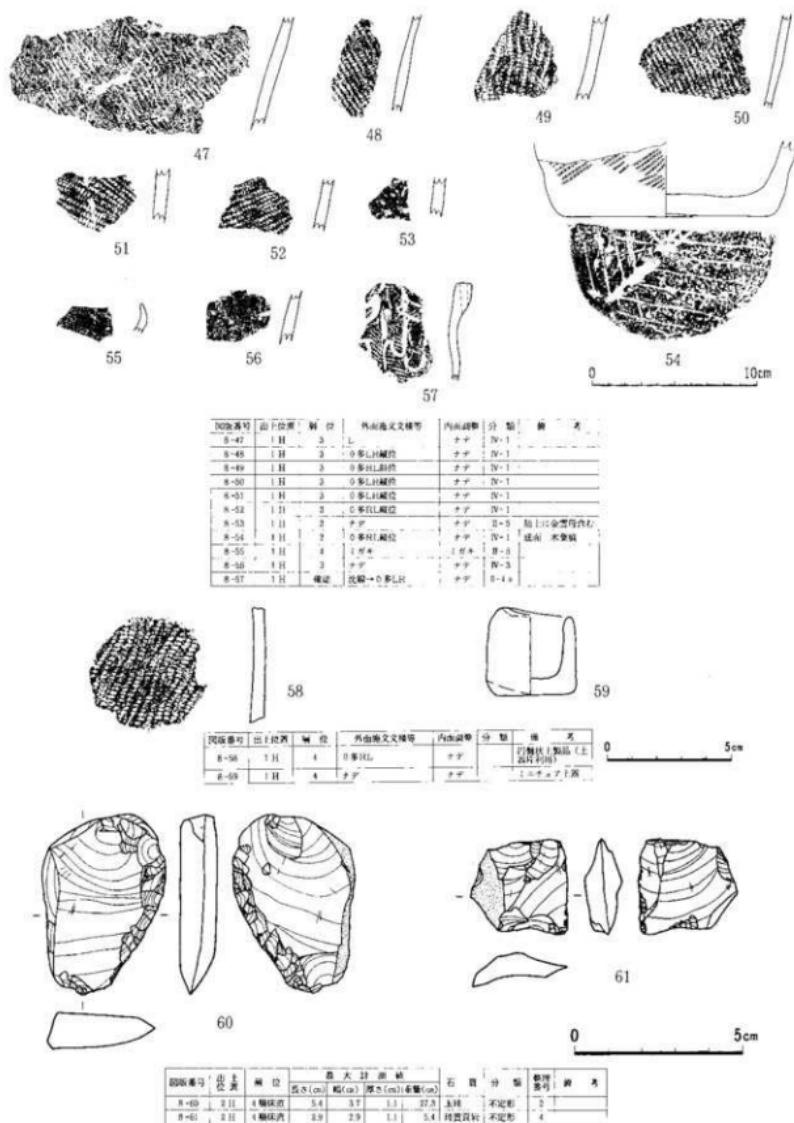
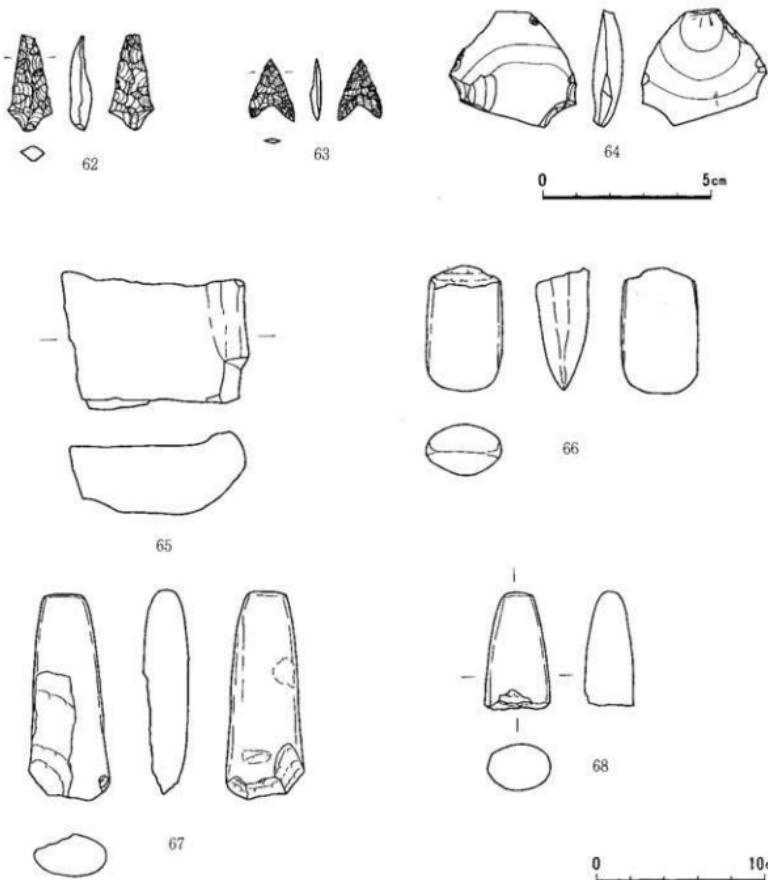


図8 第1号住居跡出土遺物実測図(4)



図版番号	材質	形状	最大・汎用・横				石質	分類	重量(g)	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
9-62	2.1I	鉄製骨牌	2.9	1.3	0.6	1.7	珪質頁岩	石牌	7	
9-63	2.1I	鉄製骨牌	1.9	1.3	0.5	0.4	赤泥岩	石牌	6	
9-64	2.1I	4箇点式	3.6	3.8	0.9	10.4	珪質頁岩	不定形	3	
9-65	2.1I	4箇点式	11.0	8.7	4.9	422.3	砂利岩	不定形	38	
9-66	2.1I	鉄製骨牌	(7.0)	(4.5)	(3.1)	(149.7)	珪質頁岩	石牌	6	
9-67	2.1I	4箇点式	12.5	4.7	2.7	274.5	珪質頁岩	不定形	5	
9-68	2.1I	4箇点式	(7.0)	(3.0)	(0.9)	(10.1)	珪質頁岩	石牌	9	

図9 第1号住居跡出土遺物実測図(5)

### 第1号土坑

【位置】 F-23に位置する。

【確認】 IV層上面で黒色土の円形の落ち込みを確認した。

【平面形】 円形を呈する。

【規模】 径88cm、深さ25cmを計る。

【堆積土】 3層に分層された。

【壁】 若干開き気味に立ち上がる。

【底面】 IV層を底面とし、平坦である。

【出土遺物】 堆積土からIV群（後期初頭～前葉）土器の細片が1片出土した。

【時期】 不明。



図10 第1号土坑実測図

### 第2号土坑

【位置】 F-24に位置する。

【確認】 IV層上面で黒色土の半円形の落ち込みを確認した。

【平面形】 円形を呈するものと思われる。

【規模】 径1m05cm、深さ47cmを計る。

【堆積土】 5層に分層された。自然堆積の可能性が高い。

【壁】 若干開き気味にたちあがる。

【底面】 V a 層を底面とし、平坦である。

【出土遺物】 堆積土からII（後期初頭）ないしIII群（後期前葉）土器の細片1片が出土した。

【時期】 不明。

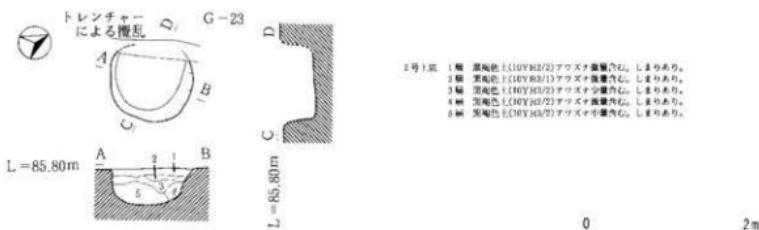


図11 第2号土坑実測図

## 第3号土坑

- [位置] F-22に位置する。
- [確認] IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。
- [平面形] トレンチャーによる搅乱を受けたため全形は不明だが、円形であったと推定される。
- [規模] 遺存部で、径1m40cmを計る。深さは25cmである。
- [堆積土] 黒色土で、ブロック状にアワズナ（基本層序IV層の構成層）を含む量の多い土層が認められた。人為的な堆積の可能性が考えられる。
- [壁] やや開き気味に立ち上がる。
- [底面] V a層を底面とし、平坦である。
- [出土遺物] 堆積土からIV群（後期初頭～前葉）土器の破片が1点出土した。無文で、器表面はナデられている。
- [時期] 不明。

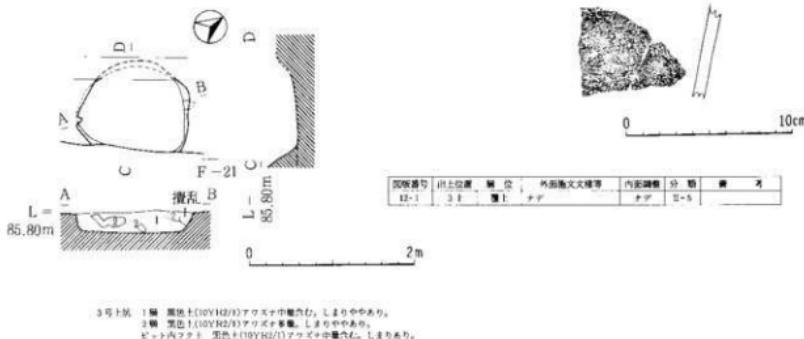


図12 第3号土坑実測図及び出土遺物実測図

## 第4号土坑（旧24号土坑）

- [位置] F-19に位置する。
- [確認] IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。
- [平面形] 円形を呈する。
- [規模] 径86cm、深さ13cmを計る。
- [堆積土] 2層に分層された。
- [壁] 遺存状況が悪く、はつきりしない。
- [底面] 4層を底面とし、平坦である。
- [出土遺物] 堆積土中からII・IV群土器の破片が出土した。
- [時期] 不明。

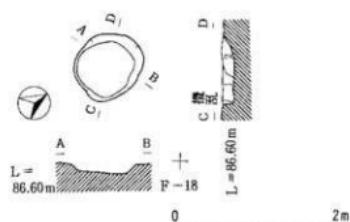
4号土坑 1編 黒褐色土(10YR2/2)アワズナ少量含む。しまりあり。  
2編 黒褐色土(10YR2/2)アワズナ中量含む。しまりあり。

図13 第4号土坑実測図

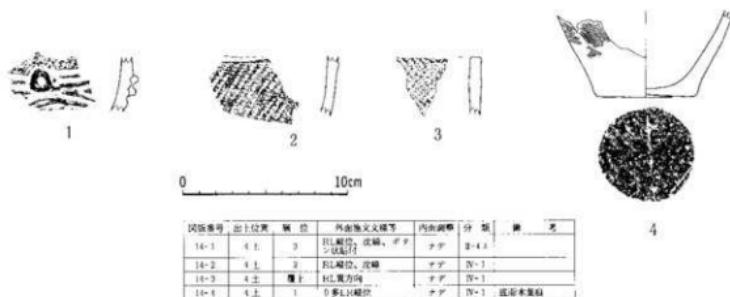


図14 第4号土坑出土遺物実測図

#### 第5号土坑

- [位置] F-23に位置する。
- [確認] IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。
- [平面形] 一端をトレーンチャーニにより切られているが、小判形を呈する。長軸方向は、N-22°-Eである。
- [規模] 長軸1m70cm、単軸1mを計る。深さは34cmである。
- [堆積土] 6層に細分された。第6層を除きアワズナの混入する量は少ない。レンズ状の堆積は示さず、自然堆積とはとらえがたい。
- [壁] やや開き気味に立ち上がる。
- [底面] V a 層を底面とし、平坦である。
- [出土遺物] 堆積土からIV群土器（後期初頭～前葉）の破片が出土した。
- [時期] 不明。

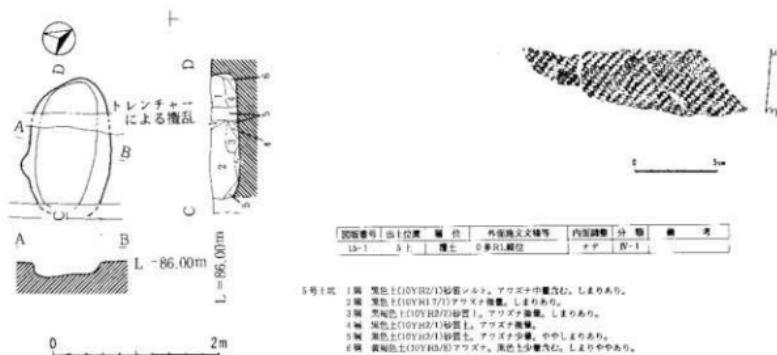


図15 第5号土坑実測図及び出土遺物実測図

## 第6号土坑

- [位置] F-22に位置する。
- [確認] IV層上面で、搅乱による黒色土に切られる黒色土の落ち込みを確認した。
- [平面形] 大半が搅乱をうけ、また調査区外にのびるため、平面形は不明である。
- [規模] 遺存部分の最大径は50cmである。
- [堆積土] 3層に細分された。
- [壁] 開き気味に立ち上がる。
- [出土遺物] 堆積土からIV群土器（後期初頭～前葉）の破片が1片出土した。胴部に粗い条線が施されるものである。
- [時期] 不明。



図16 第6号土坑実測図及び出土遺物実測図

## 第7号土坑

- [位置] F-41・42に位置する。
- [確認] 周辺は削平を受けていたため、VI層中で黒色土の落ち込みを確認した。
- [平面形] ほぼ円形を呈する。
- [規模] 開口部径1m25cm、底面径1m45cm、深さ1m50cmを計る。
- [堆積土] 9層に細分された。第9層は、しまりの悪いにぶい黄褐色の堆積土で、深さの3分の2を占める。明らかに人為的な埋め戻し土と判断される。これより上層の第8から第2層は黒色の砂質シルトを主体とし、流れ込んだ様相を呈する。しかし、第1層に、人為的な堆積の可能性がある黄褐色の火山灰土が認められ、第8から第2層も人為的な堆積土である可能性も否定できない。
- [壁] 底面からすぼまりながら立ち上がる。断面形はいわゆるフラスコ形である。
- [底面] 第X層を底面とし、平坦である。溝、小ピット等は認められなかった。
- [出土遺物] 堆積土上位の黒色土を主体として土器片が出土した。7は撚糸の側面圧痕が不整に施される例である。明らかに人為的な堆積と見られる第9層からは土器片1片のみが出土した。また、底面直上（第9層中）からは、15cm×7cm大の礫が出土した。使用痕は認められなかったので図示していない。
- [時期] 堆積土中から出土した土器はII・III群土器（後期初頭～前葉）であり、これより古い。

## 第8号土坑

- [位置] F-42・43に位置する。

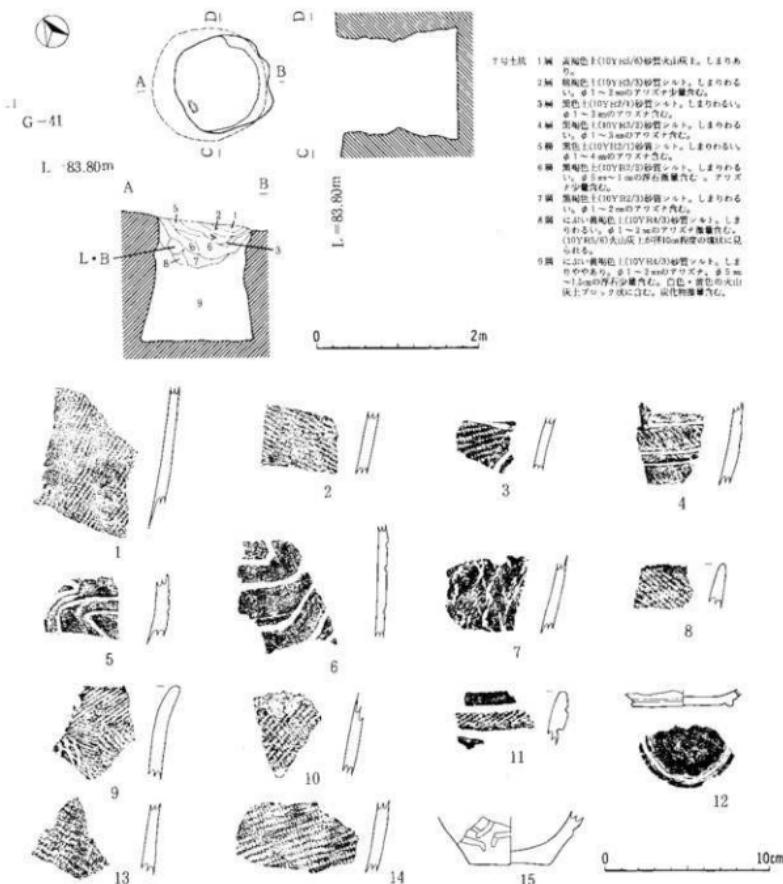


図17 第7号土坑実測図及び出土遺物実測図

[確認] 周辺が削平されていたため、VI層中で黒色土の落ち込みを確認した。

[平面形] 円形を呈する。

[規模] 開口部径1m30cm、底面径1m85cm、深さ1m66cmを計る。

[堆積土] 8層に分層された。人為的な堆積土である可能性が高い。

[壁] 底面からすばまって立ち上がり、中位で傾斜を変えて、若干開き気味に立ち上がる。断面形はいわゆるフランコ形である。

[底面] 第VII層を底面とし、平坦である。中央部に径45cm、深さ13cmの小ピットが検出された。

[出土遺物] 堆積土中からII・III・IV群土器片（後期初頭～前葉）が出土した。6は、III群土器（後期前葉）の破片を利用した円盤状土製品である。

[時期] 不明。

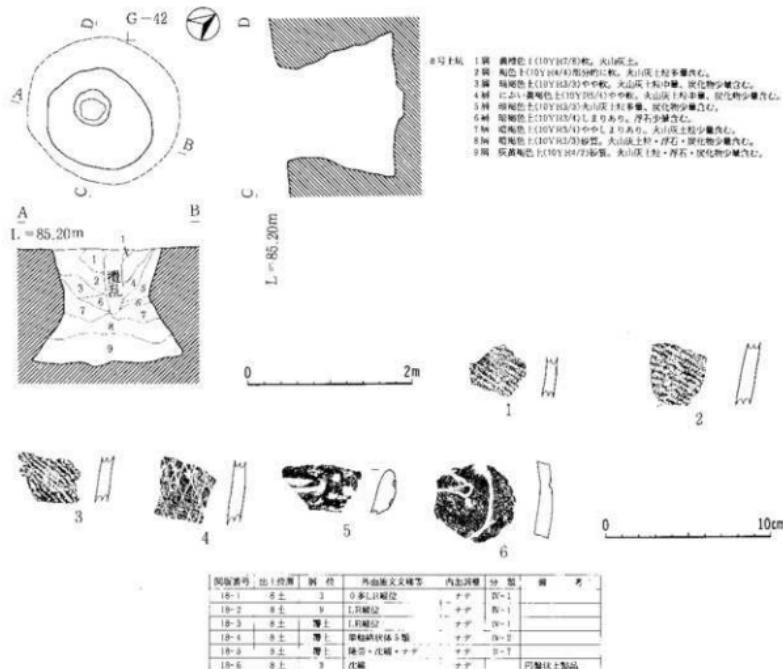


図18 第8号土坑実測図及び出土遺物実測図

### 第9号土坑

[位置] F-29に位置する。

[確認] IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

[平面形] 小判形を呈する。長軸方向はN-15°-Wである。

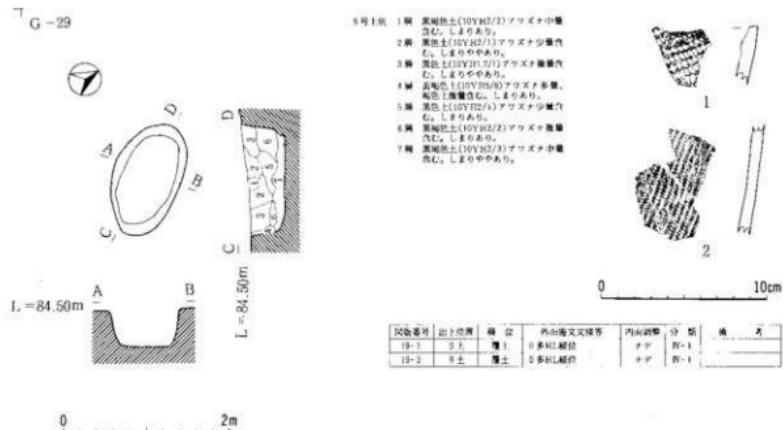


図19 第9号土坑実測図及び出土遺物実測図

[規模] 長軸1m40cm、単軸80cm、深さ53cmである。

[堆積土] 7層に分層された。壁付近には、壁を構成するアワズナを多量に含む土層が認められず、むしろ中央部にアワズナを含む割合の高い土層が認められた。このことから自然堆積の可能性は低いと考えられる。

[壁] やや開き気味に立ち上がる。

[底面] IV層を底面とし、平坦である。

[出土遺物] 堆積土からIV群土器（後期初頭～前葉）の破片が出土した。

[時期] 不明。

#### 第10号土坑

[位置] F-25に位置する。

[確認] IV層中で黒色土の落ち込みを検出した。

[重複] ピットと重複し、ピットより古い。

[平面形] 一部をトレンチャーに切られるため全形は不明だが、円形を呈すると思われる。

[規模] 遺存部で80cmをはかる。

[堆積土] 堆積土は分層されなかった。

[壁] やや開き気味に立ち上がる。

[底面] IV層を底面とする。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明。



図20 第10号土坑実測図

## 第11号土坑

[位置] E-31・F-31に位置する。

[重複] ピットと重複し、本土坑が古い。

[確認] IV層上面で確認した。

[平面形] やや不整な円形を呈する。

[規模] 径1m15cm、深さ1m10cmを計る。

[堆積土] 8層に細分された。アワズナを多く含む層と黒色土を主体とする層の互層となっており、自然堆積と判断された。

[壁] 中位から上位にかけて凹凸が認められた。

[底面] V層を底面とし、若干の起伏が認められるが、ほぼ平坦である。底面は、径1m04cmをはある。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明。

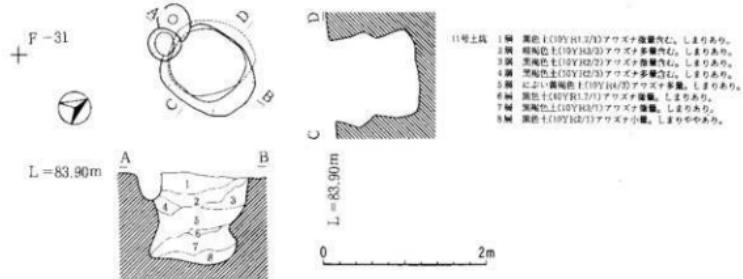


図21 第11号土坑実測図

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・奉神遺跡

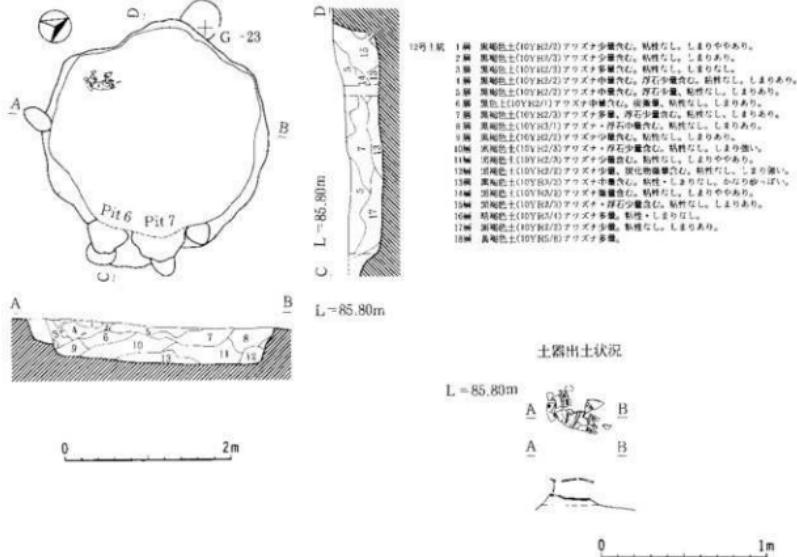


図22 第12号土坑実測図

第12号土坑（旧25号土坑）

〔位置〕 F-20に位置する。

〔確認〕 IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

〔重複〕 ピットと重複するが、ピットより新しい。南東側のピットの北西半・14号土坑の大半は、生活道路下となっていたため、まずピットの一部を調査し、道路付替え後、14号土坑の調査時に重複関係にあることが判明した。そのため、土層断面図では一部を推定線で示さざるを得なかつた。

〔平面形〕 円形を呈する。

〔規模〕 径2m67cm、深さ63cmを計る。

〔堆積土〕 17層に細分された。土層の堆積状態は、周辺から順次流れ込んだ状態を示す、人為的な堆積土であると判断された。

〔壁〕 IV層を壁とする。若干開き気味に立ち上がる。

〔底面〕 V a層を底面とし、平坦である。

〔出土遺物〕 底面直上(13層中)から復元可能土器(図23-1)が出土した。トレンドチャーチにより壊されていたが、本来完形であったと思われる。堆積土が人為的なものと判断され、埋め戻し時に同時に埋置されたものと考えられる。頭部と胴部最大径部分に2条1組の隆帯が付される。隆帯の断面形は三角形である。隆帯で区画された文様帶にはそれぞれ異なるモチーフが施される。確認面より若干上位で土器片が出土したが、本土坑の掘り込み面は黒色土中にあると考えられるため、これらを覆土上位出土遺物として取り扱った。I～III群(後期初頭～前葉)の土器が混在して出土した。

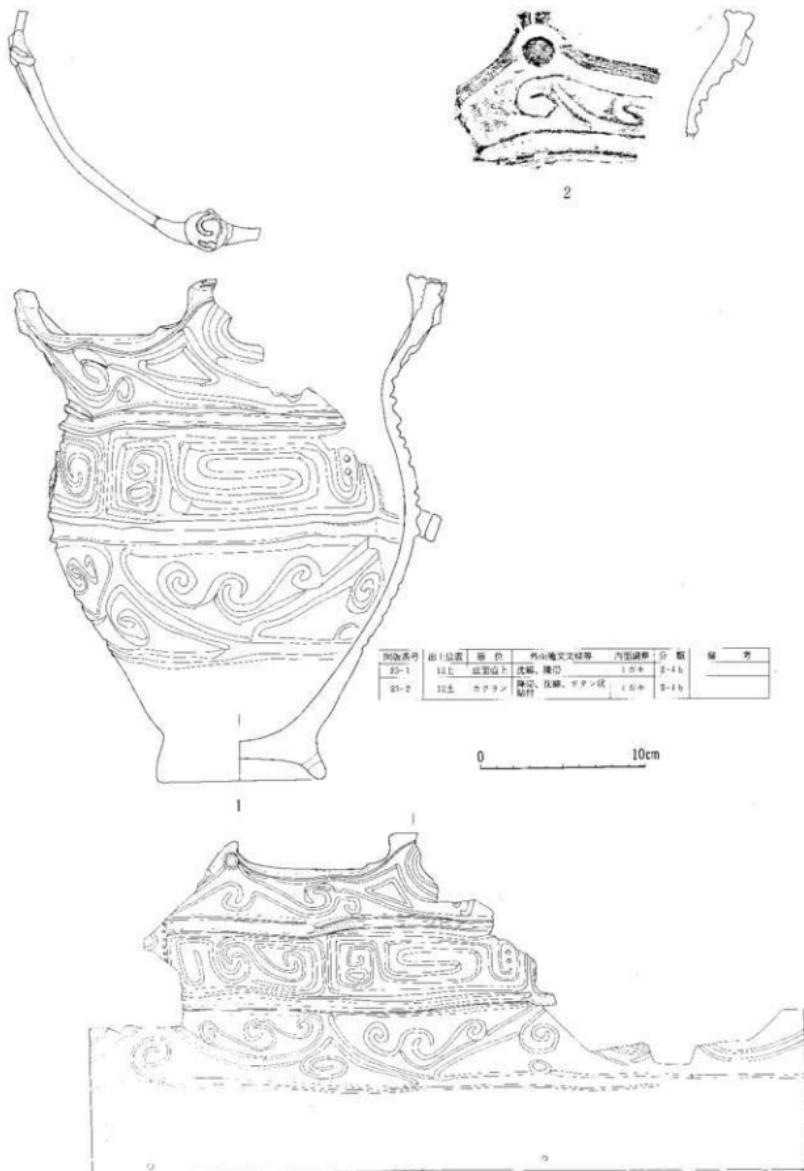
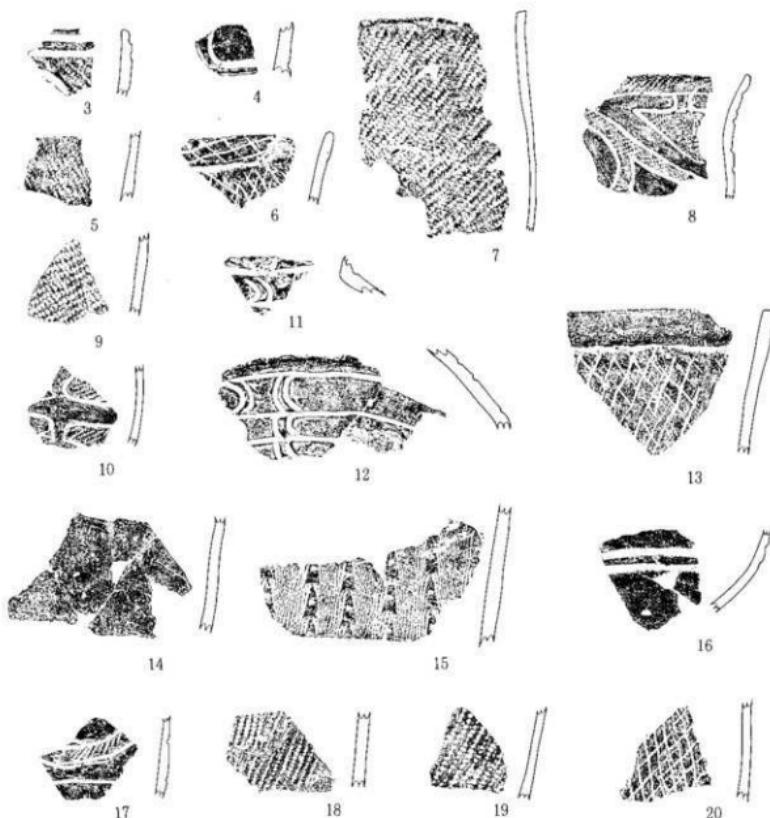


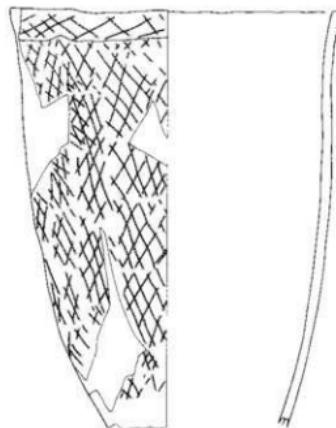
図23 第12号土坑出土遺物実測図(1)

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・春神遺跡

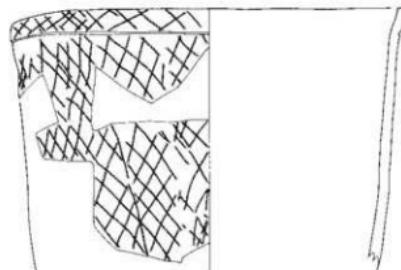


測定番号	出土位置	質位	参考施又文様等	内寸測量	分類	著者
24-3	12土	17	皮解→BL→ナゾリ	ナゾ	3-1-2	
24-4	12土	17	皮解	ナゾ	3-1-1	
24-5	12土	6	LR破片		IV-1	
24-6	12土	4	甲輪錐状体5個	ナゾ	IV-2	
24-7	12土	3	0多BL破片	ナゾ	IV-1	
24-8	12土	4	瓦筋、繩文→ナゾリ	ナゾ	3-1	
24-9	12土	1	0多BL破片	ナゾ	IV-3	
24-10	12土	壁土上位	L.R→瓦筋	ナゾ	3-4-3	
24-11	12土	壁土上位	瓦筋	ナゾ	3-1	
24-12	12土	壁土上位	瓦筋	ナゾ	3-1	
24-13	12土	壁土上位	井汲しU型、甲輪錐状	ナゾ	IV-2	
24-14	12土	壁土上位	ナゾ	ナゾ	IV-3	
24-15	12土	壁土上位	甲輪錐状体1本	ナゾ	3-1	
24-16	12土	壁土上位	瓦筋	ナゾ	3-4-2	
24-17	12土	壁土上位	LR→瓦筋	ナゾ	3-1	
24-18	12土	壁土上位	0多BL破片	ナゾ	IV-1	
24-19	12土	壁土上位	甲輪錐状体5個	ナゾ	IV-2	

図24 第12号土坑出土遺物実測図(2)



21



22



23

0 10cm

回収番号	出土位置	層	外側施文様	内側調査	分類	備考
23-21	12上	■	甲輪郭状体3層	?	2N-2	
23-22	12上	■	甲輪郭状体3層	?	2N-2	
23-23	12上	■	甲輪郭状体3層	?	2N-2	

図25 第12号土坑出土遺物実測図(3)

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・幸神遺跡

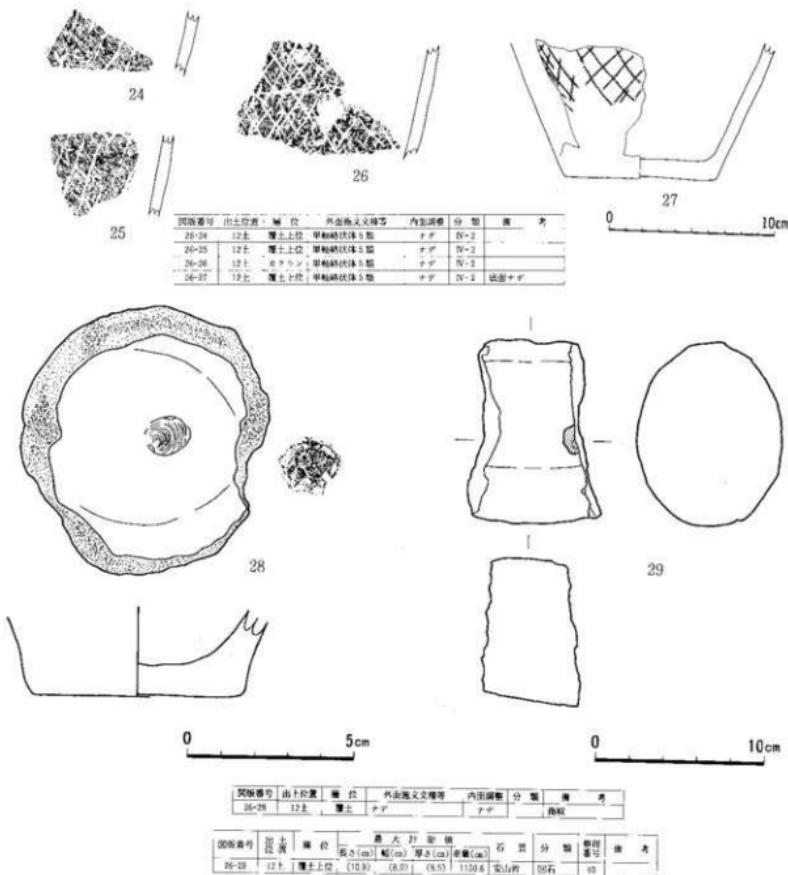


図26 第12号土坑出土遺物実測図(4)

[時期] 底面直上から出土したⅡ群土器（後期初頭）と同時と考えられる。

第13号土坑（旧26号土坑）

[位置] F-36に位置する。

[重複] 1号住居跡と重複し、本土坑が新しい。

[確認] 1号住居跡堆積土掘進中に黒色土の落ち込みを確認した。1号住居跡の埋積過程のある段階で掘り込まれたものと考えられる。

[平面形] 円形を呈する。

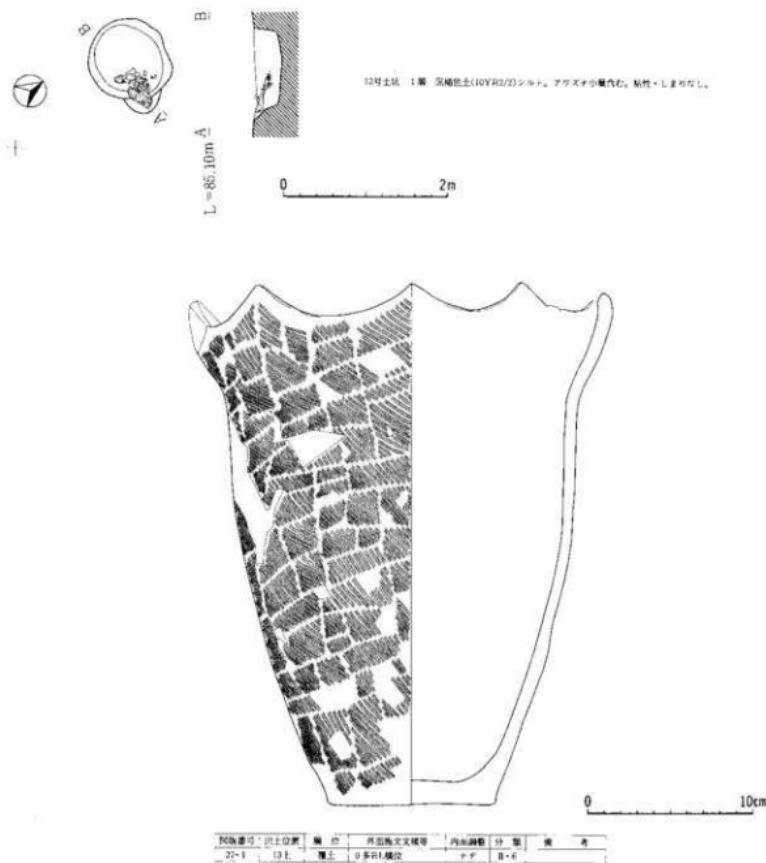


図27 第13号土坑実測図及び出土遺物実測図

[規模] 径1m14cm、深さ36cmを計る。

[堆積土] 堆積土は分層されなかった。

[壁] まっすぐに立ち上がる。

[底面] V層を底面とし、平坦である。

[出土遺物] 堆積土中位から、土器が出土した。土器は、1個体分がつぶれた状態で認められ、土器内部と周辺には焼土が認められた。焼土は土器と一緒に遺棄されたものととらえられる。土器は波状口縁をなす。頸部で屈曲して、口縁部は外開きになる。縄文のみが施される。

[時期] 堆積土中から出土したII群土器（後期初頭）より古い。

第14号土坑(旧27号土坑)

[位置] G-36に位置する。

[重複] 1号住居跡と重複し、本土坑が古い。

[確認] IV層中で、1号住居跡と重複関係にある黒色土の落ち込みを確認した。

[平面形] 小判形を呈する。

[規模] 長軸1m10cm、短軸66cm、深さ27cmを計る。

[堆積土] 2層に分層された。

[壁] 若干開き気味に立ち上がる。

[底面] V a層を底面とし、ほぼ平坦である。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明。

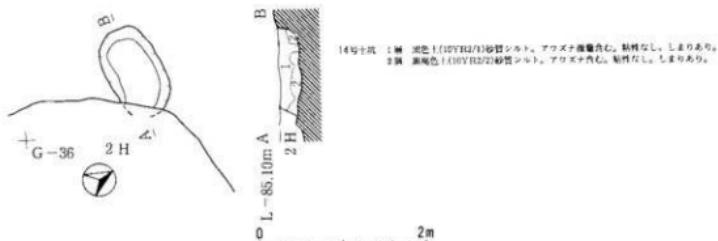


図28 第14号土坑実測図

第16号土坑

[位置] D-14に位置する。

[確認] IV層上面で黒色土の落ち込みを検出した。

[平面形] 円形を呈する。

[規模] 径1m13cm、深さ58cmを計る。

[堆積土] 堆積土は2層に分層された。

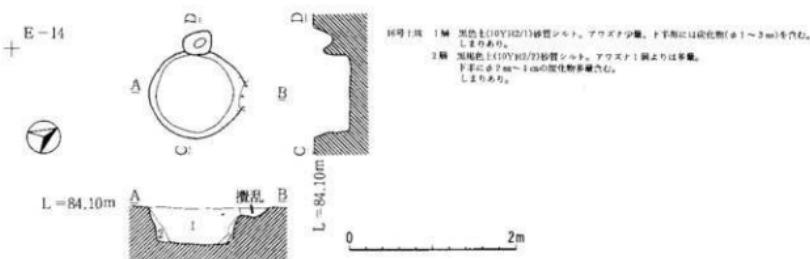


図29 第16号土坑実測図

[壁] 若干開き気味に立ち上がる。

[底面] V層を底面とし、平坦である。

[出土遺物] 底面からIV群土器片（後期初頭～前葉）、覆土からI群土器片（前期末～中期初頭）・IV群土器片（後期初頭～前葉）が出土した。

[時期] 底面から出土したIV群土器と同時かより古い。



図30 第16号土坑出土遺物実測図

#### 第17号土坑

[位置] F-19に位置する。

[確認] IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

[平面形] 円形を呈する。

[規模] 径94cm、深さ30cmを計る。

[堆積土] 堆積土は分層されなかった。

[壁] やや開き気味に立ち上がる。

[底面] IV層を底面とし、西側が若干深くなっている。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明。

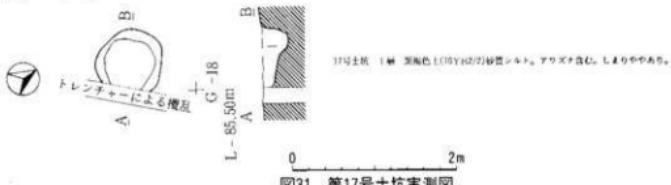


図31 第17号土坑実測図

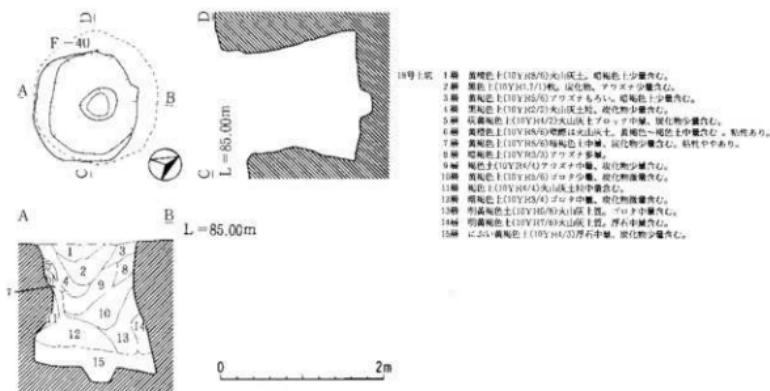
#### 第18号土坑

[位置] E-40・41 G-40・41に位置する。

[確認] 周辺は削平されていたため、V層中で確認した。

[平面形] 円形を呈する。

[規模] 開口部径1m45cm、底面径1m66cm、深さ1m66cmを計る。



【堆積土】 15層に細分された。第1層に黄褐色の火山灰土が認められた。この火山灰土は、確認面より上位の基本層序には存在しない。よって、人為的な堆積土と考えられる。これ以外の堆積土は人為的なものか自然的なものか判断できない。

【壁】 底面からすぼまりながら立ち上がる。西壁と南壁は、それぞれ底面から深さの3分の1、2分の1で傾斜を変え、ほぼまっすぐに立ち上がる。断面形はいわゆるフラスコ形である。

【底面】 第X層を底面とし、平坦である。径45cm、深さ15cmの小ピットが認められた。

【出土遺物】 なし。

【時期】 不明。

### 第1・9号土坑

【位置】 E-41・42、F-41・42に位置する。

【確認】 周辺が削平されていたため、V層中で確認した。

【平面形】 円形を呈する。

【規模】 開口部径2m17cm、底面径1m18cm、深さ152cmである。

【堆積土】 19層に分層された。自然堆積の可能性が高い。

【壁】 底面からまっすぐに立ち上がる。

【底面】 第X層を底面とし、平坦である。

【出土遺物】 遺物は覆土上位・中位・下位に分けて取り上げた。6は、小型の鉢で、紐掛突起が上下に2つ、2カ所に施されている。細く鋭い沈線で菱形のモチーフが描かれる。3は、曲線的な文様を描くもので、沈線で囲まれた部分がやや削り込まれて低くなる。

堆積土中からは図示した以外に、チップ類が多数出土した。一括して廃棄した可能性が考えられるが、出土状況は記録していない。

【時期】 堆積土中のⅢ群土器より古い。

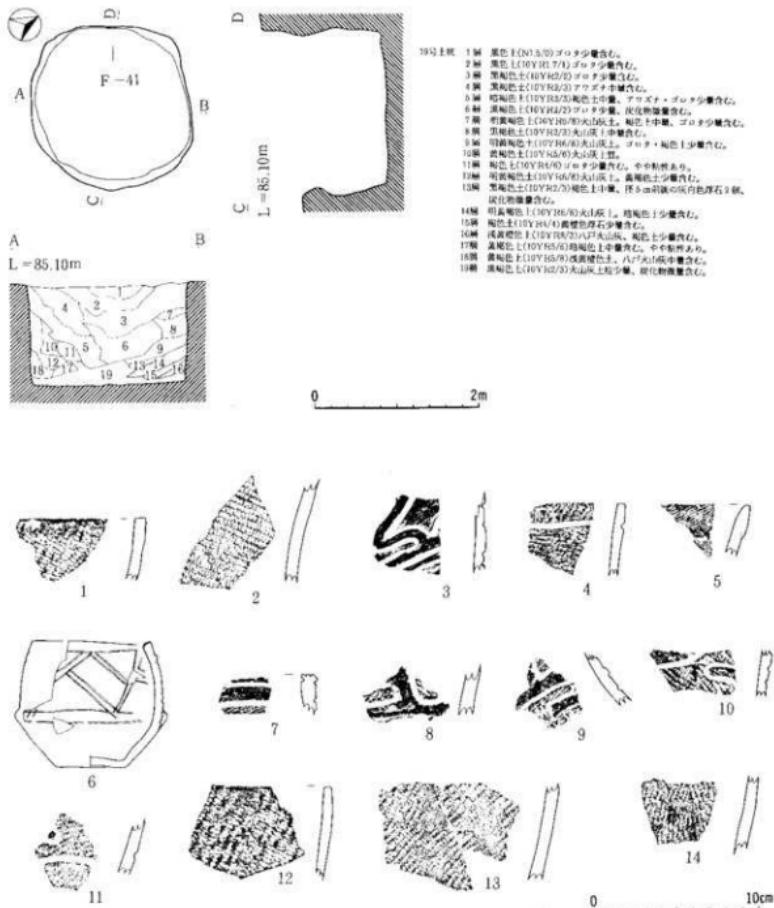


図33 第19号土坑実測図及び出土遺物実測図

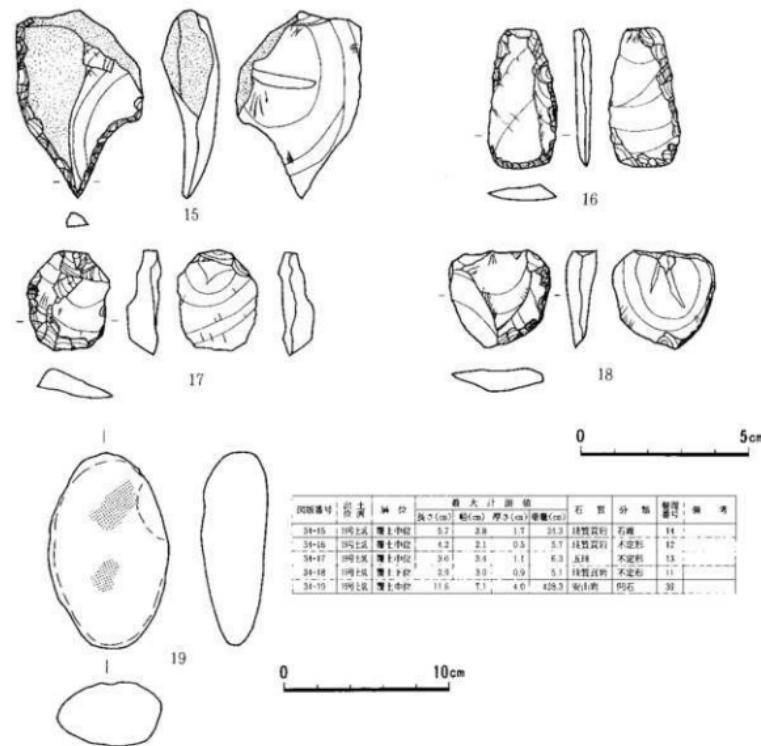


図34 第19号土坑出土遺物実測図

## 第20号土坑

〔位置〕 F-27・G-27に位置する。

〔確認〕 IV層上面で、黒色土の落ち込みを確認した。

〔平面形〕 小判形を呈する。長軸方向はN-62°-Wである。

〔規模〕 長軸1m35cm、単軸80cm、深さ57cmを計る。

〔堆積土〕 4層に分層された。中央にアフズナがブロック状に認められ、自然堆積とは考えにくい。

〔壁〕 やや開き気味に立ち上がる。

〔底面〕 V層を底面とし、平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

[時期] 不明。

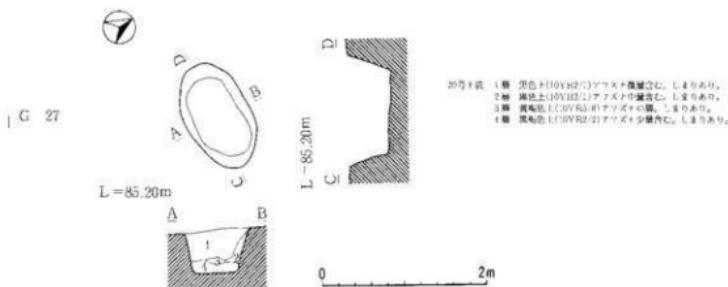


図35 第20号土坑実測図

## 第2 1号土坑

[位置] G-21に位置する。

[確認] IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

[平面形] 円形を呈する。

[規模] 径68cm、深さ28cmを計る。

[堆積土] 4層に細分された。壁際にアワズナを含む割合の高い土層が見られ、自然堆積の可能性が高い。

[壁] やや開き気味に立ち上がる。

[底面] V層を底面とし、平坦である。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明。

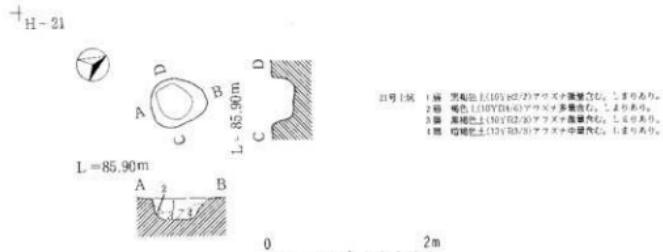


図36 第21号土坑実測図

## 第2 2号土坑

[位置] F-22、G-23に位置する。

[確認] IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・寺神遺跡

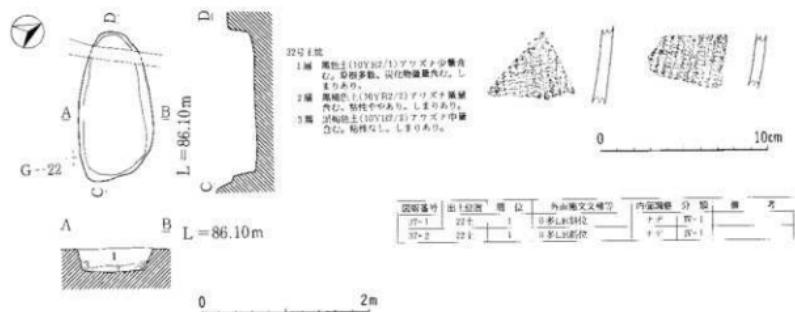


図37 第22号土坑実測図及び出土遺物実測図

[平面形] 小判形を呈する。長軸方向は、N - 27° - Wである。

[規模] 長軸1m80cm、単軸89cm、深さ32cmを計る。

[堆積土] 3層に分層された。黒色の砂質シルトを主体とし、自然堆積とは考えがたい。

[壁] 若干開き気味に立ち上がる。

[底面] V層を底面とし、平坦である。

[出土遺物] 第1層からIV群土器片（後期初頭～前葉）が出土した。

[時期] 不明。

### 第23号土坑

[位置] E - 14に位置する。

[確認] IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

[平面形] 円形を呈する。

[規模] 径1m55cm、深さ32cmを計る。

[堆積土] 3層に分層された。黒色の砂質シルトを主体とし、自然堆積とは考えがたい。

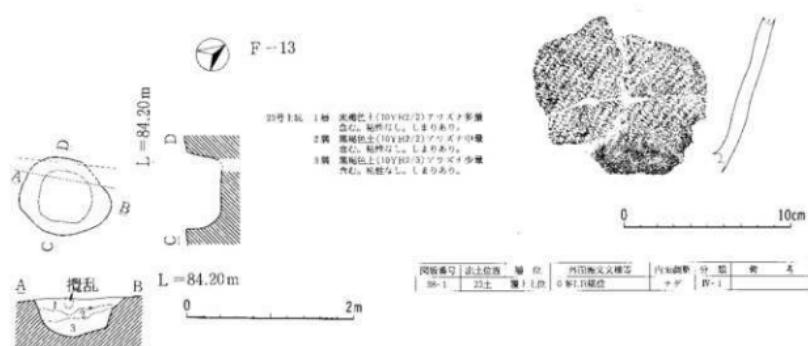


図38 第23号土坑実測図及び出土遺物実測図

[壁] 若干開き気味に立ち上がる。

[底面] V層を底面とし、平坦である。

[出土遺物] 覆土上位からIV群土器（後期初頭～前葉）が出土した。縄文を縦位回転させた胸部破片である。

[時期] 不明。

### 1号埋設土器

[位置] E-14に位置する。

[確認] IV層上面で黒色土の落ち込みと土器の一部を確認した。

[掘り方平面形] 楕円形を呈する。

[掘り方規模] 長軸48cm、卓軸37cm、深さ15cmを計る。

[土器埋設状況] 土器は底面から約10cm浮いた状態で正立状態で埋置されていた。

[掘り方底面] IV層を底面とし、段が認められる。

[時期] II群土器期である。

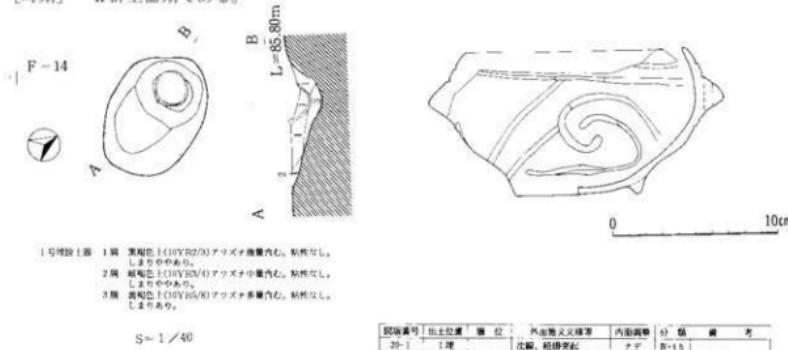


図39 第1号埋設土器実測図

### 捨て焼土

[位置] 捨て場内のG-31に位置する。

[確認] II b層中で灰・焼土のかたまりを確認した。円形に認められた。



図40 捶て焼土実測図

〔規模・その他〕 径35cm、厚さ5cmである。中央部ほど厚く、周縁部ほど薄い、レンズ状の断面を呈していた。周辺には炭化物が認められず、この場で火を焚いた痕跡とは考えにくい面もあり、廃棄されたものと考えた。

#### 捨て場（図2、図版7）

〔位置〕 28~33ラインにかけて、他の場所に比して遺物が濃密に分布していた。大型の破片も認められ、小規模な捨て場としてとらえられた。しかし、調査日程に余裕がなく、遺物はグリッド単位に一括して取り上げざるを得なかつた。また、その範囲も図化できなかつた。そのため、遺構配置図には概念的に範囲を示した。地形的には微弱な谷部にあたる。

〔堆積土〕 堆積土は基本層序II b層に相当し、1層以上に分層できるものではない。

〔出土遺物〕 土器がトロ缶で7箱出土した。II・III群土器が出土した。礫石器は出土しなかつた。

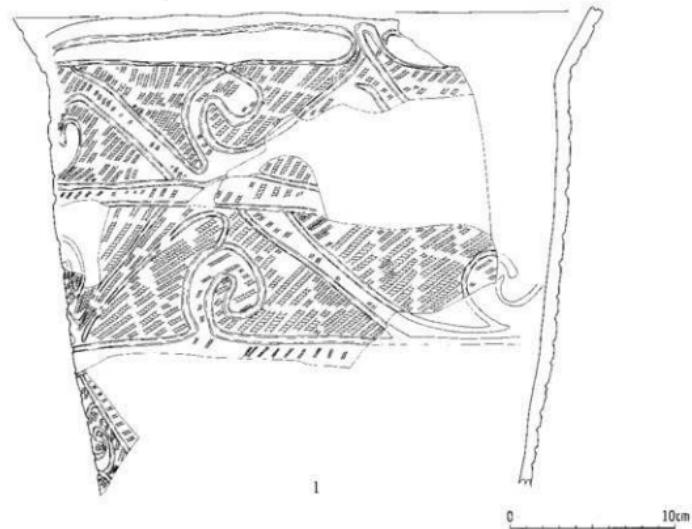


図41 捨て場出土遺物実測図(1) 土器

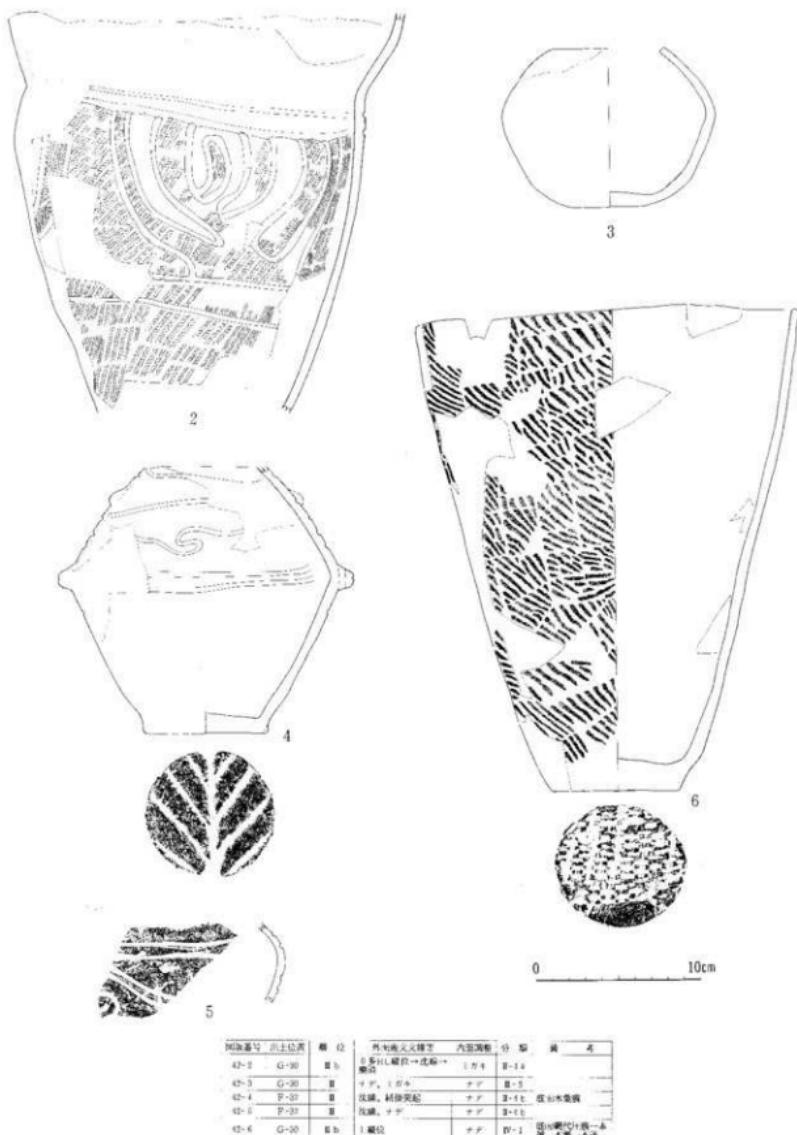
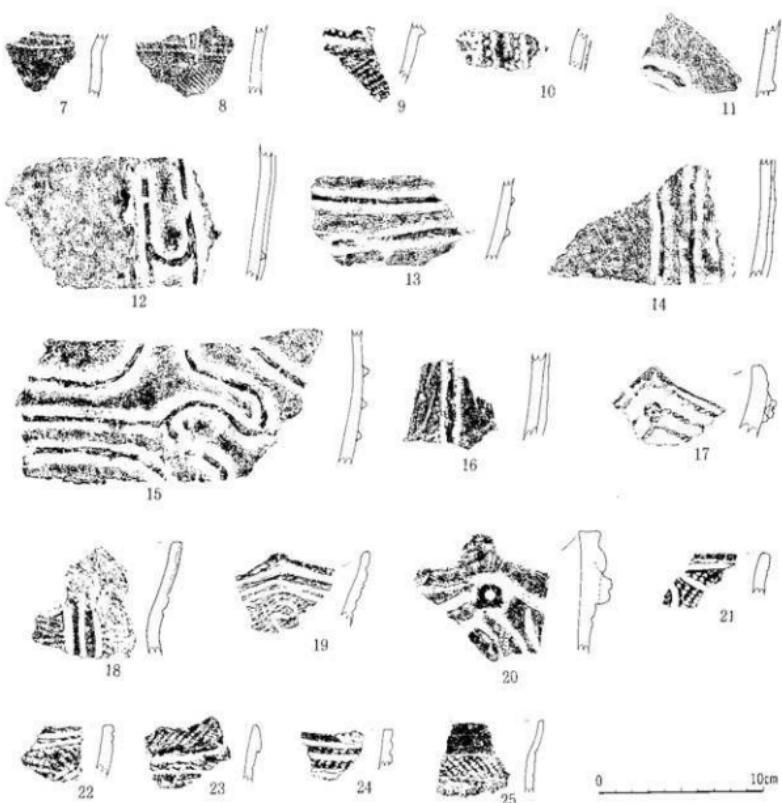
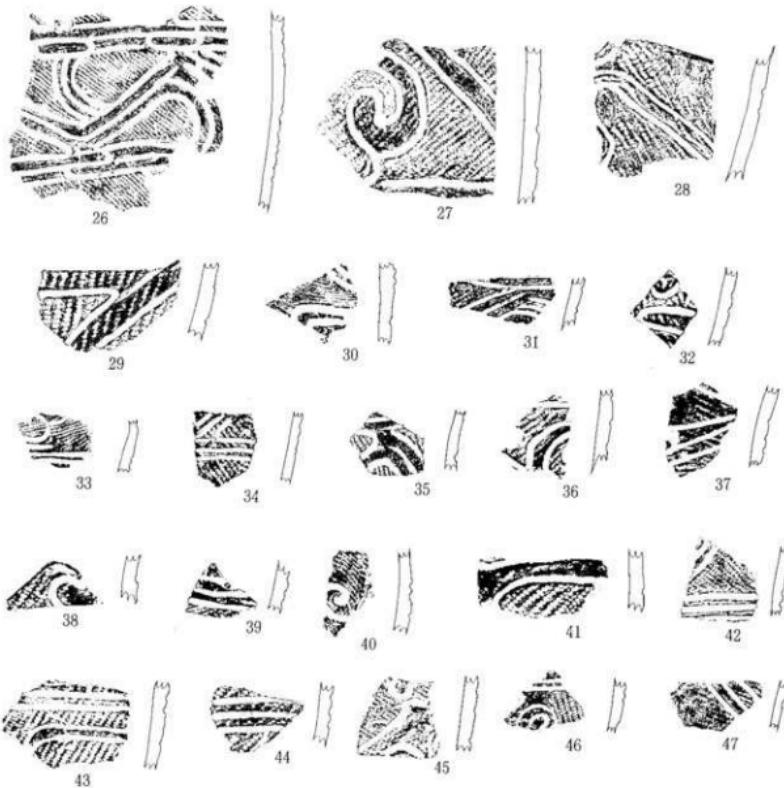


図42 掘て場出土遺物実測図(2) 土器



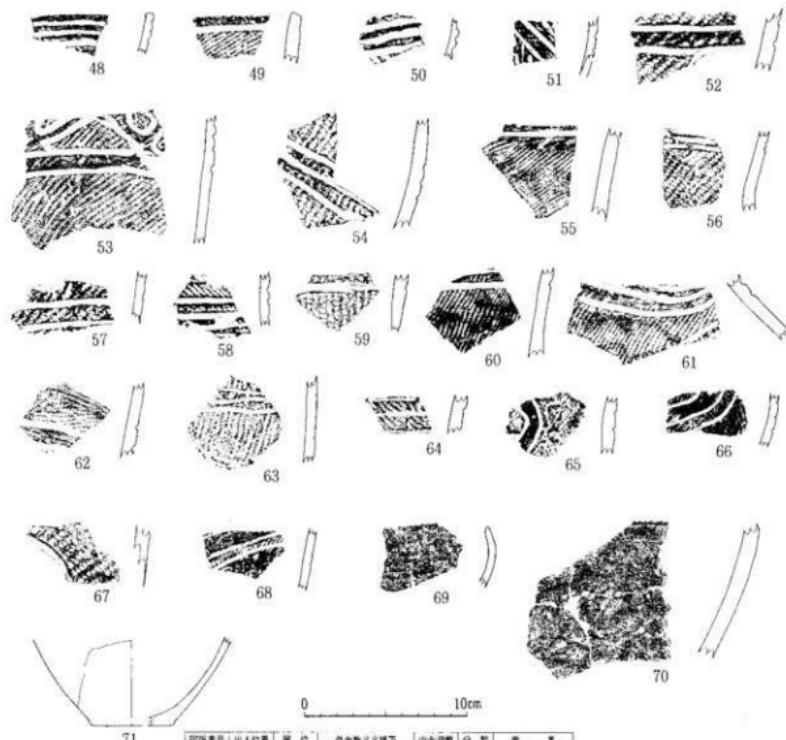
回収番号	出土位置	種類	内訳説明	分類	備考
43-7	F-32	B b	山形地文文様斧 標印削面石斧	ナゲ	II-1
43-8	F-32	B b	口縁部磨耗・裏面刃削 標印削面石斧	ナゲ	II-1
43-9	F-32	B b	深削・竹青・HL端部 HL	ナゲ	II-2
43-10	F-32	B b	深削・ナゲ	ナゲ	II-2
43-11	F-26	B b	深削・竹青・刃削 HL	ナゲ	II-3
43-12	F-33	B b	深削・ナゲ	ナゲ	II-3
43-13	G-26	B b	深削・ナゲ	ナゲ	II-3
43-14	F-32	B b	深削・ナゲ	ナゲ	II-3
43-15	F-32	B b	深削・HL端部・刃削 HL	ナゲ	II-3
43-16	G-31	B b	深削・刃削仕上・刃削 HL	ナゲ	II-3
43-17	F-32	B b	深削・HL端部・刃削 HL	ナゲ	II-3
43-18	F-32	B b	多刃削位・刃削 HL	ナゲ	II-4
43-19	G-31	B b	多刃削位・刃削 HL	ナゲ	II-4
43-20	G-30	B b	ギタク状削位・刃削 HL	ナゲ	II-4
43-21	G-30	B b	LD削位・刃削	ナゲ	II-4
43-22	F-31	B b	LD削位・刃削	ナゲ	II-4
43-23	F-31	B b	刃削仕上・刃削 HL	ナゲ	II-7
43-24	G-31	B b	多刃削位・刃削 HL	ナゲ	II-8
43-25	F-31	B b	多刃削位・刃削	ナゲ	II-8

図43 捨て場出土遺物実測図(3) 土器



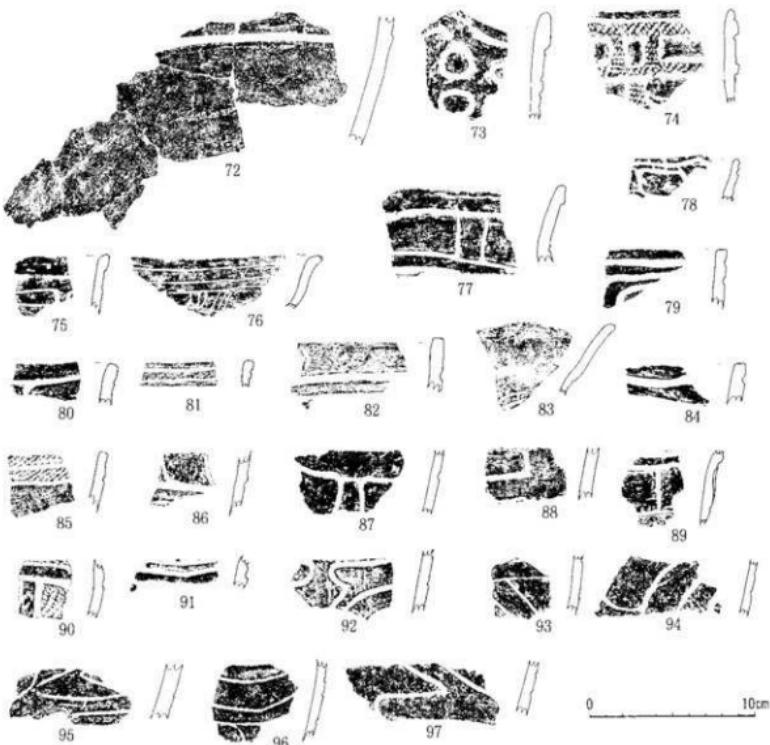
測定番号	上地	底	外縁文様等	内面調査	分類	量	考
44-26	F-36	B b	○多孔状焼結→底板	ナガ	II-1.0		
44-27	F-33	B	○多孔状焼結	ナガ	II-1.0		
44-28	G-28	B b	○多孔状焼結	ナガ	II-1.0		
44-29	G-28	B b	○多孔状焼結→底板	ナガ	II-1.0		
44-30	G-28	B b	丸底、L底	ナガ	II-1.0		
44-31	G-28	B b	丸底、L底	ナガ	II-1.0		
44-32	G-28	B b	○多孔状焼結	ナガ	II-1.0		
44-33	G-28	B b	○多孔状焼結	ナガ	II-1.0		
44-34	G-28	B b	○多孔状焼結	ナガ	II-1.0		
44-35	P-32	B b	○多孔状焼結→底板	ミガキ	II-1.0		
44-36	P-31	I	○多孔状焼結→底板	ミガキ	II-1.0		
44-37	P-31	B b	○多孔状焼結→底板	ナガ	II-1.0		
44-38	F-32	B b	○多孔状焼結→底板	ナガ	II-1.0		
44-39	F-31	I	○L底位→底板	ナガ	II-1.0		
44-40	F-31	I	○L底位→底板	ナガ	II-1.0		
44-41	F-32	B b	○L底位→底板+焼結	ナガ	II-1.0		
44-42	G-28	I	○L底位→底板	ナガ	II-1.0		
44-43	G-28	B b	○多孔状焼結→底板	ナガ	II-1.0		
44-44	G-29	B b	○L底位→底板	ミガキ	II-1.0		
44-45	G-28	B b	丸底、L底位	ナガ	II-1.0		
44-46	G-29	B b	○L底位→底板	ナガ	II-1.0		
44-47	G-31	B b	○多孔状焼結→底板	ナガ	II-1.0		
44-48	G-29	B b	丸底、ナガ	ナガ	II-1		

図44 掘て場出土遺物実測図(4) 土器



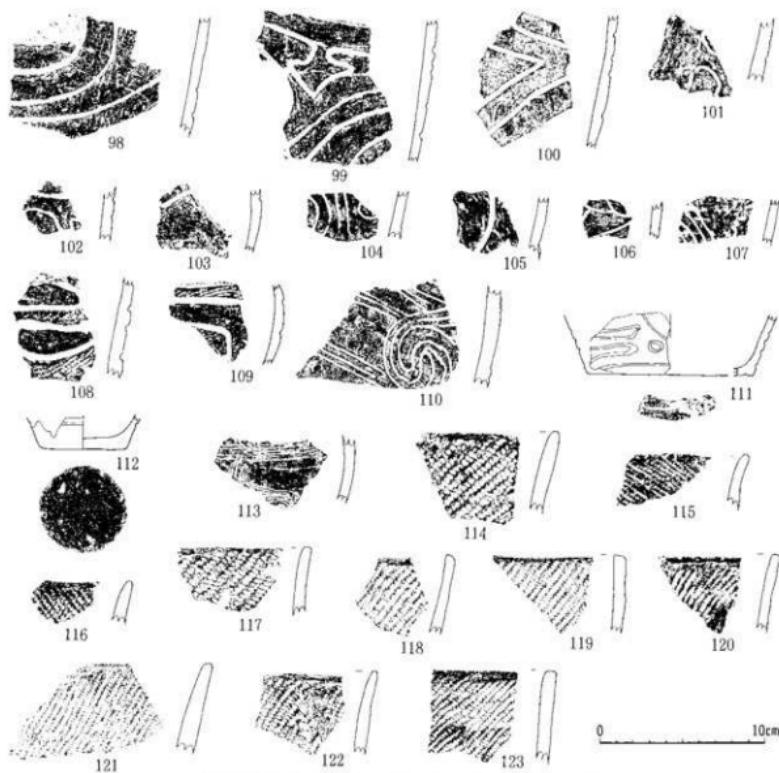
出土地番	出土位置	種 類	外形状文様等	内部形態	分類	備 考
45-48	F-31	II b	直腹	ナギ	B-7	
45-49	G-30	II b	LH横縞	ナギ	B-7	
45-50	F-32	II b	直腹	ナギ	B-4	
45-51	F-32	II b	直腹	ナギ	B-4	
45-52	F-32	II	多孔→花瓶→網目	ナギ	B-4	
45-53	F-32	II	多孔→花瓶→網目	ナギ	B-4	
45-54	G-30	II b	多孔→花瓶→花縞	ナギ	B-4	
45-55	F-32	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-56	F-30	II b	多孔→花瓶	ナギ	B-4	
45-57	G-30	II b	多孔→花瓶	ナギ	B-4	
45-58	F-32	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-59	F-32	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-60	F-32	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-61	G-31	II b	多孔→花瓶→花縞	ナギ	B-4	
45-62	F-30	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-63	F-32	II b	LH横縞→花瓶	ナギ	B-4	
45-64	G-30	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-65	F-32	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-66	F-32	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-67	G-30	II b	LH横縞→花瓶	ナギ	B-4	
45-68	F-32	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-69	G-30	II b	LH横縞→花瓶	ナギ	B-4	
45-70	F-32	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-71	F-32	II b	直腹→花瓶	ナギ	B-4	
45-72	F-38	II	—	ナギ	B-5	
45-73	F-38	II	—	ナギ	B-5	

図45 捨て場出土実測図(5) 土器



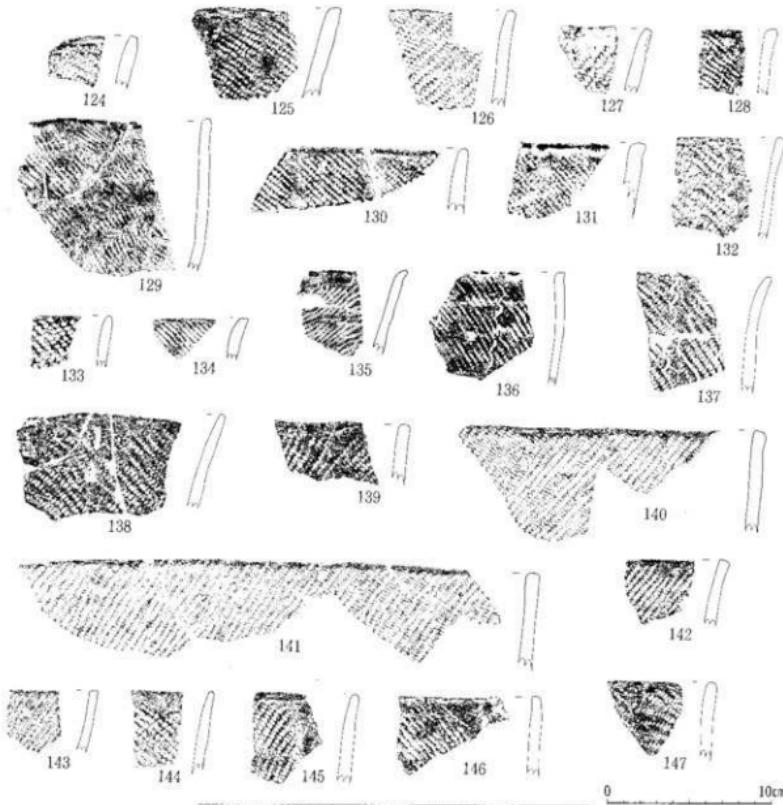
開拓番号	山100面	層	鉱物	外山地文様等	内山地標	分類	地 方
46-72	F-32	B b			1万4千	B-4	
46-73	F-30	B b			ナメ	B-5	
46-74							
G-30	B b			LH横裂出。G多12.2 火透	ナメ	B-5	
46-75	F-31	B b		折石打削。火透→1.8 +	ナメ	B-5	
46-76	G-31	B b		火透	ナメ	B-1	
46-77	G-30	B b		火透。赤彩	ナメ	B-5	
46-78	F-32	B b		火透	1万4千	B-1	
46-79	F-32	B b		火透	ナメ	B-1	
46-80	G-30	B b		火透	ナメ	B-5	
46-81	G-30	B b		火透。火縫	---	B-5	日本海側付近の海浜
46-82	G-29	B b		火透	ナメ	B-3	
46-83	F-32	B b		火透	ナメ	B-5	
46-84	G-30	B b		火透	ナメ	B-1	
46-85	F-31	B		LH横裂→火透	ナメ	B-1	
46-86	G-30	B b		火透	ナメ	B-1	
46-87	G-30	B b		火透	ナメ	B-1	
46-88	G-30	B b		火透	ナメ	B-1	
46-89	G-31	B b		火透。赤彩	ナメ	B-1	
46-90	G-31	B b		0.5×0.5cm火縫→火透	ナメ	B-1	
46-91	G-30	B b		火透	ナメ	B-1	
46-92	G-30	B b		火透	ナメ	B-1	
46-93	G-29	B b		火透	ナメ	B-1	
46-94	F-30	B b		火透	ナメ	B-1	
46-95	G-30	B b		火透	ナメ	B-1	
46-96	F-32	B b		火透	ナメ	B-1	
46-97	F-30	B b		火透	ナメ	B-1	

図46 捨て場出土遺物実測図(6) 土器



調査番号	出土位置	層位	外形概要又文様等	内山調査	分類	器種
47-98	F-36	B b	双刃	ナゲ	E-1	
47-99	F-35	B b	丸頭	(ナゲ)	E-1	
47-100	G-35	B b	丸頭	ナゲ	E-1	
47-101	G-30	B b	双刃	ナゲ	E-1	
47-102	F-32	B b	双刃	ナゲ	E-1	
47-103	F-30	B b	双刃	ナゲ	E-1	
47-104	G-31	B b	丸頭	ナゲ	E-1	
47-105	G-30	B b	双刃	ナゲ	E-1	
47-106	G-30	B b	丸頭	ナゲ	E-1	
47-107	F-32	B b	刃付、丸頭→L字型	(ナゲ)	E-1	
47-108	G-26	B b	L→双刃	(ナゲ)	E-1	
47-109	G-30	B b	丸頭	ナゲ	E-1	
47-110	F-31	B b	丸頭	ナゲ	E-1	
47-111	F-31	B b	丸頭	(ナゲ)	E-1	近山式端
47-112	F-29	B	丸頭	ナゲ	E-1	近山式端
47-113	G-29	B b	錐状	ナゲ	E-2	
47-114	G-30	B	②多刃断面	ナゲ	E-1	
47-115	G-30	B b	③多刃断面	ナゲ	E-1	
47-116	G-30	B b	④多刃断面	ナゲ	E-1	
47-117	G-29	B b	⑤多刃断面	ナゲ	E-1	
47-118	F-28	B	⑥多刃断面	ナゲ	E-1	
47-119	F-32	B	⑦多刃断面	ナゲ	E-1	
47-120	G-30	B b	⑧多刃断面	ナゲ	E-1	
47-121	F-30	B b	⑨多刃断面	ナゲ	E-1	
47-122	G-30	B b	⑩多刃断面	ナゲ	E-1	
47-123	F-30	B b	⑪多刃断面	ナゲ	E-1	

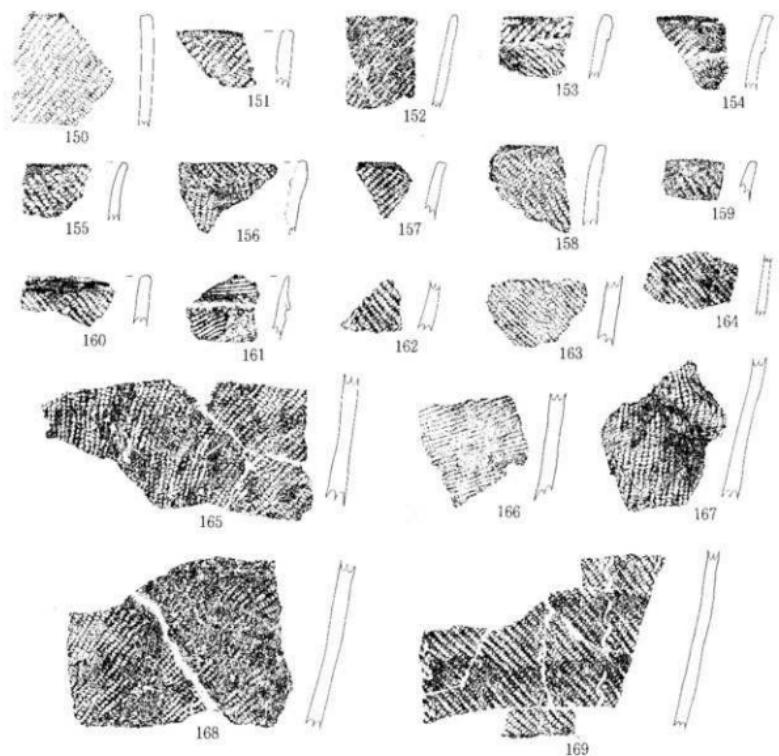
図47 捨て場出土遺物実測図(7) 土器



図版番号	出土位置	層	外形・文様等	内部測量	分類	層
48-124	C-31	B	0 多孔石器	1.5cm	BN-1	
48-125	C-31	B	0 多孔石器	ナシ	BN-1	
48-126	G-31	B b	0 多孔石器	ナシ	BN-1	
48-127	G-31	B	0 多孔石器	ナシ	BN-1	
48-128	G-31	B	0 多孔石器	ナシ	BN-1	
129						
130						
131						
132						
133						
134						
135						
136						
137						
138						
139						
140						
141						
142						
143						
144						
145						
146						
147						

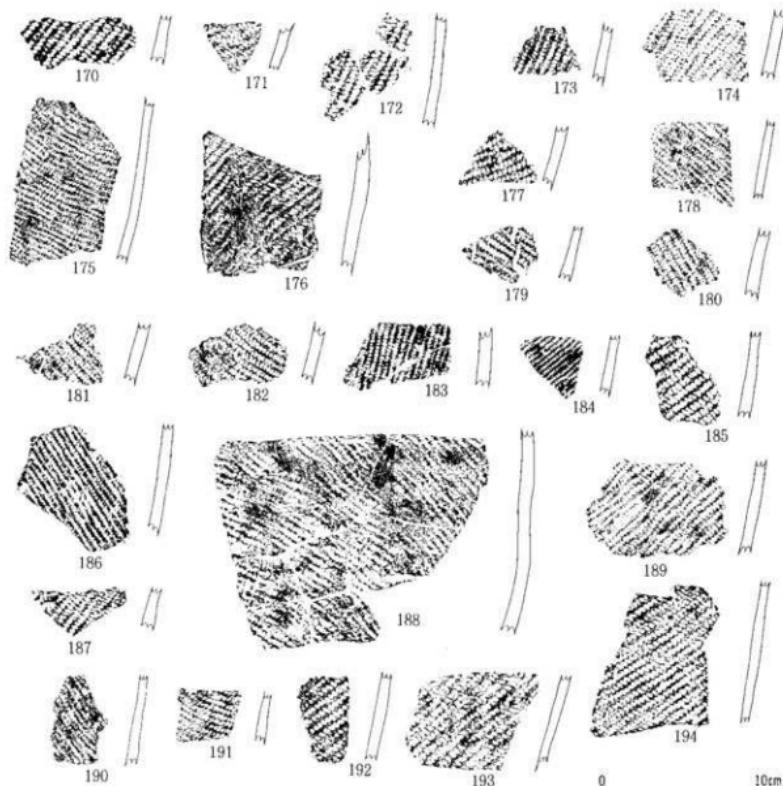
0 10cm

図48 捨て場出土遺物実測図(8) 土器



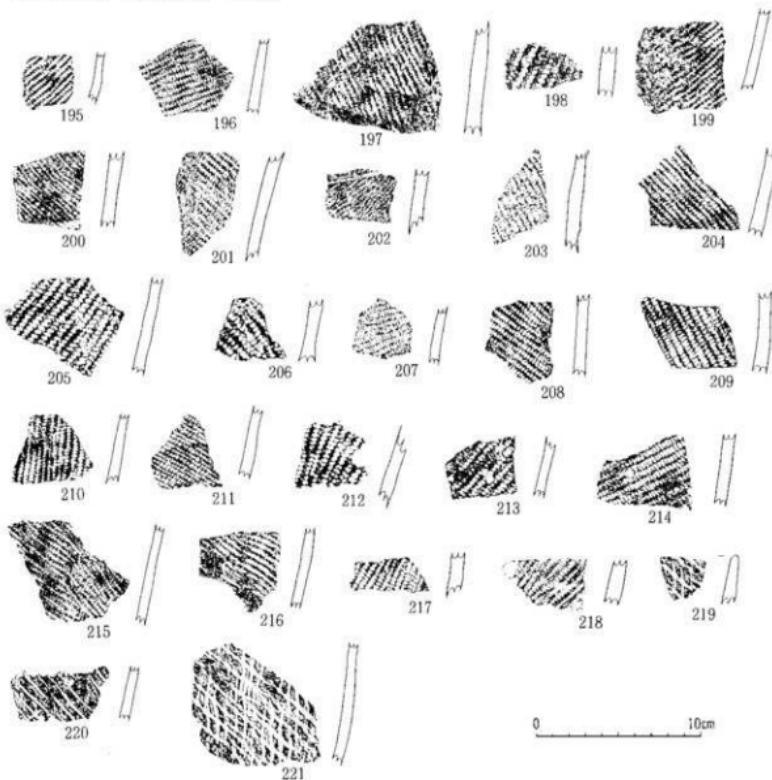
測定番号	出土位置	種類	文様	内面調査	分類	質	考
49-150	G-32	B b	口縁付	ミサキ	N-1		
49-151	G-29	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-152	G-31	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-153	G-39	B b	口縁付、多孔状 穿孔部付	ナゲ	N-1		
49-154	F-32	B b	直口縁付	ナゲ	N-1		
49-155	G-30	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-156	G-31	B b	多孔状 穿孔部付	ナゲ	N-1		
49-157	P-32	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-158	G-29	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-159	G-29	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-160	G-30	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-161	G-31	B b	口縁付、穿孔 部付	ナゲ	N-1		
49-162	G-29	B b	多孔状 穿孔部付	ナゲ	N-1		
49-163	G-30	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-164	F-33	B b	口縁付、双縫	ミサキ	N-1		
49-165	G-30	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-166	G-30	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-167	G-29	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-168	G-30	B b	口縁付	ナゲ	N-1		
49-169	G-29	B b	口縁付	ナゲ	N-1		

図49 掘て場出土遺物実測図9 土器



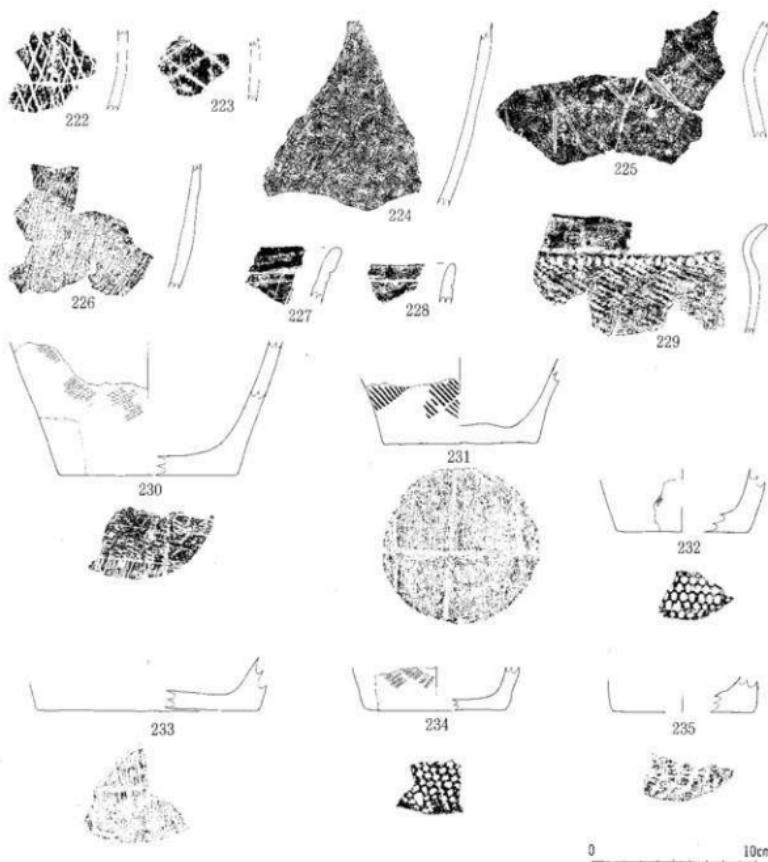
測定番号	出土位置	種類	外側陶文様等	内側調査	分類	期	備考
10-170	G-30	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-171	G-30	器	LH縫隙	ナガホ	IV-1		
10-172	G-30	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-173	G-30	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-174	F+31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-175	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-176	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-177	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-178	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-179	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-180	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-181	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-182	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-183	F+31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-184	F+31	器	RT縫隙	ナガホ	IV-1		
10-185	F+31	器	RT縫隙	ナガホ	IV-1		
10-186	F+31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-187	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-188	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-189	F+32	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-190	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-191	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-192	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-193	F+28	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		
10-194	G-31	器	多孔L縫隙	ナガホ	IV-1		

図50 掘り出場出土遺物実測図(10) 土器



図面番号	出土分類	種 位	外由施文様等	内由同様	分 類	備 考
II-195	G-31	器身	○素地無施	ナゲ	IV-1	
II-196	G-31	器身	○素地無施	ナゲ	IV-1	
II-197	F-28	器身	○素地無施	ナゲ	IV-1	
II-198	G-28	器身	○素地無施	ナゲ	IV-1	
II-199	G-32	器身	○素地無施	ナゲ	IV-1	
II-200	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-201	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-202	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-203	G-28	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-204	G-32	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-205	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-206	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-207	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-208	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-209	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-210	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-211	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-212	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-213	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-214	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-215	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-216	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-217	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-218	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-219	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-220	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	
II-221	G-30	器身	上部付有施	ナゲ	IV-1	

図51 掘て場出土遺物実測図(11) 土器



固形番号	出土位置	期	所持文化様式	内部構造	分類	器	号
52-222	C-30	II b	半輪刃打体 1型	ナゲ	N-1		
52-222	F-32	II b	直輪刃	ナゲ	N-2		
52-224	F-32	II	(なし)	ナゲ	N-3		
52-225	F-32	II b	(なし)	ナゲ	N-2		
52-226	G-30	II b	(なし)	ナゲ	N-3		
52-227	G-30	II b	直輪刃、ナゲ	ナゲ	N-1		
52-228	G-30	II b	直輪刃、ナゲ	ナゲ	N-4		
52-229	F-32	II b	口輪刃打体、直輪刃打体	ナゲ	N-6		
52-230	G-30	II b	0多孔隙	ナゲ		近山製ナゲ	
52-231	G-30	II b	0多孔隙	ナゲ		近山製ナゲ	
52-232	F-32	II b	ナゲ	ナゲ		近山製化子型一本 縫、木柄、木底	
52-233	G-30	II b	ナゲ	ナゲ		近山製化子型一本 縫、木柄、木底	
52-234	F-32	II	0多孔隙	ナゲ		近山製化子型一本 縫、木柄、木底	
52-235	G-30	II b	ナゲ	ナゲ		近山製化子型一本 縫、木柄、木底	

図52 捨て場出土遺物実測図12 土器

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・幸神遺跡

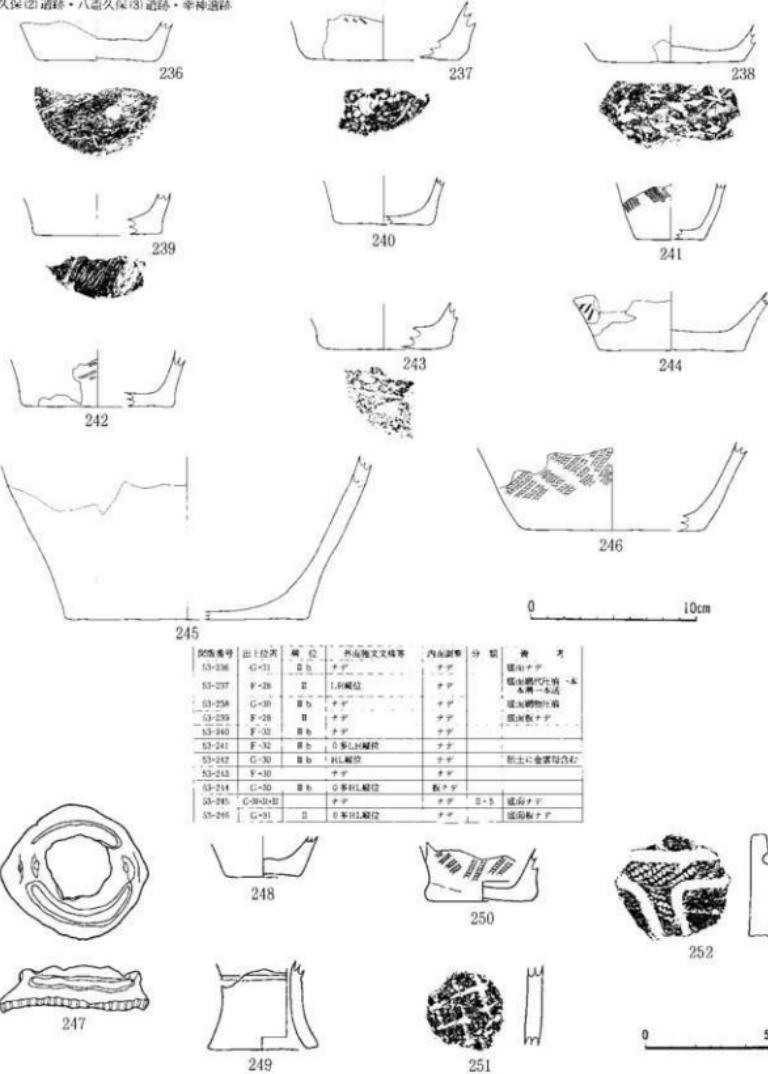
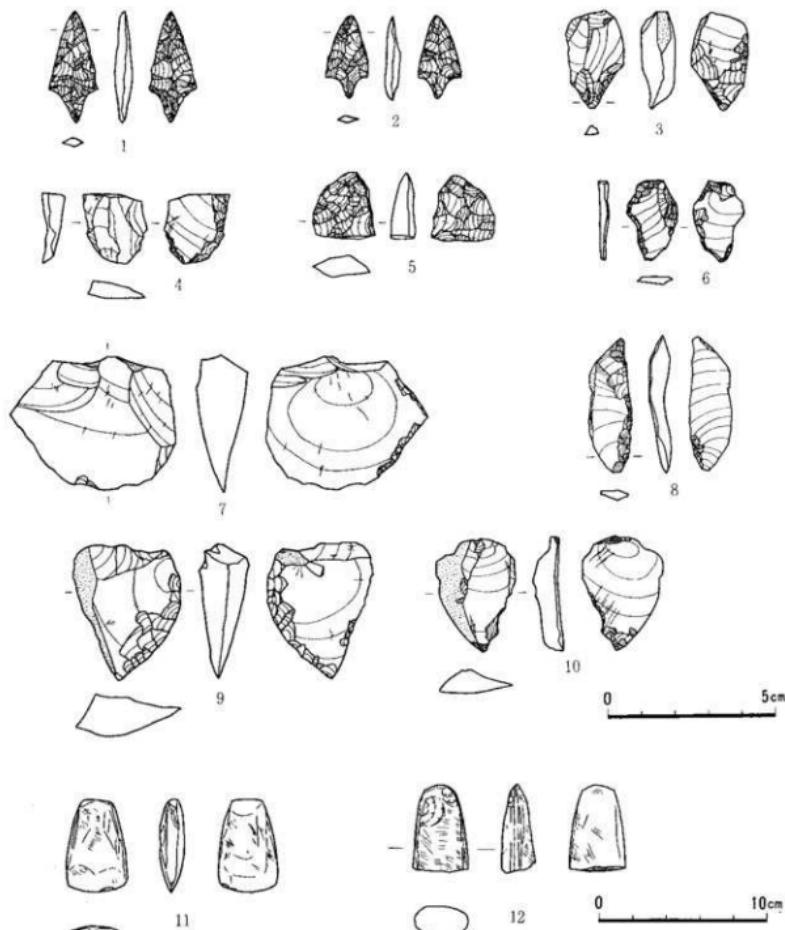


図53 捨て場出土遺物実測図13 土器・土製品



測定番号	出土位置	測定	直徑			石器	分類	整理番号	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
84-1	G-32	b	3.4	1.9	0.6	1.5	玉珠	15	
84-2	G-39	b	2.5	1.3	0.6	1.0	玉珠	16	
84-3	G-31	b	(3.0)	(1.2)	(1.0)	(4.4)	玉珠	19	
84-4	F-32	b	(2.1)	(1.9)	(0.7)	(2.4)	玉珠	31	
84-5	G-35	b	2.0	1.9	0.7	2.6	玉珠	33	
84-6	G-36	b	2.4	1.9	0.4	1.7	珠寶貝珠	68	
84-7	G-31	b	4.1	4.9	1.5	20.2	珠寶貝珠	23	
84-8	G-32	b	4.1	1.4	0.7	2.6	玉珠	39	
84-9	F-32	b	4.3	2.3	1.5	16.2	珠寶	33	
84-10	G-35	b	2.5	2.4	0.9	4.7	E99	66	
84-11	G-30	b	3.6	3.5	1.4	43.7	細珠	37	
84-12	G-30	b	(3.2)	(3.2)	(1.9)	(68.7)	細珠	36	

図54 捨て場出土遺物実測図14 石器

#### ピット群（図56・57）

35ライン以東でピット群を検出した。特に19ラインから25ラインの間に濃密に認められた。この分布は、土坑の分布とほぼ重なる。柱痕は認められなかった。深さ30cm程度で、IV層を底面とするものが多い。II～IV群（後期初頭～前葉）土器片が出土するものもあり、縄文時代後期に属するものと考えられる。

### 第2節 時期不明の遺構

#### 第1号溝状ピット

【位置】 F-31に位置する。

【確認】 IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

【規模】 長軸1m70cm、短軸54cm、深さ52cmを計る。

【堆積土】 3層に分層された。いずれもアワズナを含む砂質シルトで、十和田b浮石を含む層は認められない。

【壁・底面】 IV層を掘り込みVa層を底面とする。壁は開口部がやや広がる。縦断面では、南東壁が外開きに立ち上がる。

【時期】 堆積土の様相から縄文時代に属する可能性が高いものの、決定的ではない。

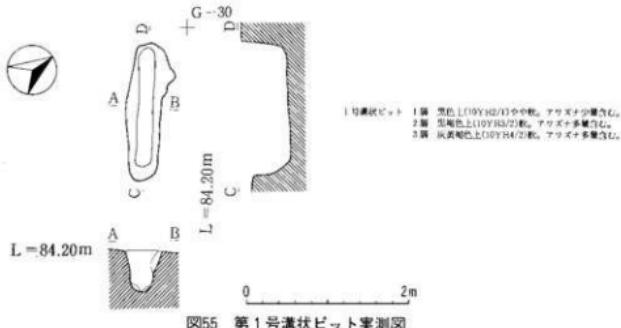


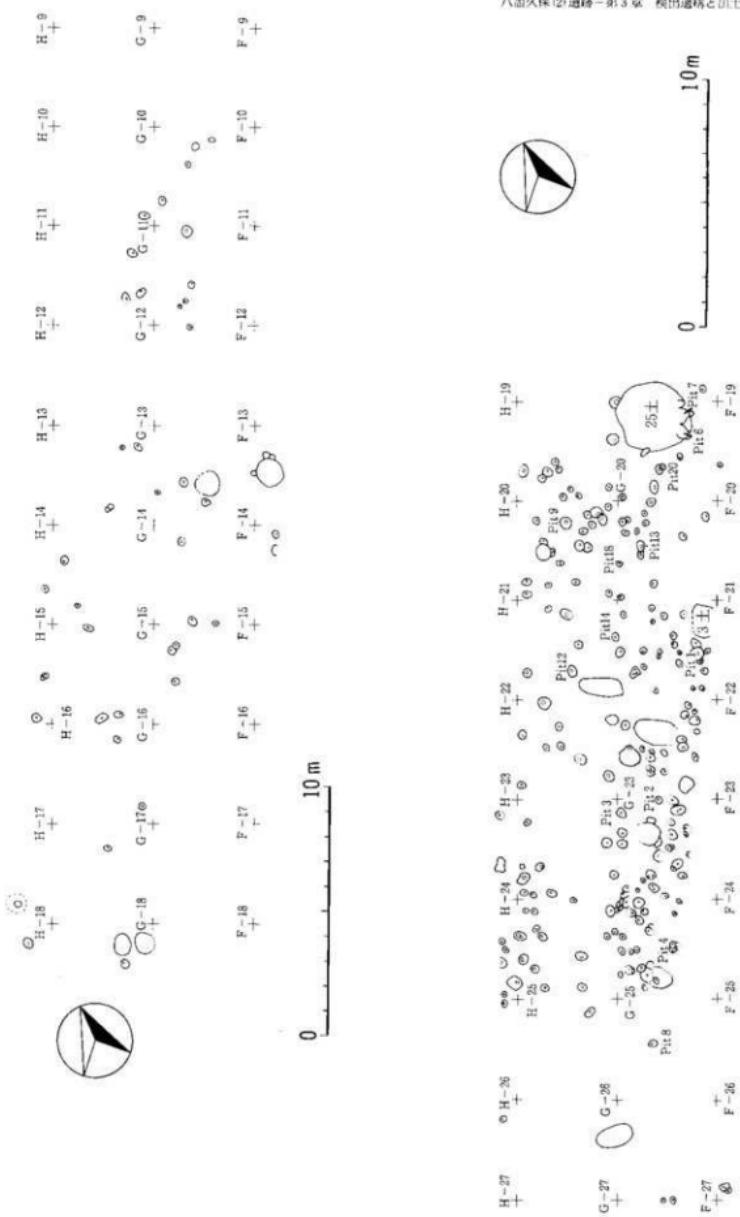
図56 第1号溝状ピット測量図

#### 道路状遺構（図58）

【位置】 F-26・27、G-26・27、H-26・27に位置する。

【確認】 II層中で、溝状の落ち込みが認められた。トレンチャー痕を利用して、断面を観察したところ、堅い面と溝状の落ち込みからなることを確認し、平面的に掘り下げた結果、道路状遺構であることが判明した。

【規模等】 厳く踏みしめられた部分（図中の網掛け部分）は、北西一南東方向にのびる。最大幅は1m40cmである。これと平行して溝が2～3条認められる。溝はIV層を掘り込んで構築されている。溝の一部は、踏みしめられた面と重複関係にあり、補修・拡張があったことを示している。轍は検出されなかつた。

図56 ビット群実測図(1) ( $S = 1/200$ )

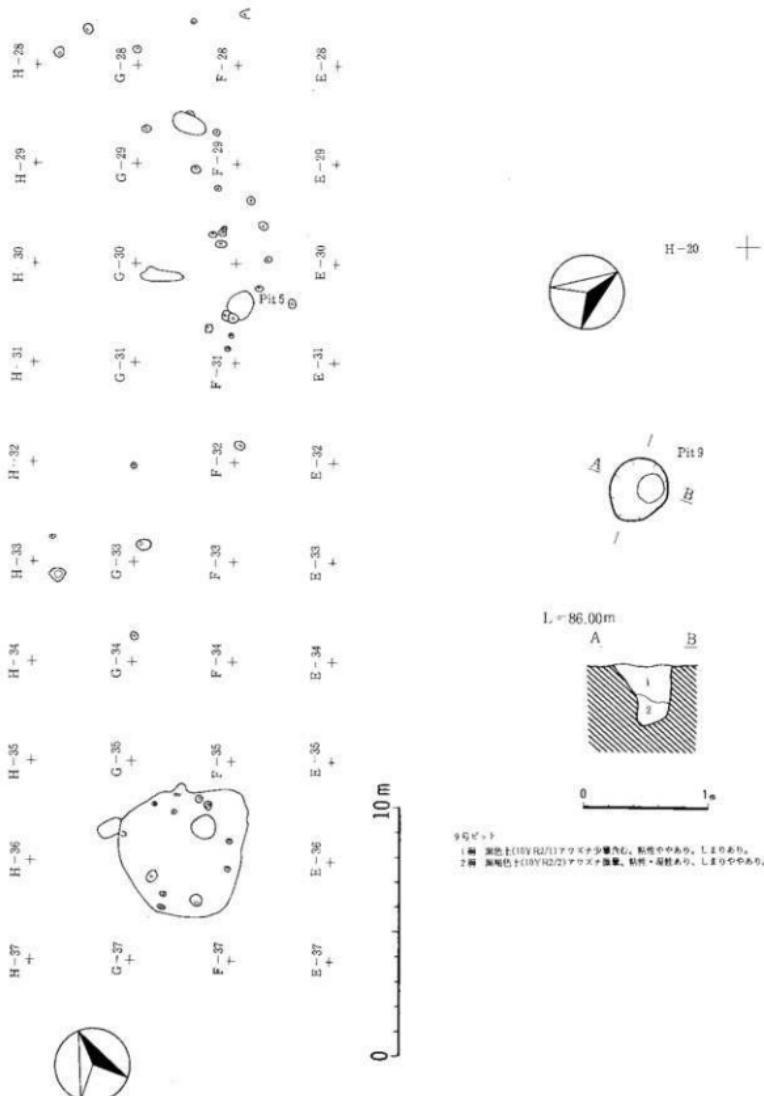


図57 ピット群実測図(2)

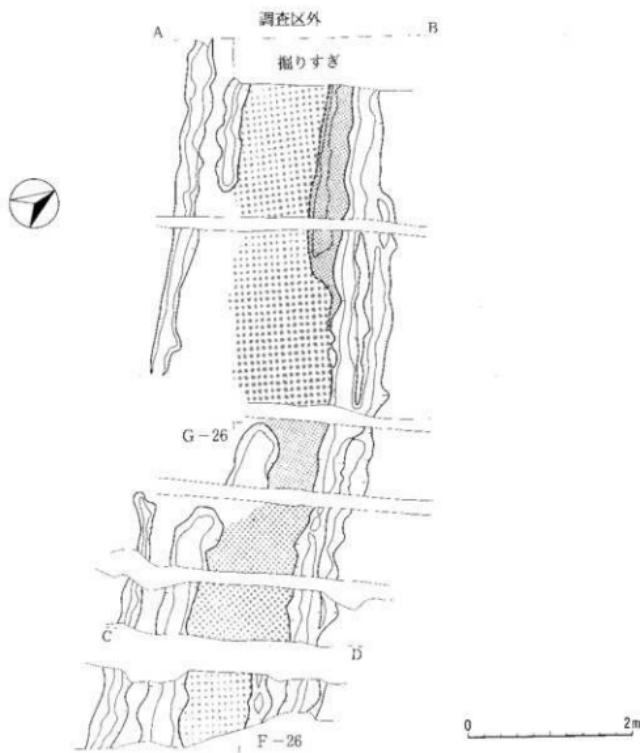


図58 道路状遺構実測図

### 第15号土坑

〔位置〕 F-44に位置する。

〔確認〕 周辺が削平されていたため、V層中で検出した。

〔平面形〕 円形を呈する。

〔規模〕 上場径63cm、底面径1m30cm、深さ72cmを計る。

〔堆積土〕 土層断面図は作成していない。調査時の所見では、下位3分の1はにぶい黄褐色土(10YR4/3)、上位3分の2は暗褐色土(10YR3/4)が堆積していた。

〔壁〕 底面から、やや丸みを持ってすばまりながら立ち上がる。断面形はいわゆるフラスコ形である。

〔底面〕 平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 出土遺物がなく、堆積土の記録もないため、所属時期は明らかでない。縄文時代のものか否かも不明である。検出面が掘り込み面であった可能性もあり、周辺地形の削平時の所産である可能性も考えねばならない。

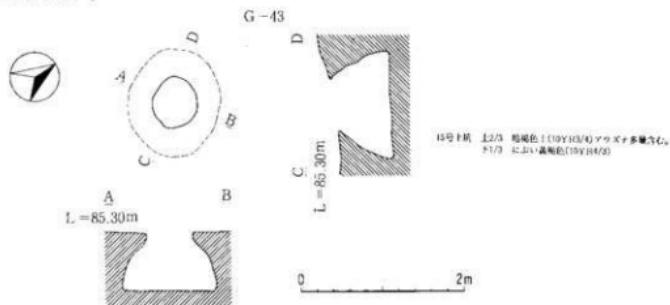


図59 第15号土坑実測図

### 焼土

〔位置〕 調査区の西端、G-47に位置する。

〔確認〕 周辺は削平後盛土されており、盛土を取り除いた段階で第V層上面が赤変しているのを確認した。

〔規模・平面形等〕 挖り方、周堤は認められず、円形で、径38cm、最大厚5cmの範囲が被熱のため赤変していた。

〔その他〕 周辺のV層上面は南へ向かって傾斜しており、また、床面も確認されなかった。確認状況からはアワズナ下の遺構である可能性も考えられようが、これに対応する早期後葉～前期前葉の遺物は本遺跡から出土しなかった。従って、住居跡が削平され、一部が遺存したものとは考えがたい。土層断面にアワズナが認められることもこれを支持している。周辺地形の削平後に形成された可能性も考えられる。

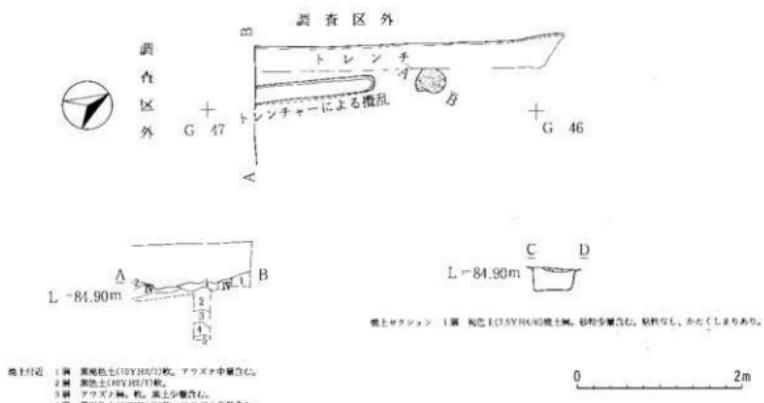


図60 燃土実測図

### 遺構の配置

縄文時代の遺構と考えられるものは、類似の形態のものはまとまって配置される傾向がある。調査区中央に検出された捨て場から東側には小判形・円形の土坑群、ビット群が、西側には住居跡と断面プラスコ形の土坑群が配置される。

## 第4章 遺構外出土遺物

### 第1節 繩文時代の遺物

#### (1) 土器

本遺跡では、段ボール箱で約8箱分の土器が出土した。そのほとんどが縄文時代後期初頭～前葉にかけての遺物である。縄文時代前期末～中期初頭の遺物もわずかに出土したが、遺構に伴うものは認められなかった。

本書では、本遺跡から出土した土器を、遺構内の土器も含めて次のIV群に分類して扱うこととした。施文手法に眼目をおき、調整、胎土等を合わせて分類を行った。文様モチーフや器形は主要な属性として扱わなかった。小破片が多く、これらの属性が不明なことが多いことによる。

底部は特に分類を行わなかった。

第I群土器（図61、62-10～14）円筒下層d<sub>1</sub>式・d<sub>2</sub>式・円筒上層b式に相当する土器。口縁部文様帶に撫糸側面圧痕を多用する。胎土は粒子の粗いものが多い。

1類（図61-1～4、図62-12）円筒下層d<sub>1</sub>式に相当する土器。口縁部は小波状口縁を有し、胸部には単軸絡状体1A類が施されるもの。

2類（図61-6）円筒下層d<sub>2</sub>式に相当する。口縁部は波状口縁をなす。口縁部文様帶は波頂部から垂下する隆帯によって区画される。区画内には、横位に、撫糸側面圧痕が施される。

3類（図61-7、図62-10・11・13・14）円筒上層b式に相当する土器。口縁部は波状口縁をなす。隆帯と撫糸側面圧痕・馬蹄形の撫糸圧痕により文様が施される。胸部は羽状繩文が施される。

I群は、調査区24ライン以東から出土したが、これに伴う遺構は認められなかった。

第II群土器（図41～46-72、図62-15～18、図63、図64-39・40）後期初頭に位置づけられている土器。胎土はI群に比して粒子が細かい。

1類（図43-7・8）胸部に繩文を施す。口縁部を無文地とし、ここに撫糸圧痕を施すもの。2片のみ出土した。

2類（図43-9・10）隆帯上に竹管状の工具により刺突が施されるもの。

3類（図43-11～16）断面三角形の隆帯により曲線的な文様が表出されるもの。

4類（図41、図42-1～5、図43-18～22・24、図44、図45-50～68、図62-15・16・18・19）沈線で曲線的な文様が表出されるもの。他遺跡の例から、同様の文様が施されると考えうる口縁部破片も含めた。沈線は比較的大く、深い。文様の表出技法により2分される。

a 地文繩文の沈線文・磨消繩文・充填繩文により文様が表出されるもの。

b 無文地に沈線が表出されるもの。

5類（図7-42・43、図8-53・55、図12-1、図42-3、図45-69～71、図52-224、図53-245）無文で器面が平滑にナデられる、あるいは磨かれるもの。

6類（図27-1）繩文のみが施される。波状口縁をなし、器形は4類に見られるものに類似する。

器形の点から本群に属することが明らかであり、IV群とは分けて扱った。

7類（図5-5、6-9・12・13、図18-5、図43-17・23、図45-48～49、図62-17・20） 3～5類に見られる口縁部。

**第III群土器** 後期前葉に位置づけられる土器。胎土はI群に比して粒子が細かい。II群とは胎土の面からは分別が難しい。復元可能な個体は出土しなかった。

1類（図17-5・6・11・12、図24-4・8・11・12・17、図33-3・8・9、図44-107、図46-78～97、図47-98～112、図61-5・41・42・45～49） 沈線により曲線文様を描くもの。

2類（図47-113） 条痕原体により曲線文様が描かれるもの。

3類（図33-6、図64-50、図64-52） 沈線により格子目文様が描かれるもの。

4類（図64-50～52） 条痕原体により格子目文様が描かれるもの。

5類（図33-7、図46-73～75、77、80～83、図64-43、図51） 1類から3類に伴うと考えられる口縁部。

**第IV群土器** 地文のみが施される、あるいは無文の土器。II・III群に伴うと考えられるが、本群土器の型式学的特徴だけで判別することは難しく、また、出土状況から分別することもできないため、一括した。地文の有無、施文原体により6分できる。

1類（図47-114～123、図48～51） 繩文のみが施されるもの。

2類（図18-4、24-6・13・20、図25-21～23、図26-24～27、図51-219・221、図52-222） 単軸縦状体5類が施されるもの。

3類（図8-56、図24-14、図52-223・225・226、図66-66・68） 無文のもの。

4類（図16-1、図52-227・228、図65-65） 条線文の施されるもの。

5類（図17-7） 撫糸の痕痕が不整に施されるもの。

6類（図52-229） 口縁部を無文とし、胴部に繩文を施す。頸部には刻みが施される。

1類と2類の量比は、正確でないにしても、図示したものがある程度実体を示していると考えてよい。すなわち、1類が圧倒的に多い。3類はほとんど出土しなかった。

口縁部の作出技法からは

i) 折り返し口縁 ii) 折り返しのない通常の口縁

に2分される。3類は出土数が少ないためi) が存在するか否か不明である。1類はii) の手法が多く、i) の手法はほとんどない。

また、平口縁・波状口縁両者とも存在するが、小片のため判別不能なものが多い。

## (2) 石器

石器は遺構内・遺構外あわせて58点出土した。砾石器は、捨て場からは出土しなかった。出土点数が少ない器種は、細分類は行わない。

剥片石器

石錐（図9-62・63、図54-1・2、図67-1） 有茎と無茎の両者がある。有茎のものはいずれも凸

基である。

石匙（図67-2） 1点出土した。縦型で、打点側につまみが作出される。

石錐（図34-5、図54-3） 2点出土した。34-5は打面を含まない2側縁を整形し、刃部を作出している。打面は表皮を残している。

籠状石器（図34-16、図67-3・4） いずれも撥形を呈する。図34-16は、比較的薄い剥片が用いられる。主要剥離面を残し、側縁の器体整形は片面加工とし、刃部のみ両面加工を施す。図68-3・4は厚みのある剥片を用い、器体整形・刃部加工とも両面加工が施される。

不定形石器

- a 一側縁に直線的な刃部が作出されるサイドスクレイパー類。（図8-60、図67-7）
- b 一側縁に、急角度剥離による刃部が作出されるエンドスクレイパー類。（図68-12・13・14、図54-4・5・9・10）
- c ピエス・エスキュー（図8-61、図54-5・9、図69-15）
- d Rフレーク（図68-5・6） 定型的な刃部を持たないもののうち、器体整形のあるものをRフレークとした。
- e Uフレーク（図9-3、図34-17・18、図54-4・6・7・8、図68-8～11） 定型的な刃部を持たないもののうち器体整形のないものをUフレークとした。

砾石器

磨製石斧（図9-66～68、図54-11・12）

凹石（図26-29、図34-19、図68-16・17、図69-18・19）

敲磨器類

敲石（図69-20・21、図70-22）

磨石（図70-23・24） 偏平な礫の長側縁に機能面を持つものが2点出土した。

石皿（図9-65、図70-25・26、図71-27～31）

### （3）土偶（図66-70）

土偶が1点出土した。土偶の脚部である。腰部には横位の沈線がめぐり、正面・側面に円文が配される。体部正面の中心線に縦位の沈線が施される。背面には縦位の沈線が2本施される。

### （4）土製品（図66-71～76）

円盤状土製品・ミニチュア土器が出土した。ミニチュア土器は、図66-73が晩期、それ以外が後期のものである。円盤状土製品は土器片を利用したものである。

### （5）石製品（図71-32）

石製垂飾品が1点出土した。孔は貫通しておらず、未製品と考えられる。凝灰岩製である。



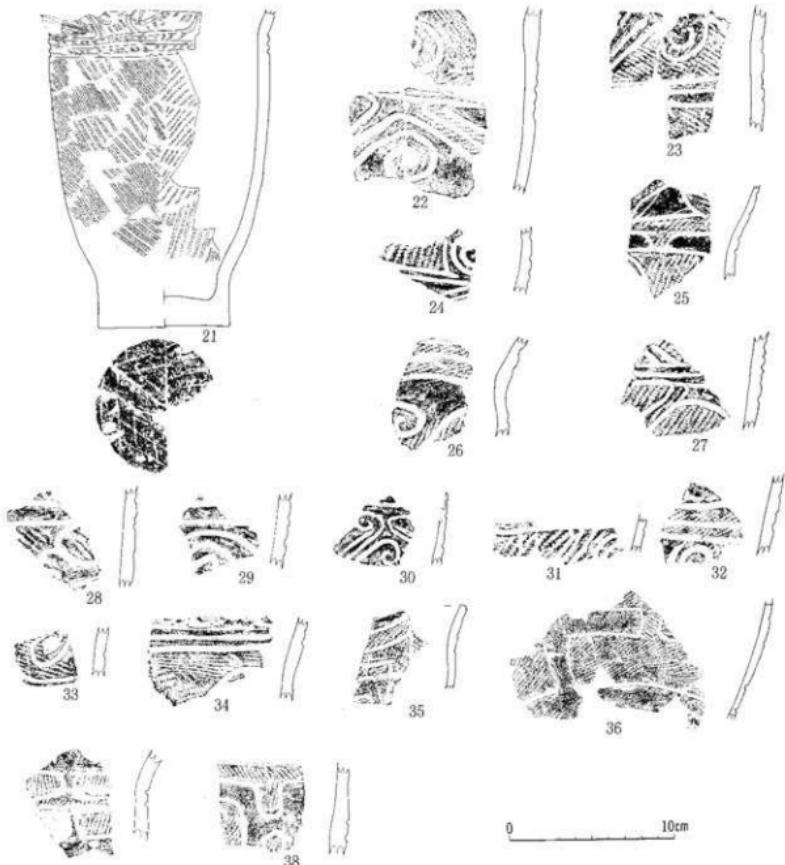
図版番号	出土位置	単位	外表面の文様等	内面調査	分類	備考
61-1	G地+下部	B	L縦櫛目状の凹凸、鋸歯状の突起	鋸歯状突起	大型 ナゲ	1-1
61-2	下地+G地 Pv17	B	L縦櫛目状の凹凸、鋸歯状の突起	鋸歯状突起	中型 ナゲ	1-1
61-3	G-30	B	□縦櫛目状の凹凸、鋸歯状の突起	鋸歯状突起	大型 ナゲ	1-1
61-4	F-94 G-92+2)	甲輪鉢状跡 1A			ナゲ	1-1
61-5	H-20	II b	甲輪鉢状跡 1A		ナゲ	1-1
61-6	G-35	II b	縫合、甲輪鉢状跡 1型、O系 HLL系丸子文(初期形)		ナゲ	1-2
61-7	E-12	II b	縫合上部斜面切欠き、周縁部		—	1-3
61-8	E-12	地土	口縫合部切欠き、神奈上丸文 柱狀、高脚立柱、紅葉文 2種		ナゲ	1-2
61-12	G-36	底上	O系丸子文(初期形)		ナゲ	1-1
61-13	E-12+13	II b	口縫合部切欠き、高脚立柱、深煎 口縫合部斜面切欠き		ナゲ	1-3

図61 遺構外出土遺物実測図(1) 土器



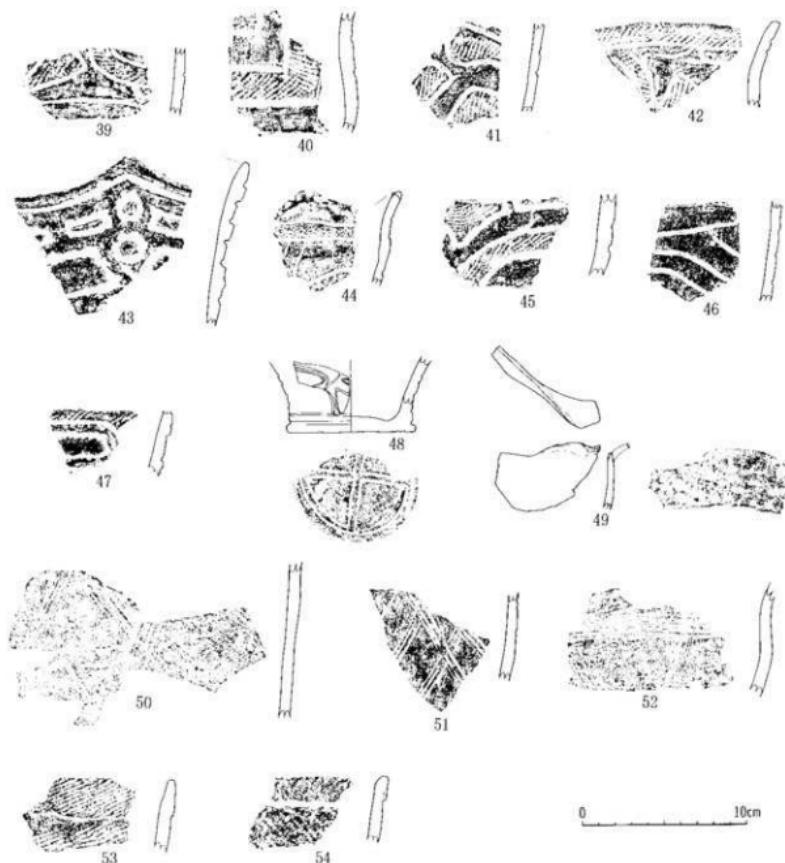
図版番号	出土位置	■	位	外觀文考	内面調査	分類	圖考
62-10	E-12	H	b	口縁丸形、熱山江模様 輪郭丸形	ナゾ	1-3	
62-11	E-12	H	b	縫合上部直角形、周縁 輪郭直角形	ナゾ	1-3	
62-12	E-12	H	b	口唇部直角形、輪郭直角形	ナゾ	1	
62-14	F-17	H	b	縫合上部直角形、 輪郭直角形	1ガキ	1	
62-15				口縁丸形、熱山江模様 輪郭丸形	ナゾ	2-4-6	
62-16	G-6-F-9	I	B	底輪、L型ナゾリ	1ガキ	2-4-6	
62-17	E-22	I		L型ナゾリ	ナゾ	2-7	
62-18	G-21	I		底輪、L型ナゾリ	1ガキ	2-4-6	
62-19	F-22	I		RL輪底、底輪	ナゾ	2-4-6	
62-20	F-22-G-27	I		縫合上部直角形	1ガキ	2-7	

図62 遺構外出土遺物実測図(2) 土器



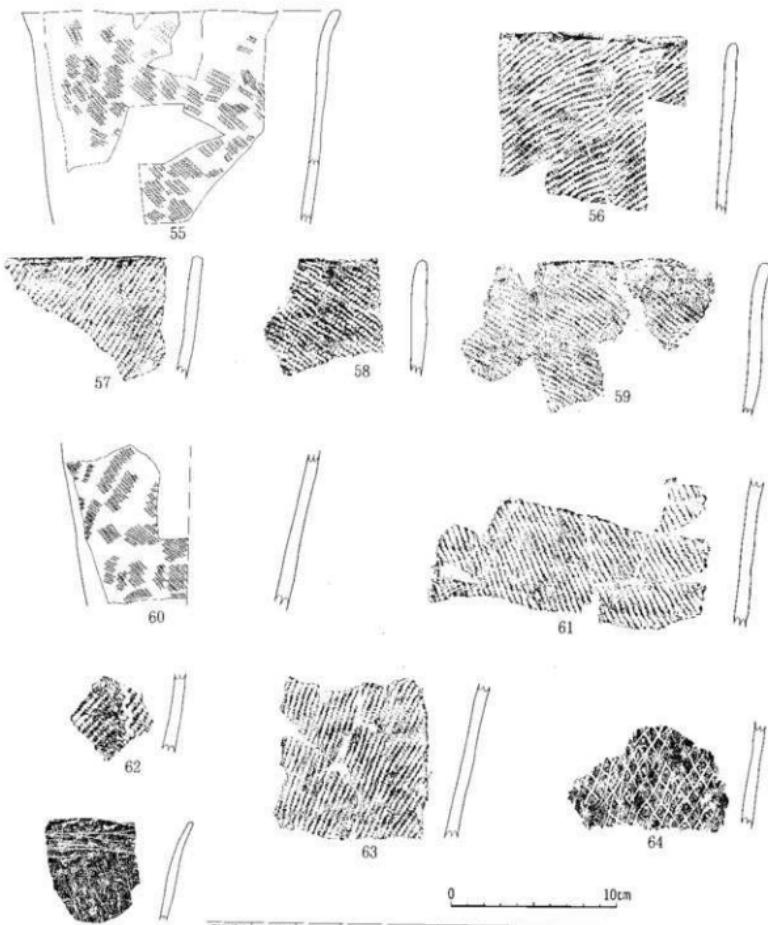
器物番号	出土位置	種 位	外表面文様等	内面裏面 分類	備考
E3-21			多孔凹凸面・RLH縫合	ナゲ	E-1.0
E3-22	G-22	Ⅱ b	波紋・L-R・ナゾリ	上ガキ	E-1.0
E3-23	F-36	種 b	L縫合・波綱	ナゲ	E-1.0
E3-24	F-27		L縫合・波綱	上ガキ	E-1.0
E3-25	G-22	Ⅲ b	波綱・RLH縫合・ナゾリ	ナゲ	E-1.0
E3-26	G-22	Ⅲ b	波綱・L-R・ナゾリ	上ガキ	E-1.0
E3-27	F-22	Ⅲ b	RL縫合・波綱	ナゲ	E-1.0
E3-28	G-22	Ⅲ b	0 多孔凹凸面	上ガキ	E-1.0
E3-29	G-22	Ⅲ b	波綱	ナゲ	E-1.0
E3-30	G-22	Ⅲ b	波綱	上ガキ	E-1.0
E3-31	G-22	Ⅲ b	波綱	ナゲ	E-1.0
E3-32	G-22	Ⅲ b	0 多孔凹凸面	上ガキ	E-1.0
E3-33	F-28	Ⅲ	0 多孔凹凸面	上ガキ	E-1.0
E3-34	G-22	Ⅲ	0 多孔凹凸面・波綱	ナゲ	E-1.0
E3-35	G-22	Ⅲ	波綱・L-R・波綱	ナゲ	E-1.0
E3-36	F-26-H	I	波綱・L-R・ナゾリ	ナゲ	E-1.0
E3-37	E-27	I	波綱	*	E-1.0
E3-38	G-16	Ⅲ b	波綱・0 多孔	ナゲ	E-1.0

図63 遺構外出土遺物実測図(3) 土器



回収番号	出土位置	層	分類	外形文様等	内部構造	分類	備考
64-30	G-22	B b		丸縦→L縦→ソリ	ミガキ	E-4-a	
64-40	G-24	B b		丸縦→L縦→ソリ	ナゲ	E-4-b	
64-41	P-46	盛土		Ω縦→H縦	ナゲ	E-1	
64-42	G-20	B		丸縦→H縦→ソリ	ナゲ	E-1	
64-43	G-31	B		横空、浅縫	ナゲ	E-1	
64-44	G-22	B b		L凸斜込み、浅縫	ナゲ	E-4-a	
64-45	P-47	盛土		L凸斜込み→浅縫	ナゲ	E-1	
64-46	G-36	盛土		浅縫	ナゲ	E-1	
64-47	P-30	I		脚空、Ω縦	ナゲ	E-1	
64-48	H-21	B b		浅縫	ナゲ	E-1	底面洗版
64-49	E-17	B		1カナ	ナゲ	E-1	片口
64-50	H-21	B b		海綿状隙による菱形文	ナゲ	E-3	
64-51	G-27	B b		2本1組の成線→1カナ	ミガキ	E-2	
64-52	F-01	B b		海綿状隙による菱形文	ナゲ	E-2	
64-53	G-32	盛土		Ω	ナゲ	IV-1	
64-54	F-30	I		折衷口縁、口縁周辺縫合 強化 断面斜面縫合	ナゲ	IV-1	

図64 遺構外出土遺物実測図(4) 土器



測定番号	出土位置	層	断面地文様様	内面地文	分類	備考
65-39	D-21	II b	○多孔土器	△ガラ	Ⅳ-1	
65-40	F-28	II b	○多孔土器	△ガ	Ⅳ-1	
65-47	F-33	II	○多孔土器	△ガ	Ⅳ-1	
65-58	G-22	II b	△H. +ナ	△ガ	Ⅳ-1	
65-59	F-16+17	II b	○多孔土器	△ガ	Ⅳ-1	
65-80	G-22	I	○多孔土器	△ガラ	Ⅳ-1	
65-81	F-35	泥土	L粘土出板	△ガ	Ⅳ-1	
65-82	F-10	II b	○多孔土器	△ガ	Ⅳ-1	
65-83	F-33	泥土	○多孔土器	△ガ	Ⅳ-1	
65-84	F-23	泥土	單面刮削器	△ガ	Ⅳ-2	
65-85	G-36	泥土	無縫支	△ガ	Ⅳ-4	

図65 遺構外出土遺物実測図(5) 土器

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・余神遺跡

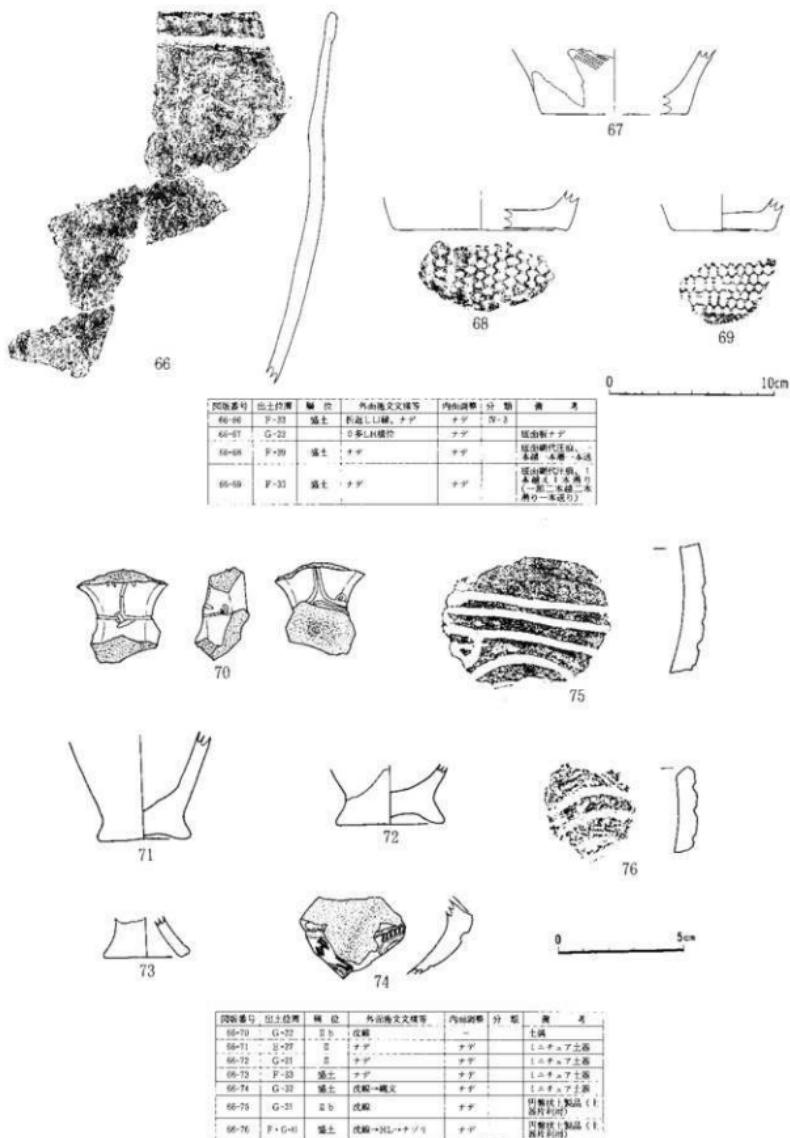
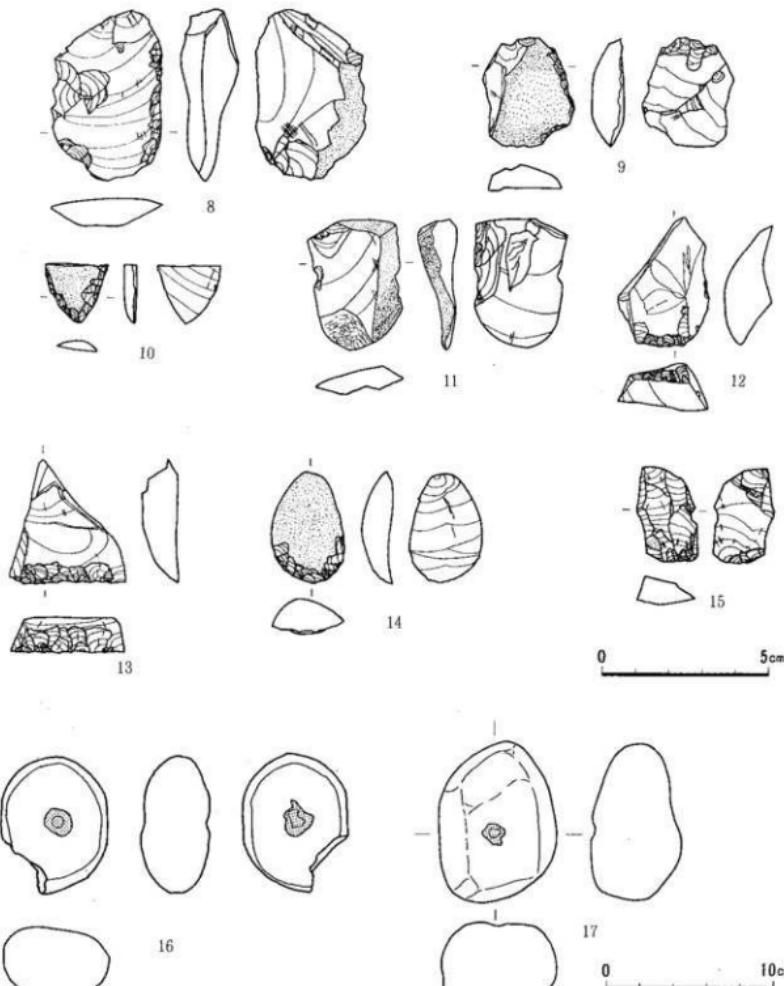


図66 遺構外出土遺物実測図(6) 土器・土製品



図67 遺構外出土遺物実測図(7) 石器

八重保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・幸神遺跡



HKB番号	出土地	層位	最大計測値				石質	分類	参考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
68-8	P-20	II b	5.3	3.3	1.7	23.4	砂質頁岩	不定形	21
68-9	E-18	III	3.3	2.8	1.0	8.5	玉珪	不定形	29
68-10	P-21	III	1.8	1.8	0.4	1.1	玉珪	不定形	37
68-11	G-31	II b	3.9	2.9	1.2	9.4	砂質頁岩	不定形	64
68-12	G-30		4.5	2.8	1.5	11.2	砂質頁岩	不定形	53
68-13	P-30	III	3.7	3.9	1.3	13.2	砂質頁岩	不定形	30
68-14	不明		3.3	2.2	1.0	7.5	毛珪	不定形	26
68-15	F-G-46	III	2.8	1.9	0.8	4.2	玉珪	不定形	65
68-16	F-G-46	III	9.2	6.7	4.0	286.7	安山岩	凹刃石	46
68-17	F-G-47	偏土	9.7	7.6	0.4	394.0	麻料岩	凹刃石	48

図68 構造外出土遺物実測図(8) 石器

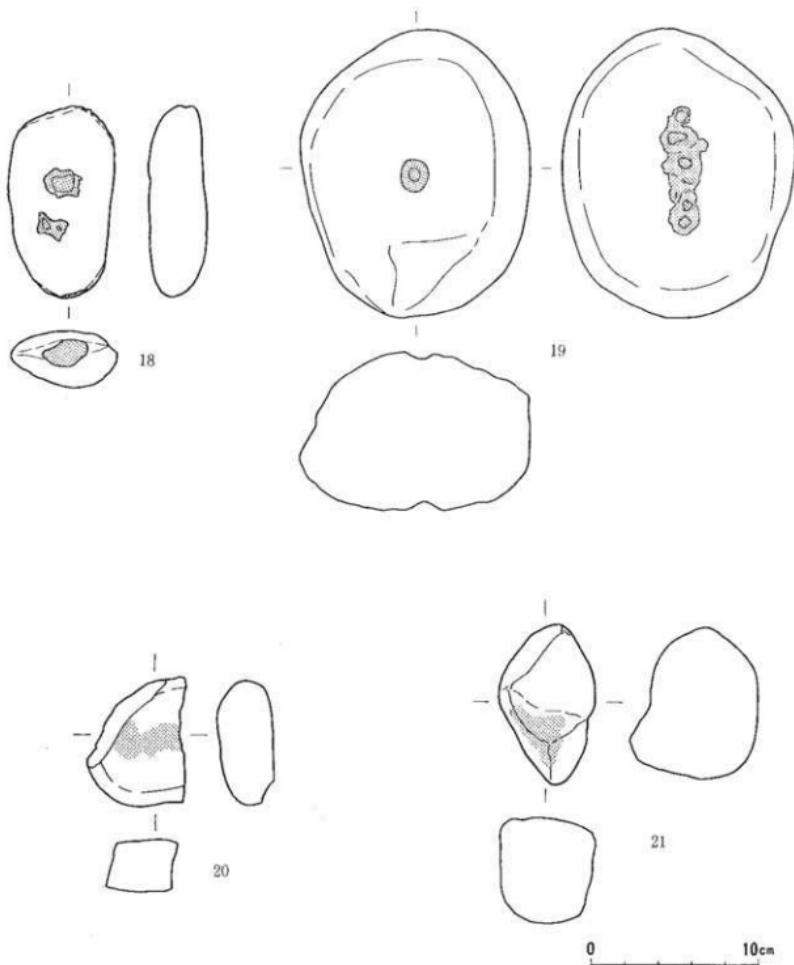
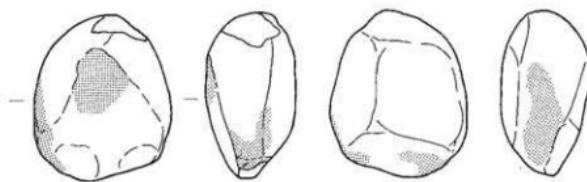
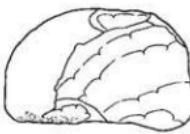
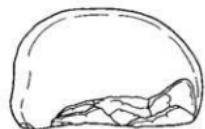
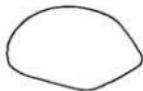


図69 遺構外出土遺物実測図(9) 石器



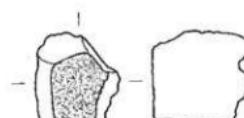
22



23



24



25



26

0 10cm

試験番号	位置	種類	最大計測値				石質	分類	標示	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
70-22	P-31	磨石	10.2	8.2	3.4	342.4	安山岩	磨石	44	-
70-23	E-12	磨石	7.2	11.3	3.7	317.6	安山岩	磨石	45	-
70-24	P-15	磨石	11.0	6.5	4.0	376.9	安山岩	磨石	41	-
70-25	P-G-07	磨石	5.7	5.1	5.9	258.3	安山岩	小磨石	50	-
70-26	P-G-08	磨石	10.3	8.0	5.5	294.1	石英安山岩	石墨	51	-

図70 遺構外出土遺物実測図100 石器

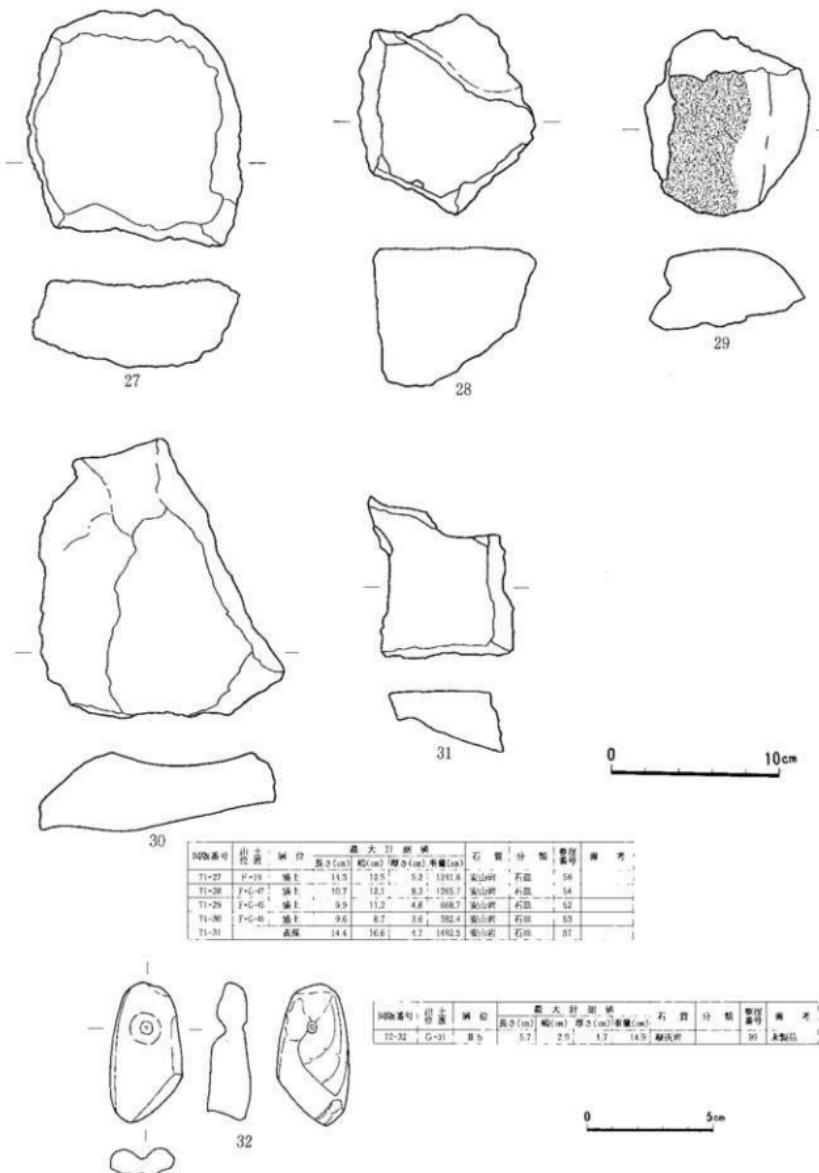


図71 遺構外出土遺物実測図(1) 石器・石製品

## 第5章 調査の成果と考察

### 第1節 検出遺構について

#### (1)土坑

土坑は、その規模・形状から以下の4類に大別できる。

A類 平面形が小判形で、長径は1m50cm前後のもの。…5号土坑・9号土坑・14号土坑・20号土坑・22号土坑

B類 平面形が円形で、深さはおおむね60cm以下のもの。堆積土の状況、平面の規模、出土遺物から細分できる。

B1 堆積土は人為堆積による砂質シルト。明らかに遺構に伴う遺物が伴出するもの。径約3mを計る。…12号土坑

B2 堆積土は人為堆積によると判断される。堆積土中に遺物の遺棄が認められる。…13号土坑

B3 堆積土は人為堆積によると判断される。堆積土中からは遺物が出土する場合があるが、遺構に伴うとは考えられない。…3号土坑

B4 堆積土は自然堆積によるもの、自然・人為いずれとも判断しがたいものがある。堆積土中に遺物が含まれる場合があるが、遺構に伴う遺物とは認められない。…1号土坑・2号土坑・4号土坑・6号土坑・10号土坑・15号土坑・16号土坑・21号土坑・23号土坑

C類 平面形が円形で、深さが1m50cmを越えるもの。断面形はラスコ形またはビーカー形になるもの。…7号土坑・8号土坑・18号土坑・19号土坑

D類 平面形が円形で、深さが1m程度のもの。…11号土坑

堆積土の状況は、A類はいずれも自然堆積とはとらえがたい。B類は自然堆積の可能性のあるもの、自然堆積とは考え難いものの両者がある。C類は人為的な堆積によると考えられるもの、自然堆積によると考えられるものの両者がある。D類は自然堆積と考えられる。

なお、土坑の用途推定ための土壤分析は、諸般の事情のため実施できなかった。

所属時期は決定しがたいものが多いが、II・III群土器が主体的に出土しており、これに伴うものと考えて大過ない。

#### (2)住居跡

1号住居跡は、平面形は円形を基調とするものと考えられるが、一部が突出し、洋梨形を呈する。この突出した部分に壁に沿って、屈曲する溝状の施設が掘り込まれる。このような溝状施設が付設される住居は県内では類例がほとんどない。平成8年度、当埋蔵文化財調査センターが調査した福地村西張(2)遺跡<sup>10</sup>では、溝状の掘り込みが検出された例がある。溝の底面は不整で、形状・規模は類似する。しかし、屈曲の頂点が壁に接するだけで、他には壁に接点を持たない点で本遺跡例とは異なっている。五戸町中ノ沢西張遺跡（青森県教委 1976a）1号住居跡でも壁から遊離した浅い溝状の掘り込みがある。底面は平らなようだ。ただし、平面図には図示されているものの、セクション図にはこ

の溝に相当する落ち込みが示されていない。本文中には「床面の東側壁付近にある溝状部分は、住居掘り方で第IV層と第VI層の混合土で平坦に踏み固められていた。」とされており、底面が踏み固められていたものか、貼床が認められたものか分からぬ。壁からの距離も前掲2例とは異なっており、とりあえず、関連する可能性のある遺構としてあげておくにとどめる。八戸市域では類例が認められない。

溝状の掘り込みの性格は、その位置から出入口、あるいは祭祀施設などの可能性を考えられようが、本遺跡例では、積極的にいずれかの可能性を支持する状況は認められなかった。溝状施設の系統・分布、及び性格については類例の増加を待たねばならない。

### (3) 遺構の配置と遺構の用途

本遺跡からは縄文時代後期初頭～前葉にかけての住居跡、土坑、捨て場、ピット群等の遺構が検出された。土坑は複数のタイプが認められた。ここでは、これらの遺構の形態・分布のあり方から、それぞれの用途を推定してみたい。

本遺跡の微地形は、微弱な谷部とそれをはさむ二本の尾根部からなる。微弱な谷部と尾根部の比高差は、約3mである。微弱な谷部には捨て場が、その南西側の尾根部には住居跡と土坑C類が、北東側の尾根には土坑A・B類と、ピット群が分布する。

形態の侧面からみれば、土坑A類は、土坑墓と判断されるものにしばしば認められる形態である。この形態の土坑で墓と推定されるものは青森県内では、青森市朝日山遺跡〔晚期前葉〕(青森県教委 1993a、白鳥 1993)、三内丸山遺跡〔中期〕(青森県教委 1977・1993b)、浪岡町源常平遺跡〔晚期〕(青森県教委 1977)、上尾駒(1)遺跡C地区〔晚期中葉〕(青森県教委 1988)、福地村館野遺跡〔前期末～中期〕(青森県教委 1989)、風張(1)遺跡〔後期〕(坂川 1994)、是川中居遺跡〔後期〕(八戸市教委・八戸市立歴史民俗資料館 1978)等で検出されている。

遺構個々について墓坑と認定するための要件はいくつか考えられる。人骨の出土、副葬品の出土、磷酸・脂肪酸等の検出、土坑の形態・堆積土の状況、配石の有無などがあげられよう。

上記例のうち、人骨が出土したのは是川中居例のみである。副葬品の出土例は、源常平・上尾駒(1)、朝日山各遺跡で多数、三内丸山・館野で少數である。調査面積が少ないため遺構配置の明らかでない是川中居例を除けば、副葬品の出土例から墓と考えられるものは、集落外に築かれた朝日山例があるにせよ、いずれも土坑が一定のまとまりをもって配置されている例が多い。どのような集落形態であるかは別として、墓のための場を形成していたと考えられる。

本遺跡例では人骨は出土せず、副葬品として認定される遺物も出土しなかった。かろうじて遺構の形態・堆積土の状況から墓の可能性を指摘しうるにすぎない。しかし、集落の中である一定のまとまりを持つと考えられる点は注意しておきたい。

土坑C類は、いわゆるフラスコ状ピットである。フラスコ状ピットの個々の用途も単純には決定しがたい。墓坑として用いられる例もあるが、本遺跡では墓の機能と結びつく要素は堆積土のありかたや出土遺物のあり方からは認められなかった。

近年の縄文時代集落の研究の成果によれば、集落の場の使い分けがあったことが明らかである。特に環状集落ではその傾向が強く、それぞれの場の性格が推定されている。具体的には、祭祀域、墓域、居住域、貯蔵穴域などである。

本遺跡では、上述のように土坑A類とC類は遺構個々の状況からはその性格を断定することは難しい。しかし分布域を異にしている。縄文時代集落の研究成果に照らせば、A類は墓坑、C類は貯蔵穴としての性格が想定されよう。

土坑B類はその性格付けが困難だが、B1類、B3類は堆積土の状況・分布域から考えて、墓に関連する可能性が指摘できる。自然堆積の可能性があるものはその性格を決定することは困難である。ピット群は、土坑A・B類の集中する区域により濃密に分布しており、具体的な機能は明らかにしがたいにしても、これら土坑と関連した機能が推定される。

以上のごとく各遺構の性格を想定することが許されるなら、大局的にみれば、調査区中央部の微弱な谷部に捨て場が、北東側尾根部に墓域が、南西側尾根部に居住域と貯蔵穴域が位置すると考えられよう。ただし、今回の調査範囲は農道建設用地で最大幅10m前後すぎず、集落全体がどのような形態をなすものか不明である。集落全体のあり方は周辺地形を考慮すれば環状構成をとるとは考えがたいこと、その中で場の使い分けが認められることを指摘するにとどめておく。

## 第2節 出土遺物について

### (1) 第II群土器の編年的位置づけ

第II群土器は、後期初頭に位置づけられている土器群である。後期初頭とは概略十腰内I式以前を意味する。1類は牛ヶ沢(3)遺跡III群1類に相当する。2片のみ出土した。3類は葦窓遺跡III群3類、沖附(2)遺跡III群2類の一部、上尾駒(2)遺跡IV群1類の一部に相当しよう。4類は、多くが小破片であり、モチーフにより全体を分類することが難しく、施文手法に主眼をおいて類別したため、他の多くの報告書における複数類型を含んでいる。文様モチーフの全体を知りうるものを図72に示す。全体のモチーフが分からないものもおむねこれらに類すると考えられる。モチーフ2は沖附(2)遺跡III群1・2類、モチーフ1は弥栄平(2)遺跡V群B・C類に相当する。

以上のように本遺跡の土器群は牛ヶ沢III群の要素をほとんど含まず、葦窓・沖附(2)・弥栄平(2)遺跡等に見られる土器群である。

該期の土器編年は多くの論考が示されており、いまなお見解の一致を見ていない。代表的な論考をあげれば、(葛西 1979) (成田 1986・1989) (本間 1985、1987、1988) がある。4類のうち、モチーフ2は成田のいう沖附(2)式に、1は弥栄平(2)式に相当しよう。3類は(成田 1989)に照らした場合位置づけが不明である。(本間 1988)に照らせば1~3類は葦窓式に、4類の多くは塩沢式に相当しよう。

葛西・成田両氏と本間氏の見解の相違点は、極言すれば三角形区画文と方形区画文(本間 1985)が時間差を持つのか同時存在かという問題に集約される。図72にあげた文様モチーフの1・5bは三角形区画文に、2・5aは方形区画文にあたる。本遺跡では問題に解決を与えるような出土状況は認められず、また両者の文様施文手法に差異を認めることはできない。充填縄文・磨消縄文ともにみられる<sup>⑨</sup>。

ここで、方形を基調とする入組文(モチーフ5a)と三角形を基調とする入組文(モチーフ5b)が同一個体内に配される土器(図23-1)に注目したい。口縁部・頸部・胴部最大径付近には断面三角形の素文の隆起が施され、胴部上半には方形基調の入組文が、下半には三角形基調の入り組み文が

される。方形と三角形の区画両者に時間的な接点があることを示している。型式学的な方法によるなら、隆帯の位置付け如何によって方形区画と三角形区画の時間的関係が求められることになり、上記の問題の解決に一石を投じることになろう。

註(1) 平成9年度報告予定。

註(2) ここでいう光埴繩文とは、沈線による区画後、区内のみに繩文を施したものという。従って同一区画内でも区画内の部位によって繩文原体の回転力向が異なることが認定要件である。繩文が沈線を切っている場合もわずかに認められるが、多くの場合は沈線の再調整（ナゾリ）が施されたものと考えられる。磨消繩文は、繩文原体の回転方向が同一であることを認定要件とした。しばしば、区画外に消し残した繩文がみられる。モチーフの複雜さや割り付けの均一さからみて、繩文施文前に（ごく浅い沈線などにより）レイアウトが為され、繩文施文後、最終的に沈線の再調整が施された可能性が高い。

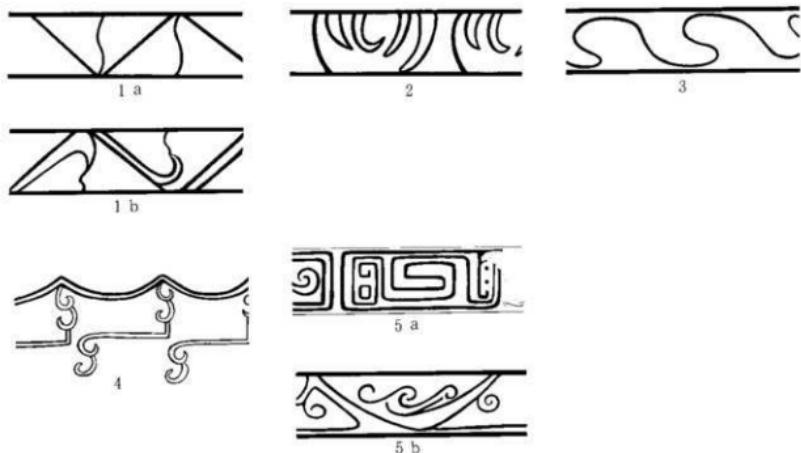


図72 文様モチーフ分類図

## (2) 土器胎土について

本遺跡出土土器の中で、胎土に金雲母を含むものが少数認められる。雲母は肉眼でも容易に確認できる程度の大きさのものが含まれている。遺跡付近及び五戸川上流域の基盤岩は、地質調査所発行の1/200,000地質図によれば、砂岩及び泥岩、礫岩および凝灰岩か、角閃石輝石デイサイト軽石および火山灰、かんらん石含有輝石安山岩溶岩および火碎岩などで、雲母を一般的に含む花崗岩は見あたらぬ。従って、これらの土器は製品としてか原材料としてかは別として、花崗岩を基盤とする地域から搬入された可能性が高い。

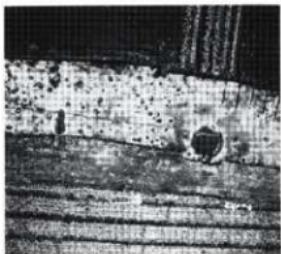
花崗岩を基盤とする地域で本遺跡に最も近い地域を求めれば、約25km離れた階上町階上岳周辺（図1参照）である。比較的近距離の地域間交流を示す可能性が指摘される。

引用・参考文献

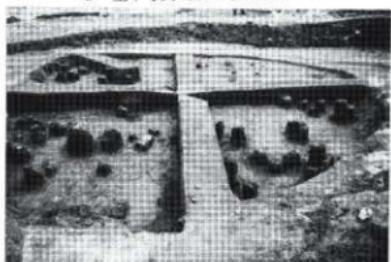
- 青森県教育委員会 1977 『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』
- 1976 a 『中ノ沢西張遺跡・古街道長根遺跡』
- 1976 b 『泉山遺跡発掘調査報告書』
- 1977 『源常平遺跡発掘調査報告書』
- 1984 a 『弥栄平遺跡(2)発掘調査報告書』
- 1984 b 『垂庭遺跡発掘調査報告書』
- 1984 c 『牛ヶ沢(3)遺跡発掘調査報告書』
- 1986 『沖附(2)遺跡発掘調査報告書』
- 1988 a 『上尾駒(1)遺跡C地区』
- 1988 b 『上尾駒 II(2)遺跡 II (B・C地区) 発掘調査報告書』
- 1989 『館野遺跡』
- 1993 a 『朝日山遺跡発掘調査報告書 II』
- 1993 b 『三内丸山(2)遺跡 II』
- 1993 c 『青森県遺跡詳細分布調査報告書 V』
- 1995 『青森県遺跡詳細分布調査報告書 VII』
- 大池昭二・中川久夫 1979 『1978年度 地質調査報告書』 東北農政局計画部
- 葛西 効 1979 「第6章 後期編」『螢沢遺跡』 青森市螢沢遺跡発掘調査団
- 倉石村教育委員会 1997 『八戸久保遺跡発掘調査報告書』倉石村教育委員会
- 坂川 進 1994 「縄文時代後期の風張(1)遺跡土壙墓群について」『北奥古代文化』23  
北奥古代文化研究会
- 白鳥 文雄 1993 「青森市朝日山遺跡の墓制と葬制について」『考古学ジャーナル』368
- 成田 澄彦 1989 「入江・十腰内土器様式」『縄文土器大観』IV 小学館
- 八戸市教育委員会・  
八戸市立歴史民俗資料館 1978 『是川中居遺跡地内発掘調査概要 土坑墓・赤染人骨』
- 本間 宏 1985 「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実体」『よねしろ考古』1 よねしろ考古学研究会
- 1987 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1) -東北北部を中心に-」『よねしろ考古』3 よねしろ考古学研究会
- 1988 「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」『よねしろ考古』4 よねしろ考古学研究会
- 通産省工業技術院地質調査所 1991 「地質図」八戸



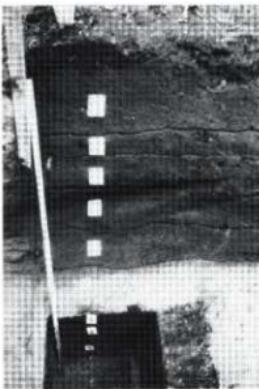
1 遺跡全景



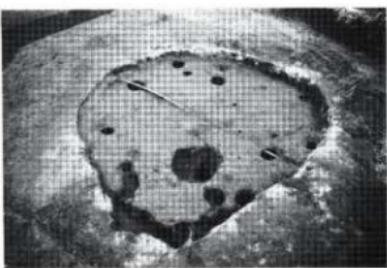
2 空中写真（第12号土坑、第22号土坑）



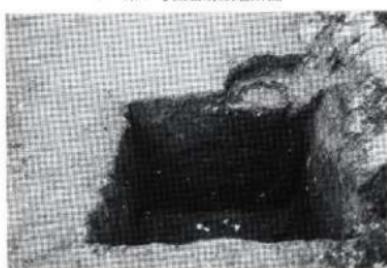
4 第1号住居跡土層断面



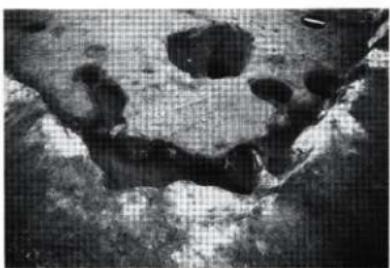
3 基本断面（G-30グリッド）



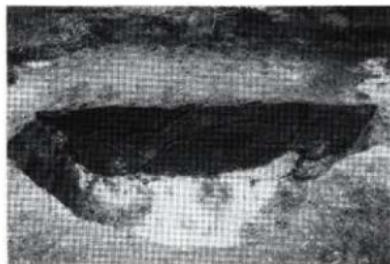
5 第1号住居跡完掘状況



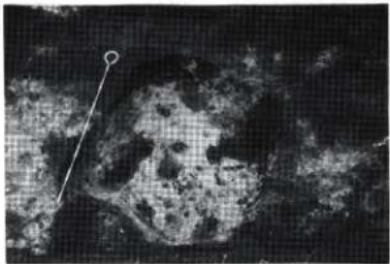
6 第1号住居跡pit9断面



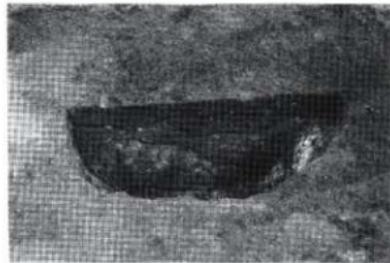
7 第1号住居跡溝状施設



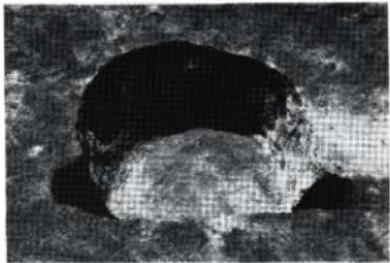
1 第1号土坑土屑断面



2 第1号土坑完掘状况



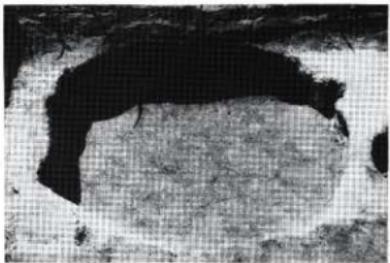
3 第2号土坑土屑断面



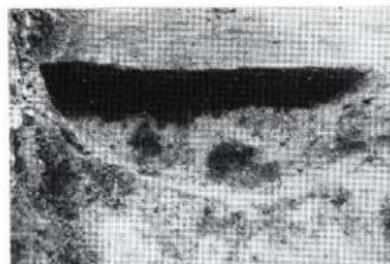
4 第2号土坑完掘状况



5 第3号土坑土屑断面



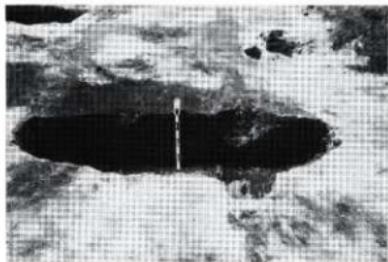
6 第3号土坑完掘状况



7 第4号土坑土屑断面



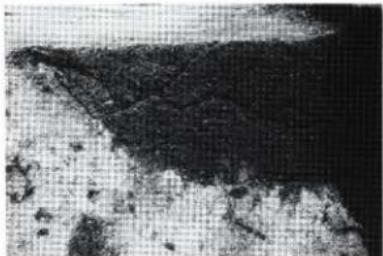
8 第4号土坑完掘状况



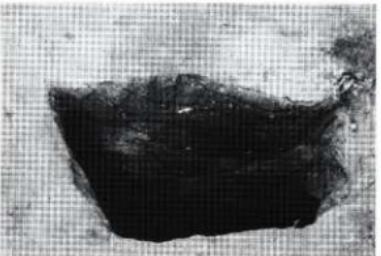
1 第5号土坑土层断面



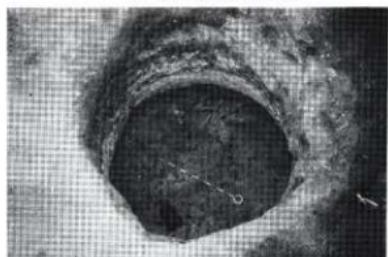
2 第5号土坑完掘状况



3 第6号土坑土层断面



4 第7号土坑土层断面



5 第7号土坑出土状况



6 第7号土坑完掘状况



7 第8号土坑土层断面



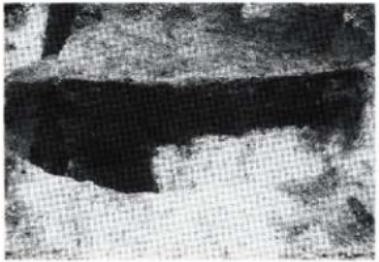
8 第8号土坑完掘状况



1 第9号土坑上层断面



2 第9号土坑完掘状况



3 第10号土坑上层断面



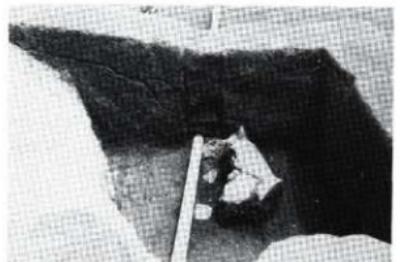
4 第10号土坑完掘状况



5 第11号土坑上层断面



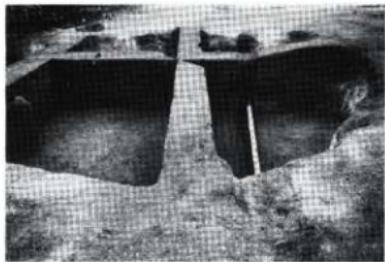
6 第12号土坑確認状况



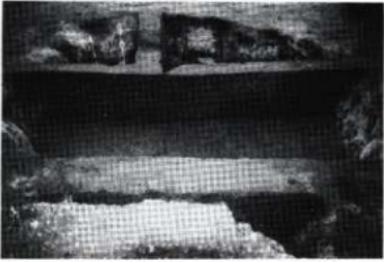
7 第12号土坑遺物出土状况



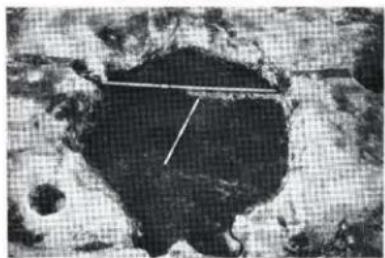
8 第12号土坑遺物出土状况



1 第12号土坑土屑断面（北西—南东）



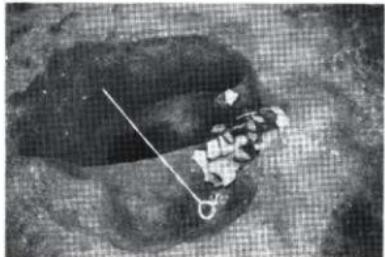
2 第12号土坑土屑断面（北东—南西）



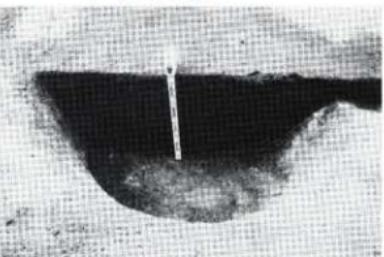
3 第12号土坑完掘状况



4 第13号土坑土屑断面



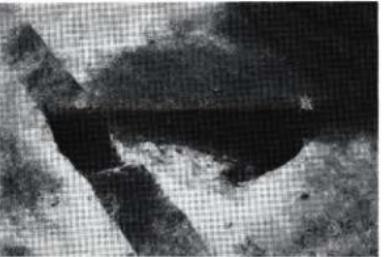
5 第12号土坑遗物出土状况



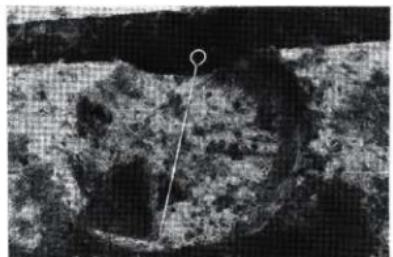
6 第16号土坑土屑断面



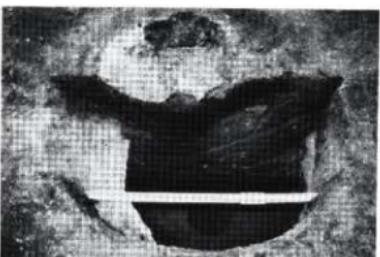
7 第16号土坑完掘状况



8 第17号土坑土屑断面



1 第17号土坑完掘状况



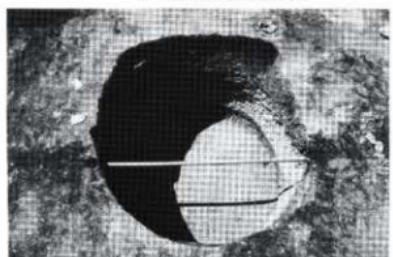
2 第18号土坑土屑断面



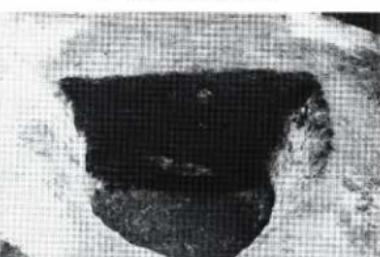
3 第18号土坑完掘状况



4 第19号土坑土屑断面



5 第19号土坑完掘状况



6 第20号土坑土屑断面



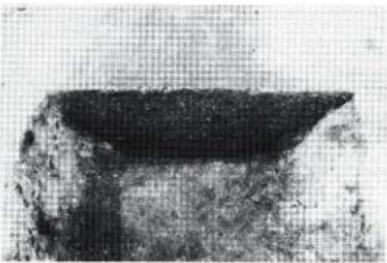
7 第20号土坑完掘状况



8 第21号土坑土屑断面



1 第21号土坑完掘状況



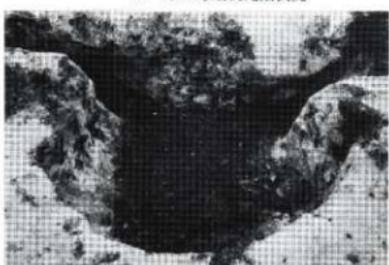
2 第22号土坑土層断面



3 第22号土坑完掘状況



4 第23号土坑土層断面



5 第23号土坑完掘状況



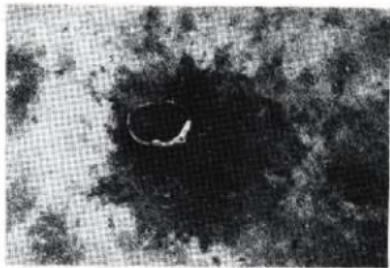
6 捨て場



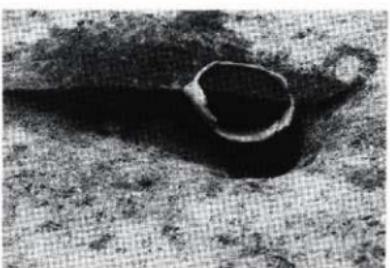
7 捨て場遺物出土状況



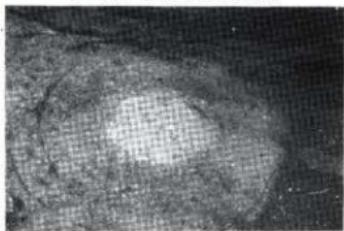
8 捨て場遺物出土状況



1 第1号埋設土器確認状況



2 第1号埋設土器断面



3 捣て焼土確認状況



4 道路状造構



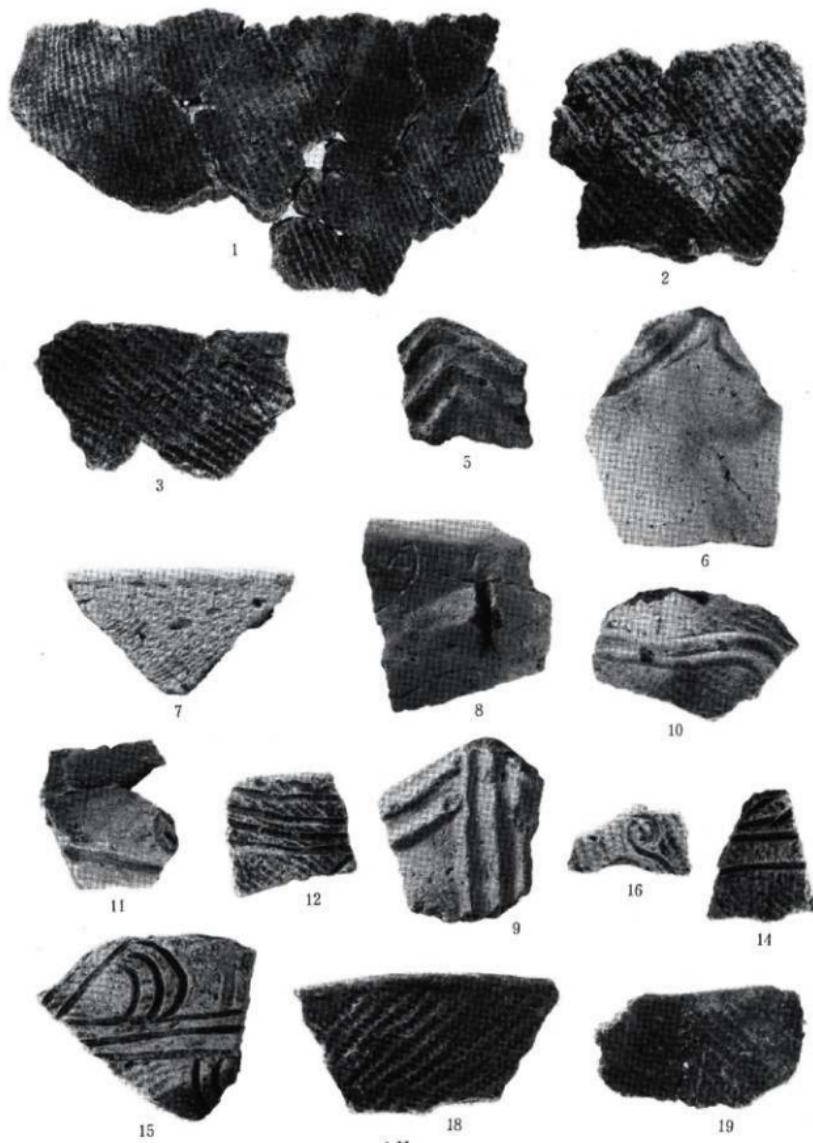
5 捣て焼土断面



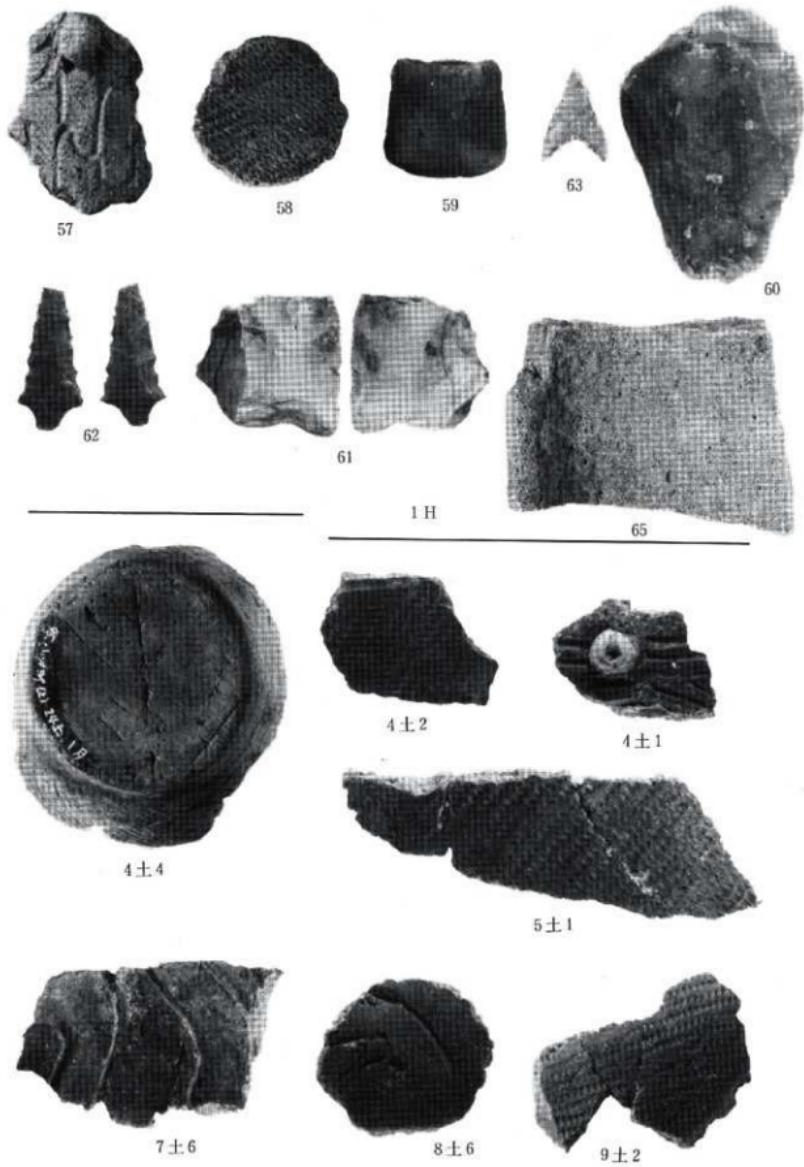
7 第1号溝状  
ピット土層断面



6 第1号溝状ピット完掘状況



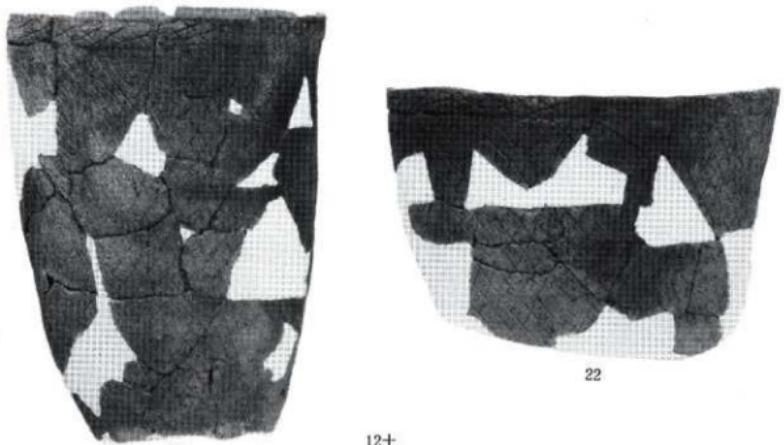
図版 9 遺構内出土遺物



图版 10 遗構内出土遺物



1



24

12土

22

圖版 11 遺構內出土遺物



17



27

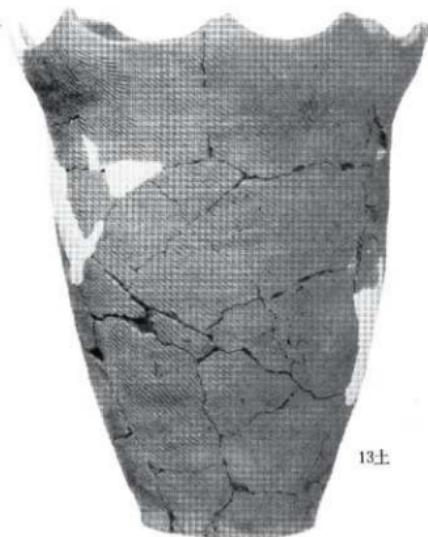


28



28内面

12土



13土



6



8



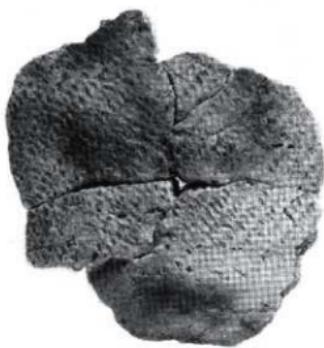
10

19土

图版 12 造構内出土遺物



22号土坑



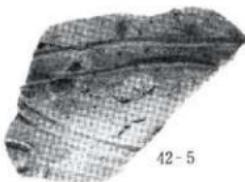
図版 13 造構内出土遺物・捨て場出土遺物



42-2



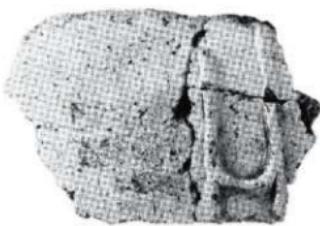
42-6



42-5



43-15



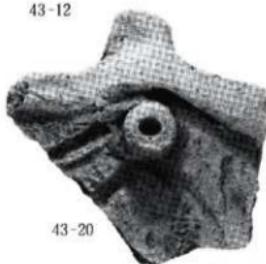
43-12



43-10



43-19

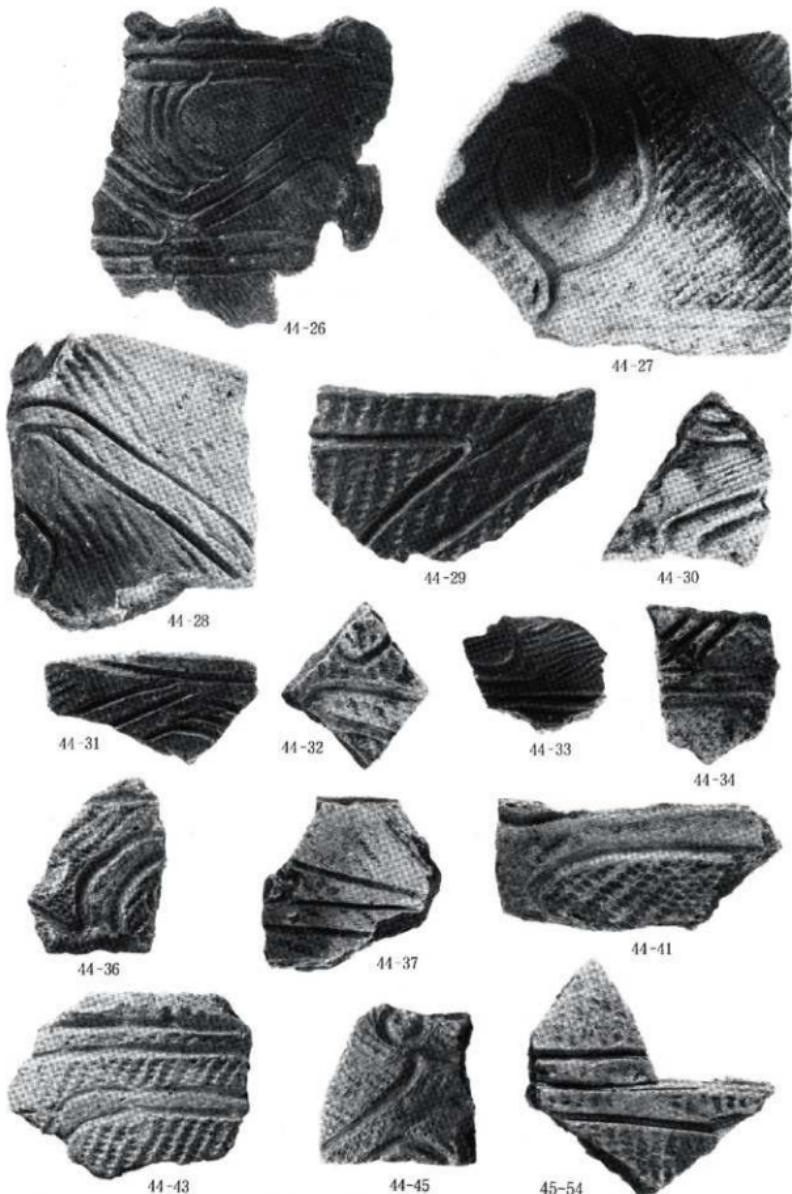


43-20

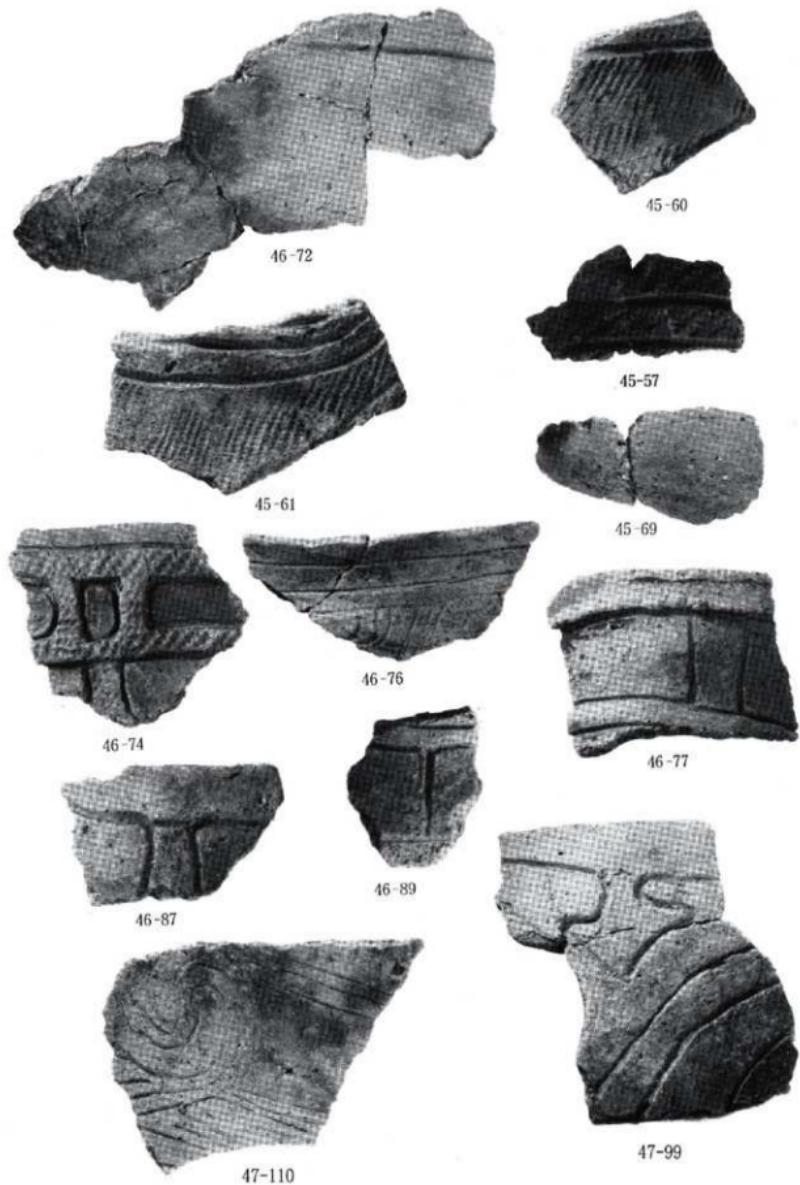


43-23

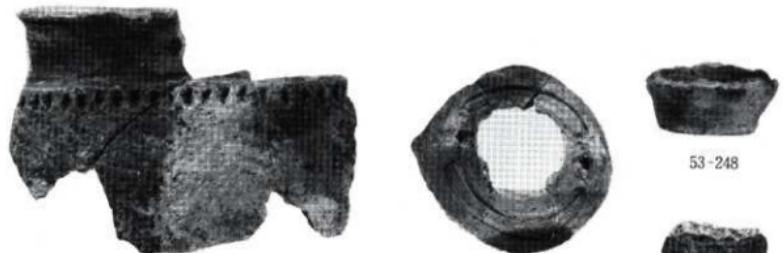
図版 14 捜て場出土遺物



図版 15 捨て場出土遺物

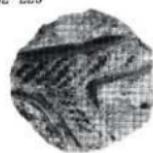


図版 16 捨て場出土遺物



52-229

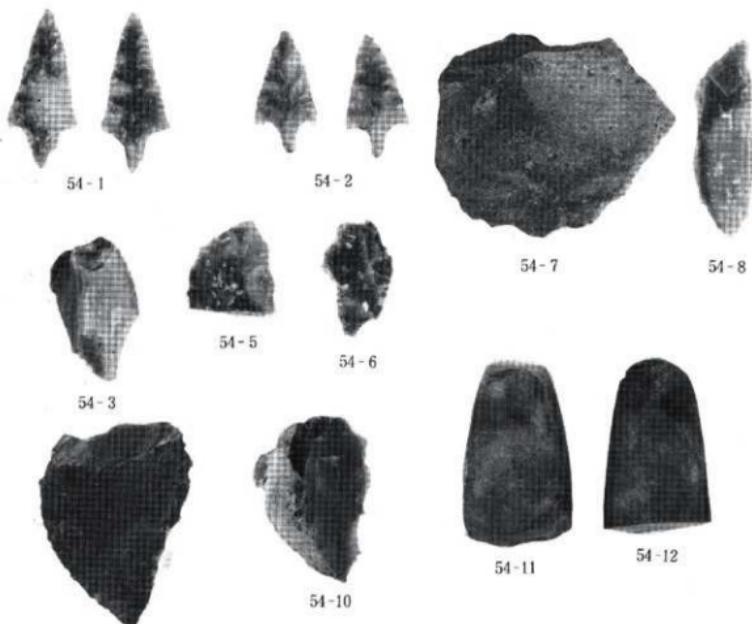
53-248



53-247



53-250

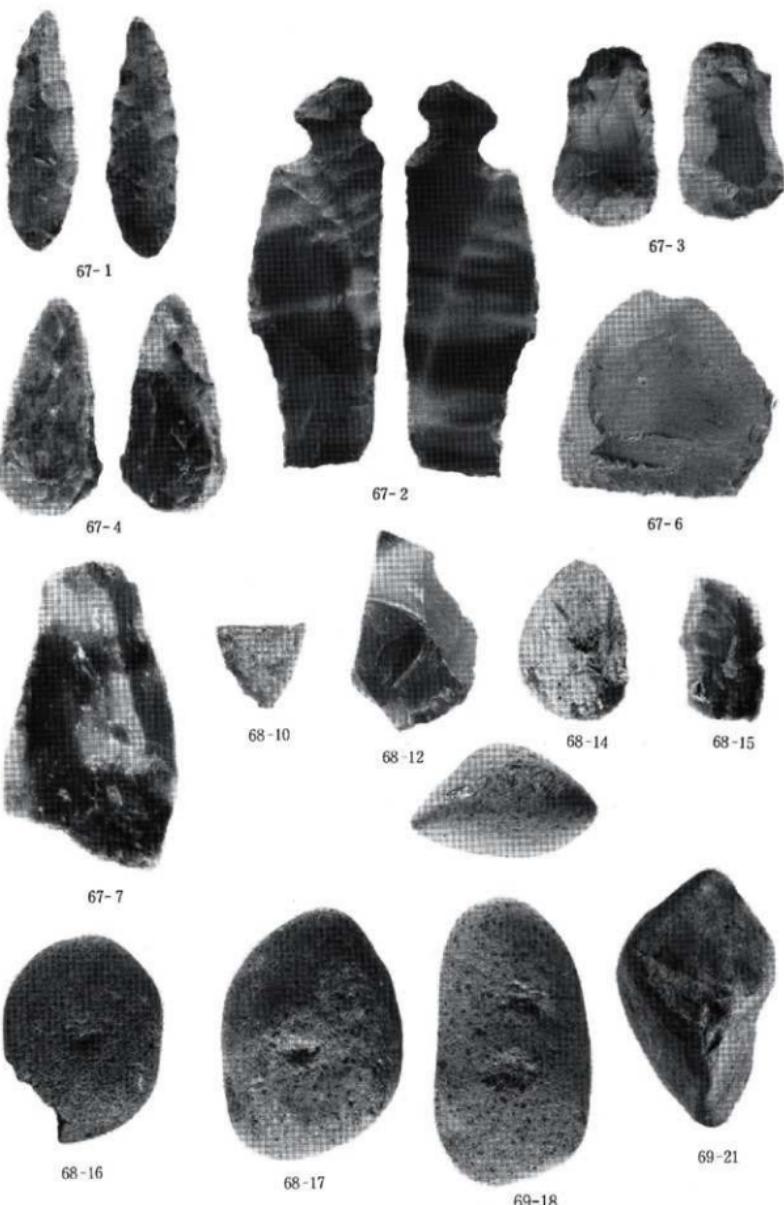


54-9

図版 17 捨て場出土遺物



图版 18 造構外出土遺物



図版 19 遺構外出土遺物



70-24



70-23



71-31



70-26



71-29



71-27



71-30

図版 20 遺構外出土遺物

八盃久保（3）遺跡  
幸 神 遺 跡



# 第1章 調査要項、調査経過、調査方法

## 第1節 繩文時代の遺物

### 1 調査目的

一般農道幸神線建設事業に先立ち、当該地区に所在する八戸久保(3)遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2 発掘調査期間 平成8年4月23日～同年6月25日まで

### 3 遺跡名および所在地 八戸久保(3)遺跡（青森県遺跡台帳番号 66032）

三戸郡倉石村大字中市字八戸久保30、外

幸神遺跡（青森県遺跡台帳番号 66031）

三戸郡倉石村大字中市字幸神33、外

### 4 調査対象面積 八戸久保(3)遺跡 1700m<sup>2</sup>

幸神遺跡 1450m<sup>2</sup>

### 5 調査委託者 青森県農林部農地建設課

### 6 調査受託者 青森県教育委員会

### 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

### 8 調査協力機関 倉石村、倉石村教育委員会、三八教育事務所

### 9 調査参加者 調査指導員 市川 金丸 県考古学会会長 (考古学)

調査協力員 畠山 春雄 倉石村教育委員会教育長

調査員 潤澤 幸長 八戸市文化財審議委員 (考古学)

七崎 修 元県立八戸北高等学校教諭 (地質学)

小林 和彦 八戸市縄文学習館主査兼学芸員 (動物考古学)

### 調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課長 鈴木 克彦

・総括主幹

主 事 中村 哲也

主 事 野村 信生

調査補助員 深畑 哲哉

片山 幾子

堤 淳子

永洞 佐載子

## 第2節 調査経過・調査方法

### 調査経過

一般農道幸神線建設事業に伴い、県教育庁文化課は、平成4年度に詳細分布調査を実施し、路線内に八戸久保(2)、八戸久保(3)、幸神の3遺跡が所在することを確認した。

このうち、八戸久保(3)・幸神の両遺跡について、本調査の必要の有無を確認するため、教育庁文化課は、平成6年度に両遺跡の範囲確認調査を実施し、本調査の必要があると判断した。これを受け、平成8年度に、埋蔵文化財調査センターを調査担当者として、両遺跡の本調査を実施することとなった。八戸久保(3)遺跡は、調査区中央を生活道路が走っており、包含層上面までが深いため、通常の調査方法では、路肩が崩落するおそれがあった。調査委託者と協議を行い、調査開始前に長さ8mの深掘範囲を3ヵ所確保するため、矢板を打設して調査を実施した。両遺跡とも生活道路を調査区内に含んでいたが、遺構・遺物ともに量が少なかったため、道路を付け替える必要は認められず、6月25日、日程を7日間短縮して調査を終了した。

#### 調査方法

##### 〔八戸久保(3)遺跡〕(図1・2)

前年度調査を行った八戸久保(2)遺跡のグリッドをそのまま延長した。グリッドの呼称も八戸久保(2)遺跡のものを踏襲した。ただし、Aラインより南にもグリッドを設定する必要が生じたため、このラインを小文字のアルファベットy、zで表記した。また、算用数字は47から用いるべきところを誤って48から使用した。遺物の注記後これに気づいたため、遺物に注記されたグリッドは提示した図面上のグリッドとずれている。観察表中の出土位置は、遺物の注記をそのまま採用した。

水準点は、工事用の体育馆B.M. 1 (標高86.812m) を基準として調査区内に数ヵ所移設した。

##### 〔幸神遺跡〕(図3・4)

調査区内に所在する工事用測量杭のうち、No.61・62を結んでグリッドの基準線とし、No.61のセンター杭を通り、この基準線に直行するラインにより4m×4mのグリッドを設定した。

グリッドの呼称は、センター杭を結んだ基準線に平行する線を西から東へ算用数字1、2、3…で、これに直行する線をローマ数字とアルファベットA～Tの組み合わせで北からIA、IB…で表し、IT以後はローマ数字IIとアルファベットの組み合わせで表記した。この交点をIA-12の様に表記した。この結果、No.61センター杭は、IIH-18と表記されることとなった。グリッド名は、南北隅のグリッドライン交点を以って命名した。

水準点は、工事用のB.M. 3 (標高84.159m) を基準として調査区内に数ヵ所移設した。

他の調査方法については、八戸久保(2)遺跡の方法を踏襲したので本書八戸久保(2)遺跡の頁を参照されたい。

## 第2章 遺跡の地理・地形

八戸久保(3)遺跡は、八戸久保(2)遺跡に隣接する谷部にあたる。詳細は八戸久保(2)遺跡を参照されたい。

幸神遺跡は、八戸久保(2)遺跡の西南方、約1kmに位置する。大池・中川(1979)によれば、名久井段丘相当の段丘上に位置する。しかし、本書八戸久保(2)遺跡の頁でも述べたように、この段丘全体が名久井段丘相当とはいえない。幸神遺跡では、八戸火山灰までしか確認しておらず、この段丘が名久井段丘に相当するのか、より高位の段丘に相当するものかは分からぬ。微地形的に見れば、調査区東部は、西北西～東南東へのびる浅い谷地形にあたる。

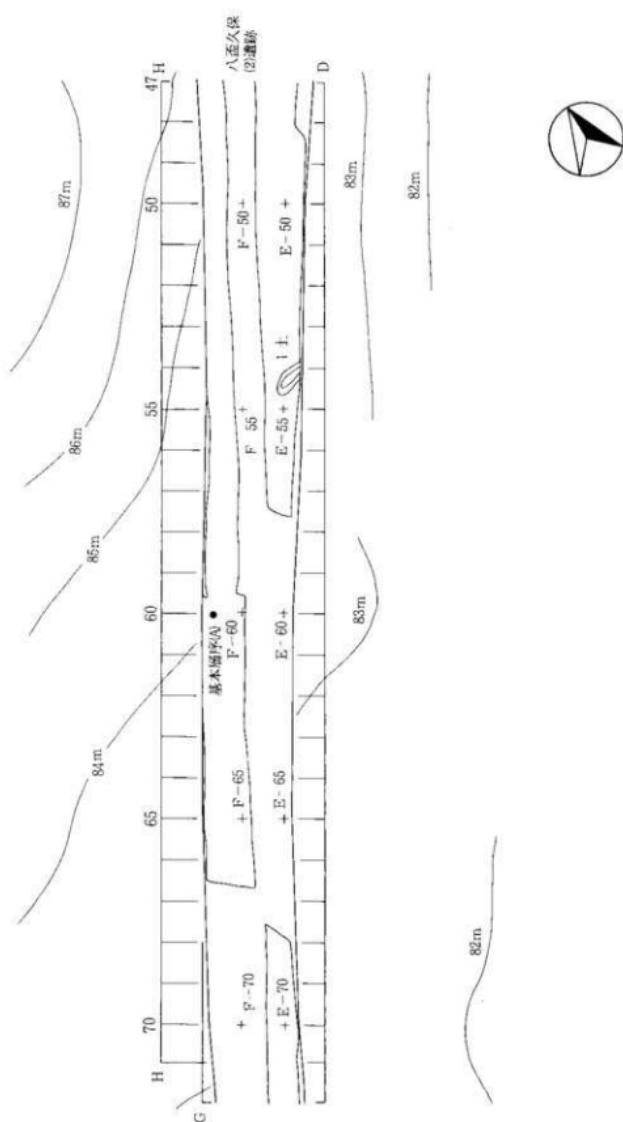


図1 八重久保(3)遺跡グリッド・遺構配置図(1) (S = 1/500)

八重久保(2)道路・八重久保(3)道路・空神道路

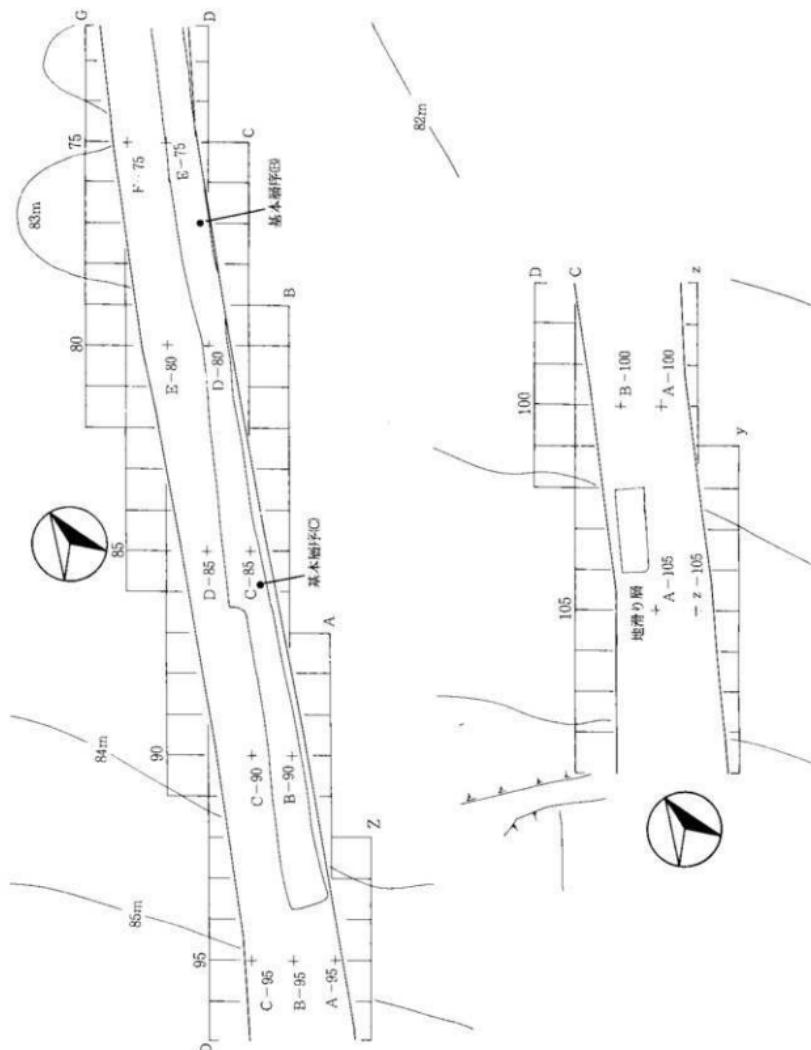


図2 八重久保(3)遺跡グリッド・遺構配置図(2) (S = 1 / 500)

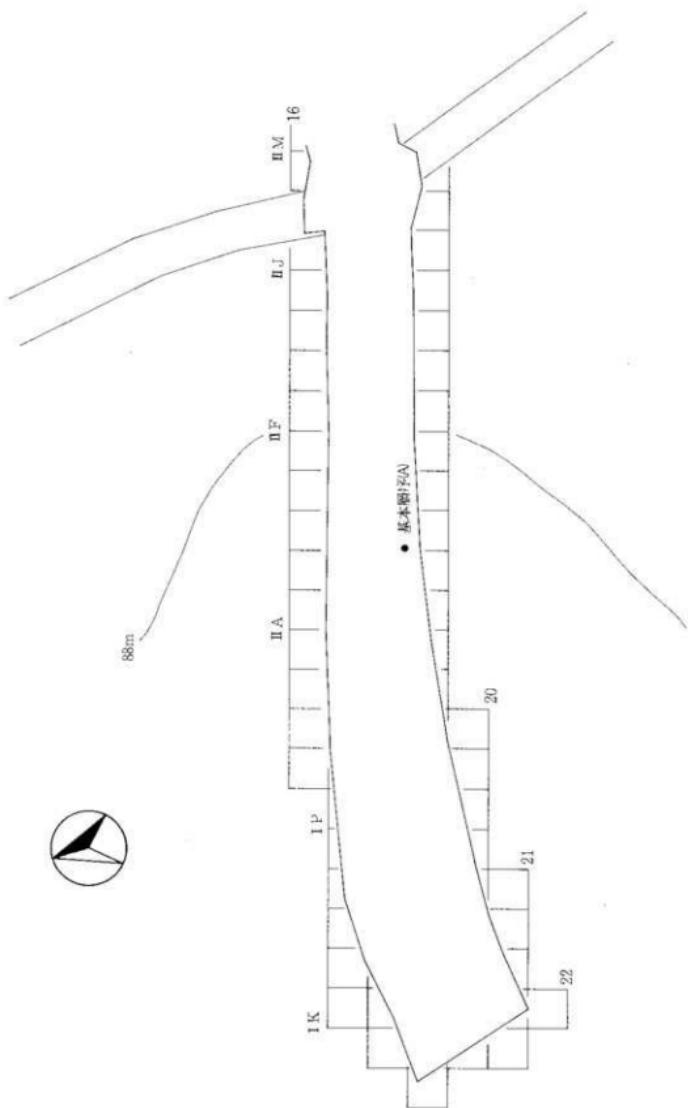


図3 幸神遺跡グリッド・遺構配置図(1) (S=1/500)

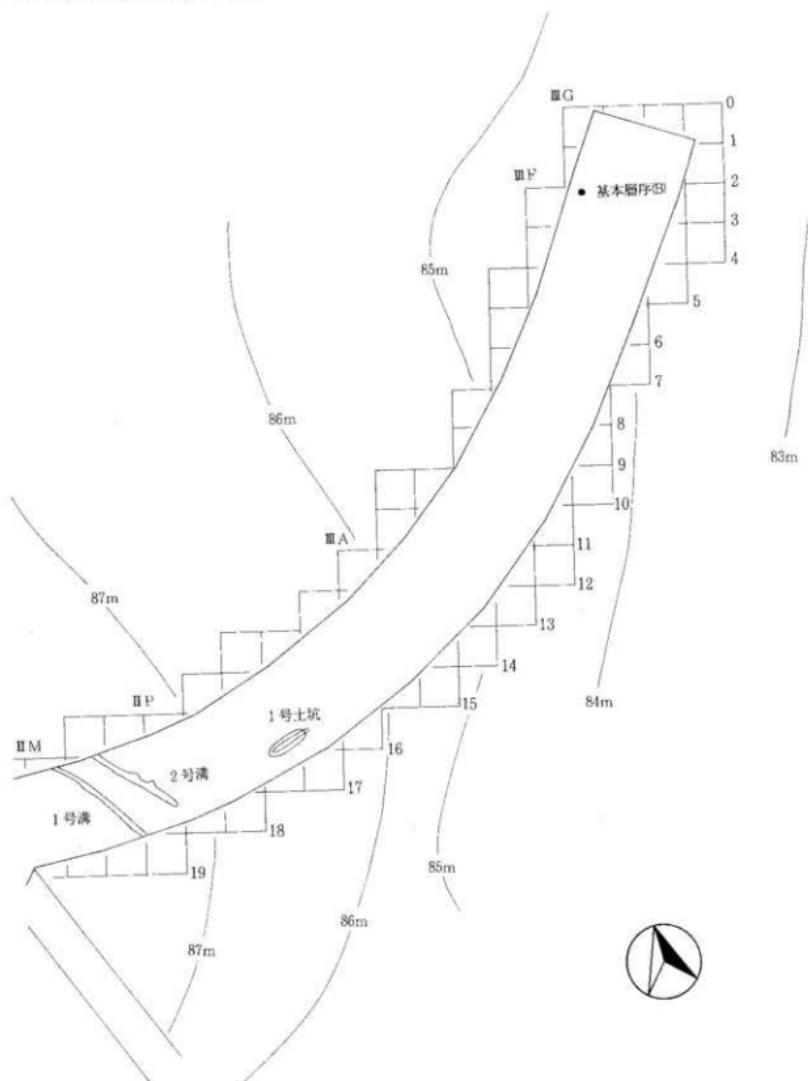


図4 幸神遺跡グリッド・遺構配置図(2) (S = 1/500)

## 第3章 八戸久保(3)遺跡

### 第1節 遺跡の層序

遺跡内の堆積土はⅠ～Ⅷの8層に分層された。また、調査区東部には、八戸久保(2)遺跡より続く盛土が厚く堆積していた。また、調査区中央部の谷地形では、水性の堆積が認められた。

- 第Ⅰ層 耕作土(10YR4/2) 及び盛土 黄褐色粘質火山灰土(10YR5/6)。盛土は、北東方向へ行くに従って、黒色砂質シルトと混合し、暗褐色に近くなる。
- 第Ⅱ層 黒色砂質シルト(10YR1.7/1)  $\phi$ 2mmの十和田b火山灰を含む。八戸久保(2)遺跡のⅡa層に相当する。
- 第Ⅲ層 黒褐色砂質シルト(10YR2/2) 土色は漸移的で、下位へいくほど色調は明るくなる。IV層との境界は不明瞭である。八戸久保(2)遺跡のⅡb層に相当する。
- 第Ⅳ層 明黄褐色粗粒砂(10YR6/6) 中搬浮石(通称アワズナ)層。上層ほど粗粒で最大径2cm。
- V層との界面はシャープである。IV層との界面は波打っている。
- 第Ⅴ層 黒褐色粘土(10YR2/2～2/3)、褐色細粒砂質シルト(10YR4/4)、暗褐色粘土(10YR2/3)の葉理が見られる。水流の影響下に堆積したものと考えられる。調査区中央部の谷地形にのみ認められる。調査区東部の、尾根に続く斜面では認められない。
- 第VIa層 黒褐色粘質シルト(10YR2/2)  $\phi$ 2cmの南部浮石を含む。
- 第VIb層 褐色粘質シルト(10YR4/6) 上層とは漸移的である。
- 第VIIa層 にぶい黄褐色中粒砂質シルト(10YR5/4)。
- 第VIIb層 褐色中粒砂質シルト(10YR4/4)。
- 第VIII層 灰白色火山灰(10YR7/1) 八戸火山灰層。上位は風化の進んだ疊。下位は粘土。

遺物が出土したのはⅠ～Ⅲ層までで、生活面はⅢ層中にあったと考えられる。

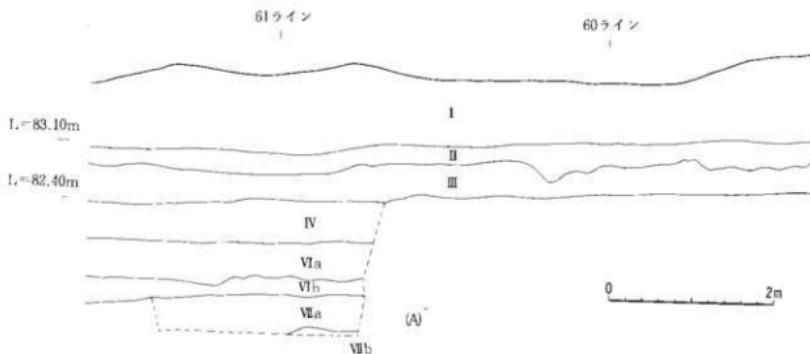


図5 基本層序(1) ( $S=1/60$ )

## 八面久保(2)遺跡・八面久保(3)遺跡・幸神遺跡

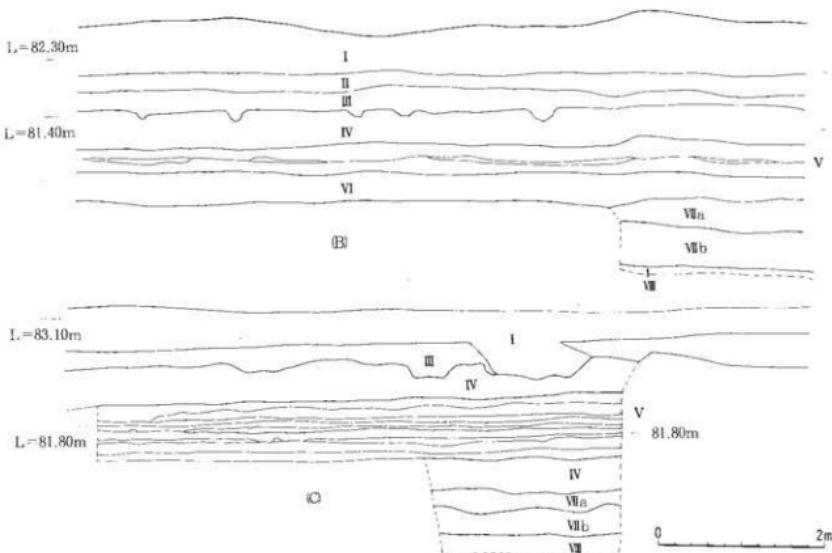


図6 基本層序(2) (S = 1/60)

## 第2節 検出遺構と出土遺物

本遺跡からは土坑1基が検出された。他に、人間活動との直接の関わりは不明だが地滑りの痕跡が検出された。

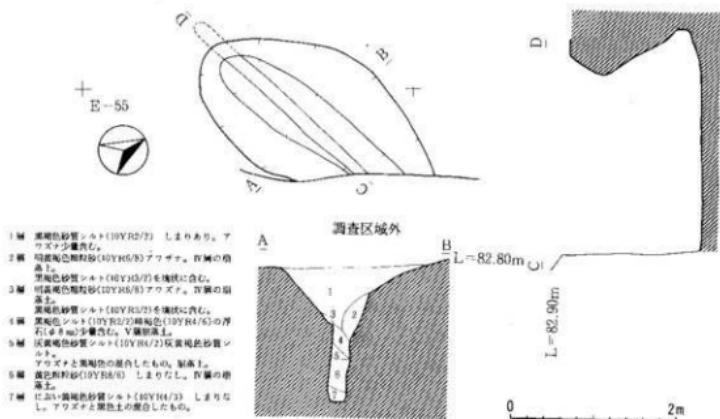


図7 第1号土坑実測図

第1号土坑

[位置] F-55に位置する。

〔確認〕 IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

〔平面形〕 調査区外にのびるため全形は不明だが、いわゆる溝状ビットである。

[規模] 調査区内で、長軸1m22cm、幅85cmを計る。

[堆積土] 7層に分層された。黒色の砂質シルトと壁の崩落土よりなる。アワズナを含むものの、十和田 b 火山灰は認められない。

[壁] 7層を底面とし、底面からまっすぐに立ち上がり、中位から外に開く。開口部付近は大きく開いていた。壁の崩落によるものと考えられ、本来は開口部の幅は現状より狭かったと考えられる。

〔出土遺物〕 なし。

[時期] 堆積土の状況から縄文時代の可能性が高いが、決定的ではない。

### 地滑り跡 (図 8, 図版 1)

調査区西端、A-102~104グリッドにかけて設定したトレンチで、地表の痕跡が検出された。各



図8 地滑り跡土層断面図

種の土層が斑状に混在するが、その単位は大きい。層厚は約2mにおよぶ。地滑り層の上層の黒色土中から十和田a火山灰が検出され、下層の黒色土は十和田b火山灰を含む。また、地滑り層中から縄文時代晚期大洞C1式土器の破片が出土した（図10-16）。このことから、地滑りが発生したのは縄文時代晚期以降、10世紀前葉までのあいだと考えられる。この地滑りにより本来谷の一部であったところが、尾根状に高まっていることが明らかになった。従って調査区全体が縄文時代には谷地形であり、遺構が存在するとは考えにくい。

本調査区から南方に約50m離れた、倉石村中央児童館敷地内でも同様の地滑り痕跡が検出されており（倉石村教育委員会 1997）、この地滑りは大規模なものであったことがわかる。

### 第3節 遺構外出土遺物

本遺跡からは土器・石器等あわせて段ボール2箱分が出土した。いずれも遺構に伴うものではない。ほとんどが、遺跡最低部の70ラインより北東側で出土した。このことから、尾根部に位置する八重久保(2)遺跡からの流れ込みと考えられる。

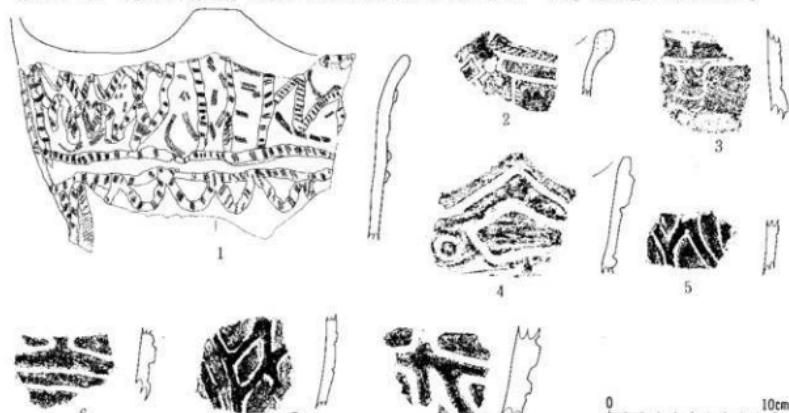
#### 土器（図9・10）

第I群土器 円筒上層b式に相当する土器。（図9-1）

調査区南西部から1点出土した。

第II群土器 縄文時代後期初頭～前葉の土器（図9-2～8、図10-9～15）

第III群土器 縄文時代晚期、大洞C1式に比定される土器（図10-16）。地滑層から出土した。



調査番号	出土層	層位	外山跡文様等	内面調査	分類	量
9-1	A-35	■	縄目・熱糞側面	1ガキ	I	
9-2	F-38	■	縄目・熱糞側面	1ガキ	II	
9-3	F-38	■	縄目・沈縄	ナダ	II	
9-4	D-75	■	沈縄	ナダ	II	
9-5	F-62	■	縄目・化繩	1ガキ	II	
9-6	F-62	■	沈縄・化繩	ナダ	II	
9-7	F-62	■	沈縄・化繩	1ガキ	II	
9-8	E-18	■	縄目・沈縄	ナダ	II	

図9 遺構外出土遺物実測図(1) 土器

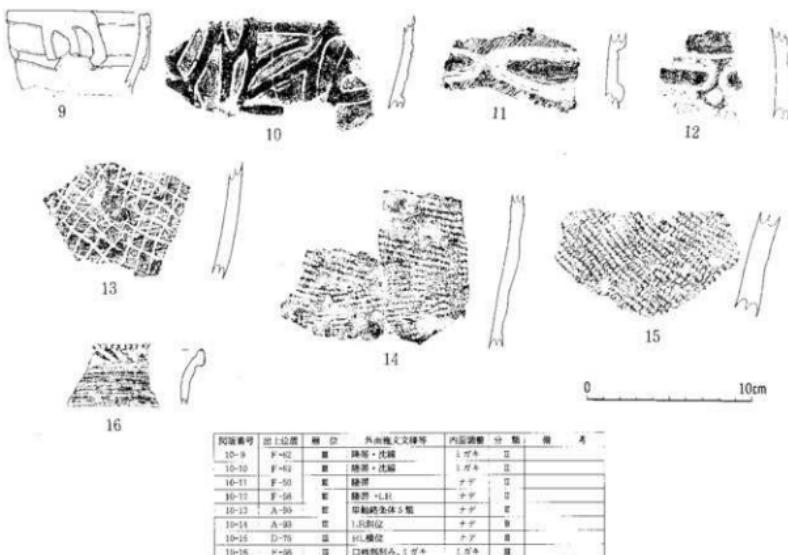


図10 遺構外出土遺物実測図2) 土器

## 石器 (図11、図12-4~10)

1は無茎石鋸である。腹面に主要剥離面を残す。2は縦長剥片の一側縁を加工した、直線的な刃部を持つ不定形石器である。4は一側縁に角度の浅い剥離を施し、他の一側縁に急角度剥離を施している。5は小形・縦長の剥片の全周に剥離を施したものである。

9は、断面方形の柱状の礫の一端を敲打に用いたものである。9は、偏平な面を機能面として利用した石皿である。

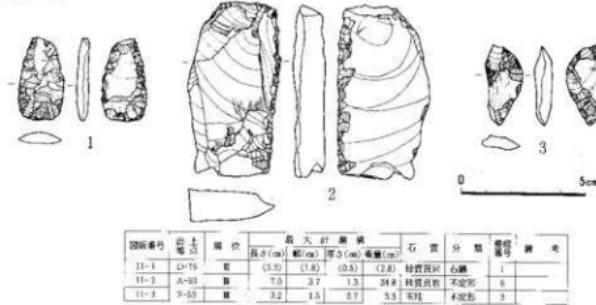
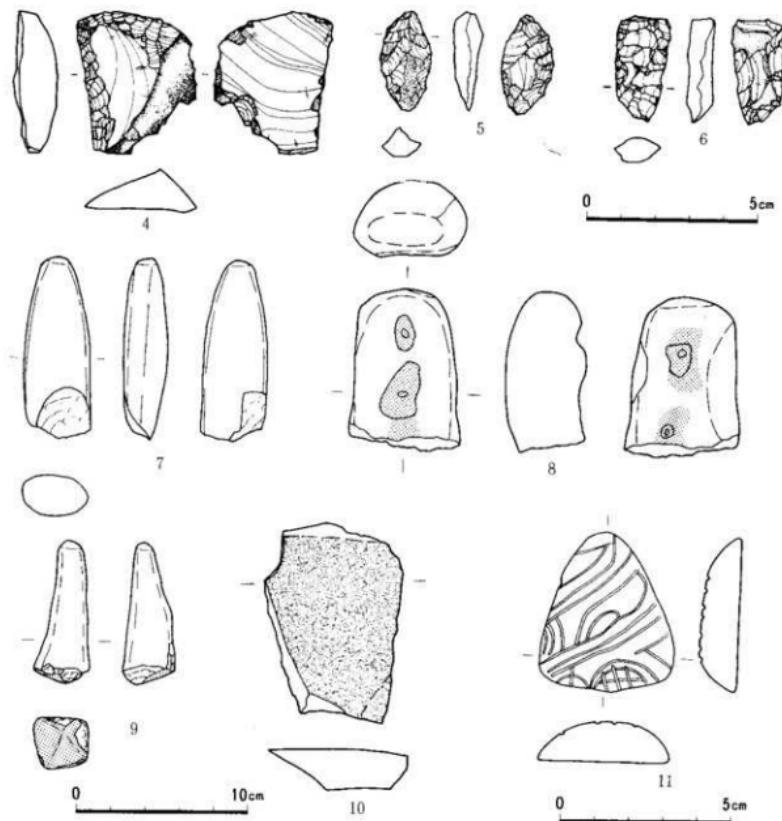


図11 遺構外出土遺物実測図3) 石器

八重久保(2)遺跡・八重久保(3)遺跡・幸神遺跡



回収番号	出土 場所	層位	長 さ(cm)	幅 さ(cm)	厚 さ(cm)	重 量(cm <sup>3</sup> )	石 質	分 類	備 考	通 考
12-4	V-63	層	4.3	3.5	1.3	17.8	玉理	不規形	5	次級
12-5	V-56	層	3.1	1.4	0.8	3.0	玉理	不規形	2	
12-6	V-68	層	3.2	1.6	0.8	4.8	玉理	不定形	4	次級
12-7	V-63	層	(16.9)	(2.8)	(2.5)	(16.1)	凝灰岩	無名石版	7	次級
12-8	V-57	層	9.7	6.6	4.7	441.0	玉理	無名石	8	
12-9	V-63	層	8.5	2.2	3.0	39.0	玉理	無名石	9	
12-10	V-65	層	12.1	8.2	3.0	396.4	玉理	無名石版	10	

回収番号	出土 場所	層位	長 さ(cm)	幅 さ(cm)	厚 さ(cm)	石 質	備 考	
12-11	V-57	層	5.8	3.4	1.2	19.7	凝灰岩	三角形岩版、表面剝離

図12 遺構外出土遺物実測図(4) 石器・石製品

石製品(図12-11)

三角形岩版が1点出土した。凝灰岩製である。三角形岩版は、青森県内では青森市小牧野遺跡、黒石市一ノ渡遺跡など特殊な組石、環状列石が存在する遺跡で多量に出土している。それ以外では青森市近辺で出土例がある。これまで南部地方では出土例は知られていない。

## 第4節 火山灰の科学的分析

### 八重久保(3)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

#### 1) はじめに

火山灰は土器のように固く焼き固められていないので、地層に堆積中に周囲の土壤によって汚染されたり、風化されたりする。その場合にはNa因子がすぐ影響を受ける。通常、火山灰の分析データを解析する場合には、まず、Na因子をみて、新鮮な火山灰であるかどうかを判断する。その後、K、Ca、Rb、Srの4因子を使って、十和田a火山灰か、白頭山火山灰かの判断を行う。本報告では八重久保(3)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析の結果について報告する。

#### 2) 分析結果

表1に分析データを示す。はじめに、Na因子を点検してみよう。分析値は0.782である。新鮮であれば、十和田aの火山灰も白頭山火山灰も1を越える。したがって、今回分析した資料は若干風化を受けた資料であることがわかる。そのため、K、Ca、Rb、Sr因子では対応する火山灰の領域からある程度ずれることが予想される。

図1には主成分元素であるKとCaの分布図を示す。試料は予想通り、十和田a領域を少しずれて分布している。しかし、この分布位置では到底、白頭山火山灰であるとは考えられず、本来、この試料は十和田a火山灰であったと推察される。

図2には微量元素であるRbとSrの分布図を示す。分析試料はかろうじて十和田a領域に対応することが分かる。

図3にはFe因子を比較してある。Fe因子でも今回分析した試料はやや風化した火山灰であるが、十和田a火山灰と推定される。

表 八重久保(3)遺跡火山灰

	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
8-4792	0.616	1.22	1.25	0.431	1.11	0.782

図1 K-Ca分布図

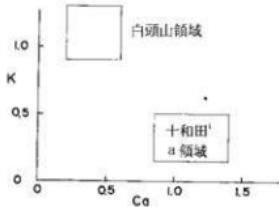


図2 Rb-Sr分布図

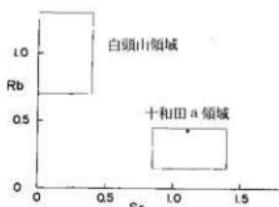
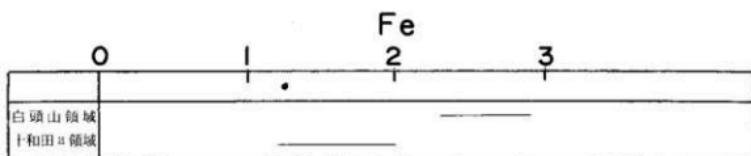


図3 Fe因子の比較



## 第5節 まとめ

本遺跡では、集落に直接関連する遺構は検出されず、遺物のみが出土した。地形も谷に当たるため、八戸久保(2)遺跡の外縁部に当たると考えられる。

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1984 『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』  
青森市教育委員会 1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』  
倉石村教育委員会 1997 『八戸久保遺跡発掘調査報告書』

## 第4章 幸神遺跡

### 第1節 遺跡の層序

遺跡内の堆積土はⅠ～Ⅷの8層に分層された。調査区東部は谷地形のため土層の堆積が厚かった。

- 第Ⅰ 層 (10YR2/1) 黒色砂質シルト。耕作土。
- 第Ⅱ 層 (10YR1.7/1) 黒色砂質シルト。八戸久保(2)遺跡のⅡa層に相当する。
- 第Ⅲ 層 (10YR2/2) 黒褐色砂質シルト。八戸久保(2)遺跡のⅡb層・Ⅲ層に相当する。下層とは漸移的である。
- 第Ⅳ 層 (10YR5/6) 中撒浮石層。調査区西端で厚く、約1m程の堆積が認められた。平均すれば層厚は40～50cmである。
- 第Ⅴa層 (10YR5/6) 暗褐色粘質シルト。φ2cmの南部浮石を含む。しまりよい。
- 第Ⅴb層 (10YR3/4) 暗褐色粘質シルト。
- 第VIa層 (10YR4/6) 褐色砂質火山灰。
- 第VIb層 (10YR5/8) 明黄褐色火山灰土。
- 第Ⅶ 層 (10YR8/2) 灰褐色火山灰土。八戸火山灰層。

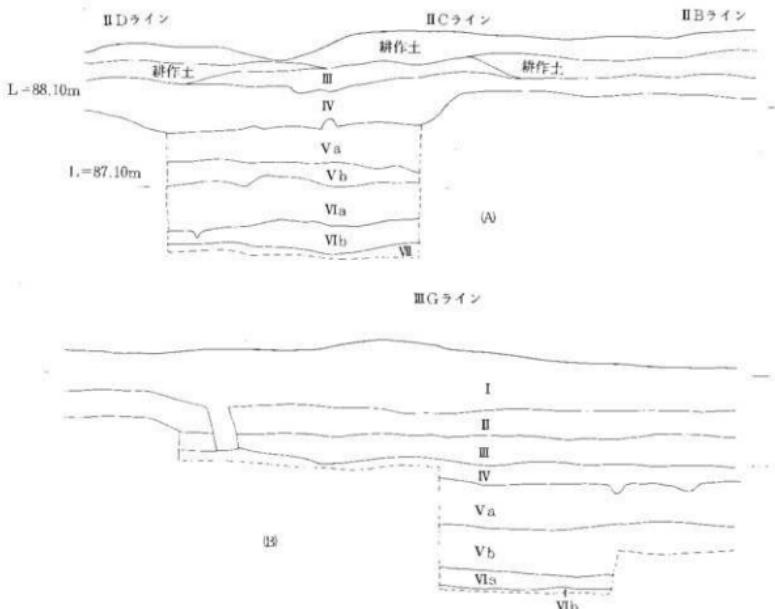


図13 基本層序

八戸火山灰以下は調査を行っていない。

遺物が出土したのはⅠ～Ⅲ層である。平安時代の遺物はⅠ～Ⅱ層、縄文時代前期か、それ以降の遺物はⅢ層、縄文時代早期～前期初頭の遺物はⅤ層から出土した。

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 1号土坑

【位置】 II S-16に位置する。

【確認】 IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

【規模】 確認面で長さ約3m65cm、幅1m15cm、底面で幅10cmを計る。深さは97cmを計る。

【堆積土】 4層に分層された。

【壁】 底面からやや外開き気味に立ち上がり、深さの2/3から開口部にかけて大きく開く。

【出土遺物】 第1層から縄文時代のミニチュア土器が出土した。後期または晚期のものと見られる。

【時期】 出土遺物からみて縄文時代晚期以前のものである。

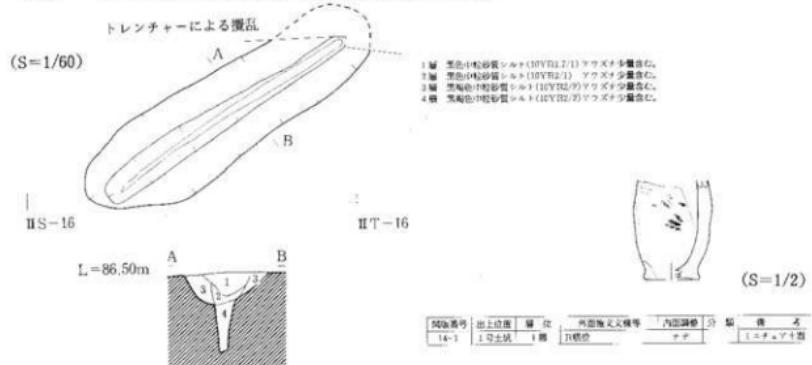


図14 第1号土坑実測図及び出土遺物実測図

### 1号溝

【位置】 II M-17～II O-18に位置する。両端は調査区外にのびる。

【確認】 IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。ただし、土層断面で確認した切り込み面はⅡ層中である。

【規模】 長さは調査区内で約10m、幅約1m20cmを計る。深さは確認面から約30cmである。

【堆積土】 黒色土を主体とする。2層に分層された。

【出土遺物】 堆積土中から縄文土器片が数片出土した。

【時期】 切り込み面・2号溝との位置関係からみて平安時代のものと考えられる。

### 2号溝

【位置】 II O-17～II P-18に位置する。西端は調査区外にのびる。

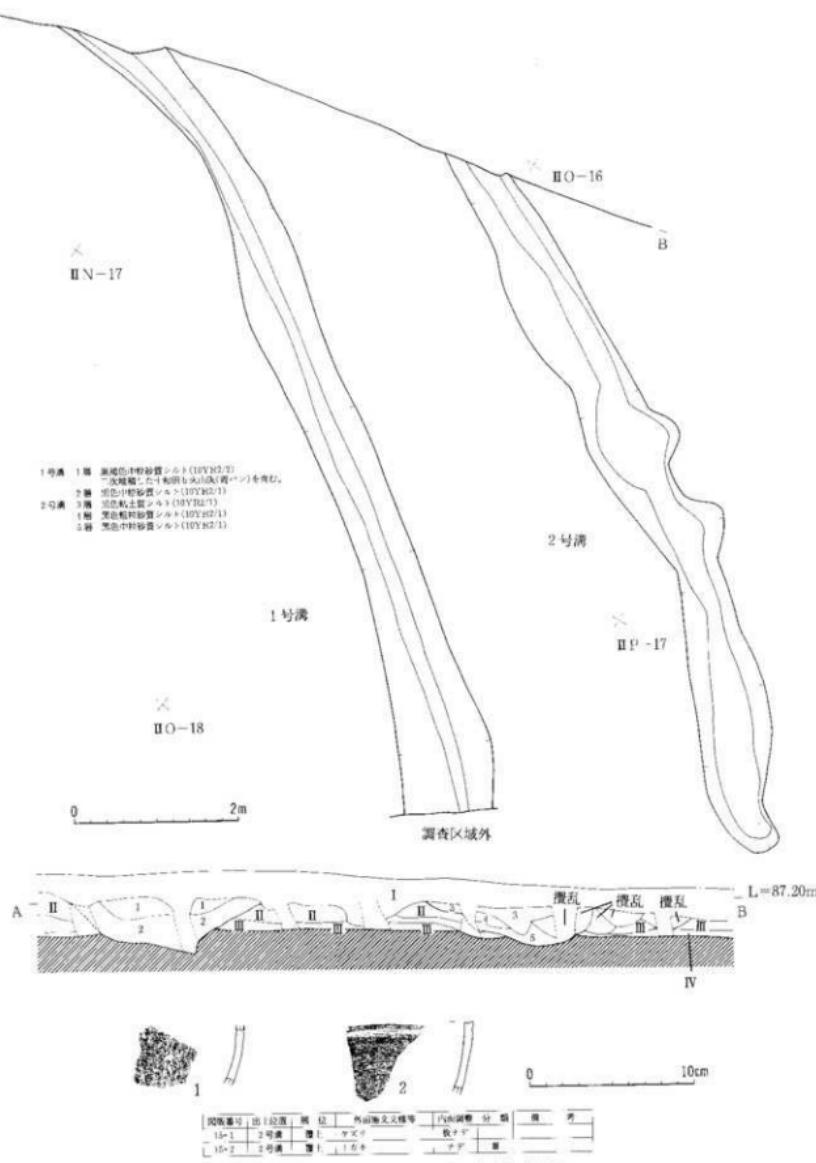


図15 第1・2号溝実測図及び出土遺物実測図

[確認] IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。ただし、土層断面で確認した切り込み面はII層中である。

[規模] 最大幅約1m20cm、確認面からの深さ約15cmである。

[堆積土] 黒色土を主体とする。

[出土遺物] 堆積土下位から土師器片・縄文土器片が出土した。

[時期] 切り込み面・出土遺物からみて平安時代のものと考えられる。

### 第3節 遺構外出土遺物

本遺跡からは、土器・石器等あわせて段ボール2箱分の遺物が出土した。

土器

縄文時代の土器（図16・17）

第I群土器 早期末～前期初頭の土器。（図16-7）

第V層から1点のみ出土した。

第II群土器 縄文時代前期中葉から前期末の土器。（図17-2～9）

2・4は口縁部に結節回転文が、3は口縁部に單軸絡状体6A類が施される。円筒下層b式である。5は、幅の狭い口縁部文様体に撫糸側面压痕が6・7は單軸絡状体1A類が施される。円筒下層d式である。

第III群土器 縄文時代後期の土器。（図16-10～17）

10～14は十腰内I式である。

第IV群土器 縄文時代晩期の土器。（図16-18～22、図17-23～29）

本群土器は晩期の中でも大洞C1式に属するものである。

土師器（図17-30・31）

平安時代の土師器が少量出土した。I・II層中から出土しており、包含層は耕作のため搅乱されたと考えられる。

石器（図17・18）

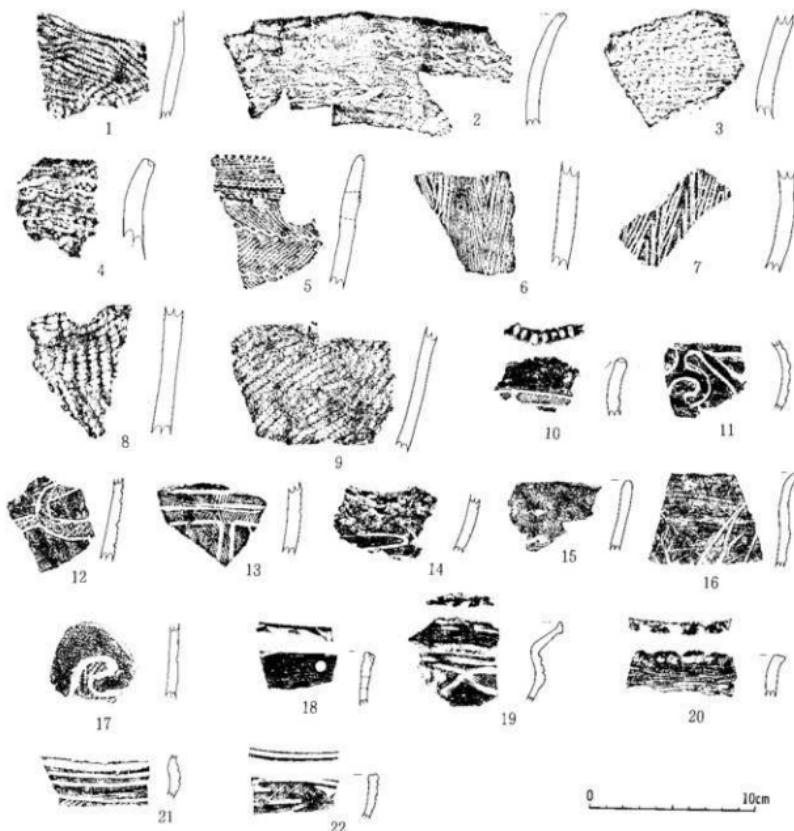
17点出土した。すべて遺構外から出土した。時期は不明である。

1は凹基・有茎鍬。2は凸基無茎鍬。5は縦長剥片を素材とし、一側縁にのみ刃部調整が施される縦型石匙である。4・6は縦長剥片を素材とした横型石匙。9・10はつまみ部を持たない石錘である。11～14は不定形石器である。12・13は粗い器体整形が施され、刃部調整は認められない。

14・15は磨製石斧である。14の刃部は直線的である。16・17は石皿で、いずれも整形は為されていない。

### 第4節 まとめ

本遺跡からは、縄文時代の土器片が出土したが、関連する遺構は認められなかった。本遺跡は縄文時代の集落外にあたる。平安時代の土師器、溝2条も検出されたが、住居等は検出されなかつた。付近に平安時代の集落の存在が予想される。



図版番号	出土箇所	種類	参考文献文書番号	内面記載	分類	期
16-1	H.C-19	縦	V.興上附 H.L-HR	ナゲ	I	
16-2	D.D-8	横	新規形輪文	ナゲ	Ⅲ	
16-3	D.D-17	横	新規形輪文	ナゲ	Ⅲ	
16-4	D.D-15	横	新規形輪文	ナゲ	Ⅲ	
16-5	H.N-18	縦	新規形輪文	レガホ	Ⅲ	
16-6	B.N-16	縦	平輪形輪文	L型ホ	Ⅲ	
16-7	I.N-16	縦	平輪形輪文	L型ホ	Ⅲ	
16-8	B.N-16	縦	U字輪文	ナゲ	Ⅲ	
16-9	D.D-16	縦	U字輪文	ナゲ	Ⅲ	
16-10	E.I-16	縦	U字輪形輪文	ナゲ	Ⅲ	
16-11	I.S-19	縦	花輪形輪文	ナゲ	Ⅲ	
16-12	I.G-19	縦	双輪形輪文	ナゲ	Ⅲ	
16-13	S.S-15	縦	双輪形輪文	ナゲ	Ⅲ	
16-14	E.I-18	縦	双輪形輪文	ナゲ	Ⅲ	
16-15	C.M-18	縦	ナゲ	ナゲ	Ⅲ	
16-16	B.F-18	縦	新規文	ナゲホ	Ⅲ	
16-17	I.O-20	縦	丸輪→L字→U字	ナゲ	Ⅲ	
16-18	E.N-18	縦	U字輪形輪文	ナゲホ	Ⅲ	
16-19	B.N-18	縦	U字輪形輪文	ナゲホ	Ⅲ	
16-20	B.C-18	縦	U字輪形輪文	ナゲホ	Ⅲ	
16-21	B.N-18	縦	花輪、U字、新規文	ナゲホ	Ⅲ	
16-22	B.N-16	縦	新規形輪文	ナゲホ	Ⅲ	

図16 遺構外出土遺物実測図(1) 土器

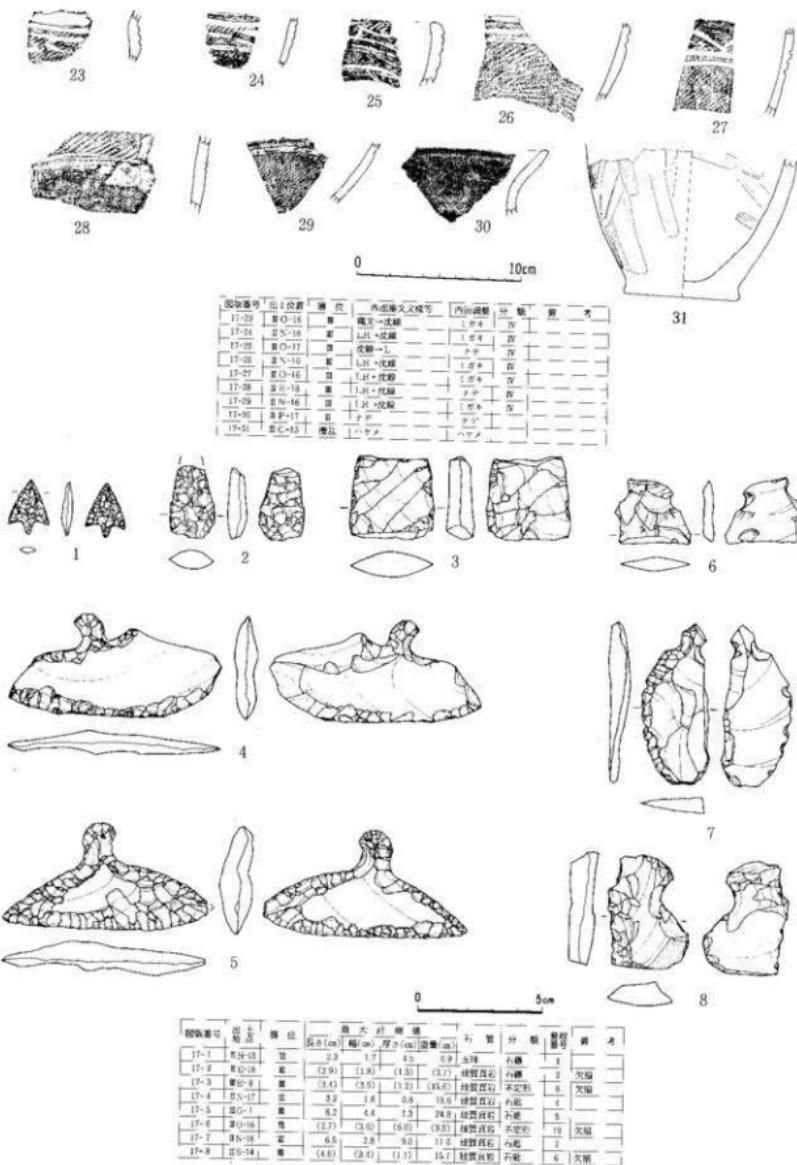
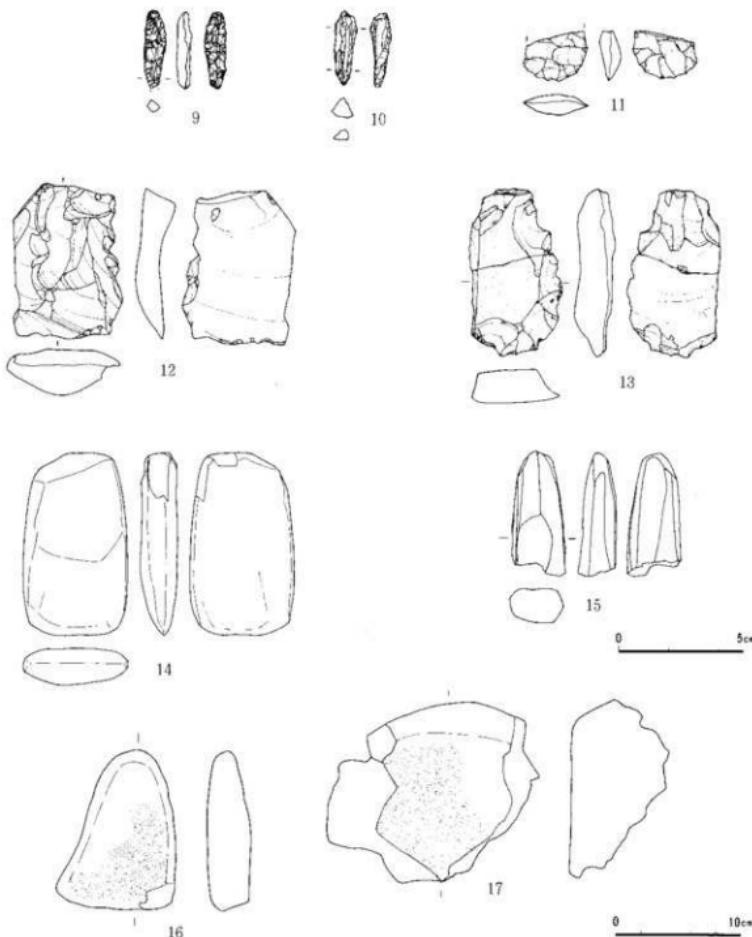


図17 遺構外出土遺物実測図(2) 土器・石器



図版番号	断面	種類	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	最大刃頭幅		石器分類	器種	備考
							横幅	縦幅			
18-9	Ⅲ-N-17	カクラン	2.1	8.0	0.0	16	1.6	0.0	石核	7	
18-10	Ⅲ-P-16	器	3.0	9.0	0.0	19	6.0	0.0	石核	9	
18-11	Ⅲ-S-18	器	(3.0)	(2.1)	(1.4)	(35)	(3.1)	(1.4)	石核	9	欠損
18-12	Ⅲ-P-13	器	6.3	4.5	1.0	34.2	1.0	34.2	石核	10	
18-13	Ⅲ-O-14	器	6.8	3.7	1.0	42.2	1.0	42.2	石核	11	
18-14	Ⅲ-T-16	器	7.4	4.7	1.5	66.2	1.5	66.2	骨質石斧	12	
18-15	Ⅲ-T-18	器	(5.0)	(3.2)	(2.0)	(25.0)	(2.0)	(2.0)	骨質石斧	14	欠損
18-16	Ⅲ-T-18	器	32.8	9.7	3.8	611.4	9.7	611.4	骨質石斧	15	
18-17	Ⅲ-T-13	器	24.8	16.8	7.5	1906.7	16.8	7.5	石核	16	

図18 遺構外出土遺物実測図(3) 石器

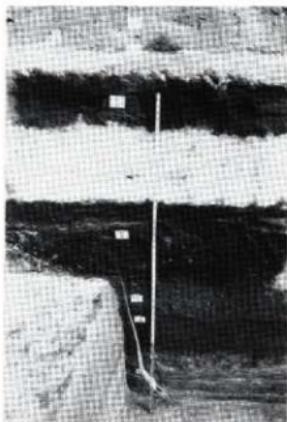




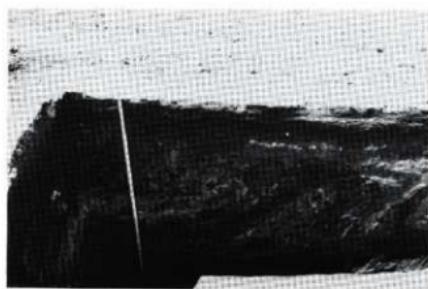
遺跡全景



1号土坑

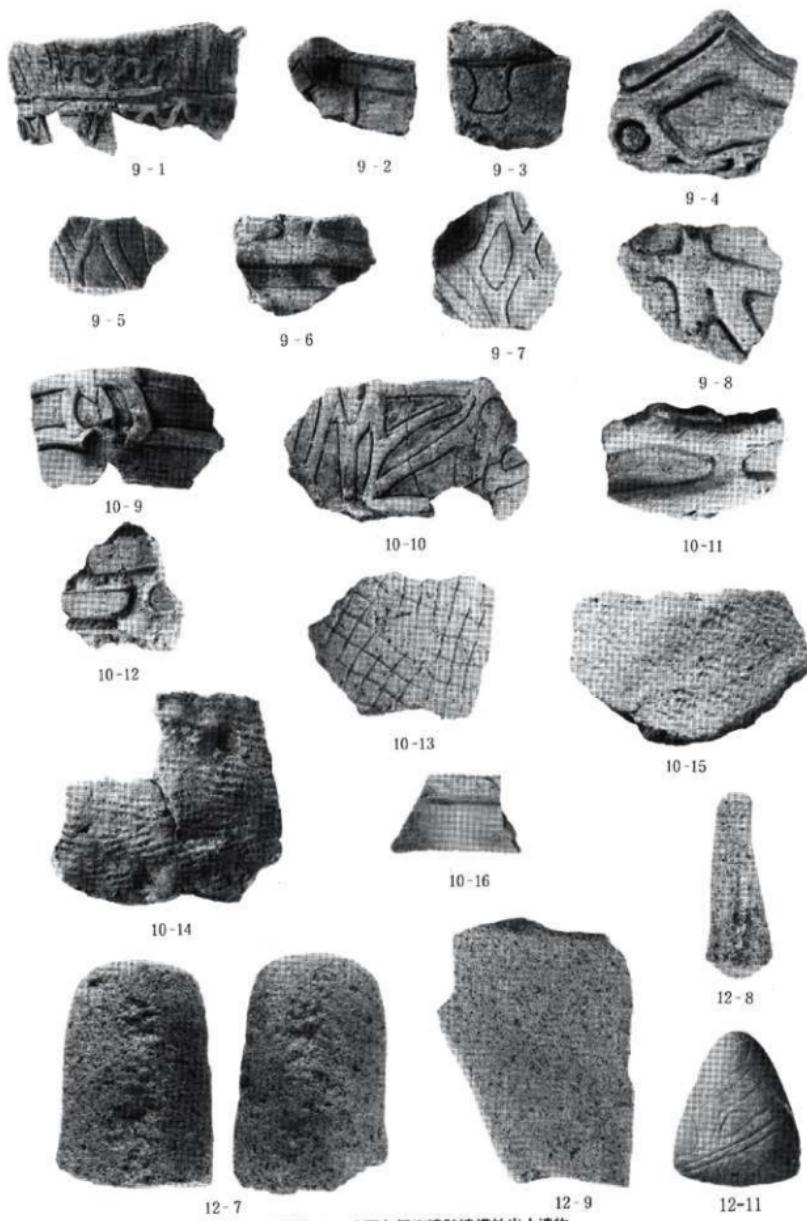


基本層序



地滑り層断面

図版 1 八戸久保(3)遺跡



図版 2 八戸久保(3)遺跡遺構外出土遺物



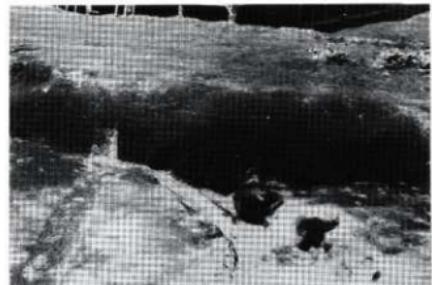
第1号土抗  
完 挖



第1・2号溝  
完 挖

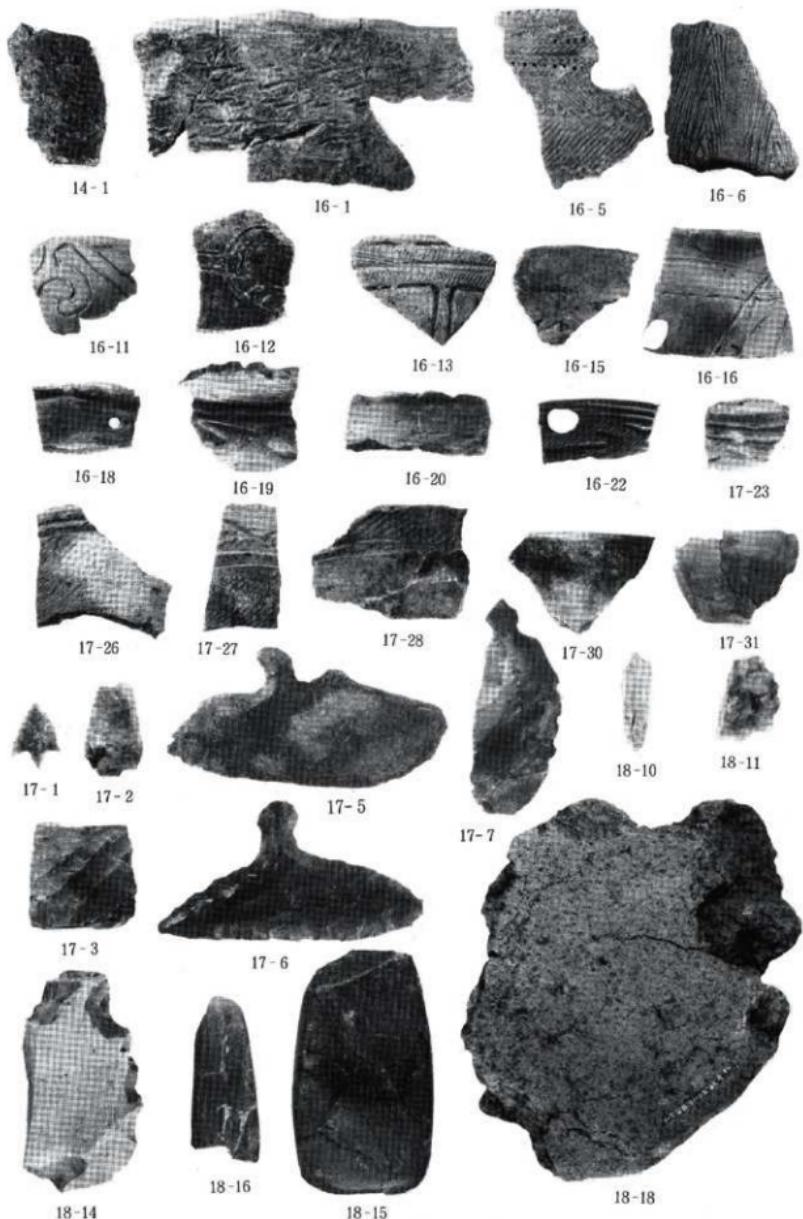


第1号溝  
土層断面



第2号溝  
土層断面

図版 3 幸神 遺 跡



図版 4 幸神遺跡出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	はっぱいくぼ	はっぱいくぼ	さいのかみ					
書名	八益久保（2）遺跡・八益久保（3）遺跡・幸神遺跡							
副書名	一般農道幸神線建設事業に係る遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第212集							
著者名編	中村哲也							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森県大字新城字天田内152-15 TEL 0177-88-5701 FAX 0177-88-5702							
発行年月日	平成9年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
八益久保 (2)遺跡	青森県三戸郡倉石村 大字中市字八益久保5、外	02449	66030	40度30分30秒	141度15分23秒	19970423 19960630	1,900m <sup>2</sup>	一般農 道幸神 線建設 事業
八益久保 (3)遺跡	青森県三戸郡倉石村 大字中市字八益久保30、外	02449	66032	40度30分20秒	141度15分21秒		1,700m <sup>2</sup>	
幸神遺跡	青森県三戸郡倉石村 大字中市字幸神33、外	02449	66031	40度30分00秒	141度10分00秒	19960423 19960625	1,450m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
八益久保 (2)遺跡	集落	縄文時代	住居跡 1棟 土坑 2 3基 捨て場 1ヶ所	縄文土器・ 石器・土製品	場の使い分けが認められる。			
八益久保 (3)遺	散布地	縄文時代	溝状ピット1基	縄文土器・ 石器・三角形岩版	八益久保（2）遺跡の外縁部にあたる。			
幸神遺跡	散布地	縄文時代 平安時代	溝状ピット1基 溝 2条	縄文土器・ 石器・土師器				

青森県埋蔵文化財調査報告書第212集

八戸久保（2）遺跡

八戸久保（3）遺跡

幸 神 遺 跡

-一般農道幸神線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書-

発行年月日 平成9年3月31日

発 行 青森県教育委員会

〒030 青森市新町二丁目3-1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038 青森市新城字天田内152-15

TEL 0177-88-5701 FAX 0177-88-5702

印 刷 所 東奥印刷株式会社

〒031 青森市古川一丁目17-5

TEL 0177-76-5361